おかえり。

たなかひまわり

私は乱暴に突っ込んであった一枚の紙を取り出し、洋平に差し出した。

目次

おかえり。

http://p.booklog.jp/book/91156

プロローグ
工房のある家
異変
小さな点
見えない壁
秘密の指輪
香水
疎外感
雨、降って……
抵抗
ふるさとの森
文字の滲む紙
エピローグ

著者 : たなかひまわり
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/tanahima2327/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/91156

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/91156

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ

プロローグ

　夕方の海辺。
　まだ空高い陽は白に近く、眩しく照っている。

　時の経過と共に、陽は巨大な線香花火のように輝きだし、空を水平線と平行に淡いオレンジに変えていく。

　海には陽から伸びる一筋の光。
　その光も白から橙へ。

　やがて陽は水平線にその一部を隠すと、程なく小さな光の点となり、命を絶つかの如くすっと存在を消した。
　海に渡る橙の筋もなくなり、一色の静かな凪となった。

　薄暗い凪いだ海。
　その空に、明るかった時には見えなかった富士の頂上が、くっきりと姿を現した。

　光は様々な物をすべて視界に映し出すと思っていた。
　だが、明るいが故に見えないものもあるのだ。

　周囲の状況に惑わされて見失っていたものに、私はあの日、ようやく気が付いた……。

工房のある家1

「今日は何、作ろう」

　電動ろくろの上に練っておいた半磁器土で山を作り、私はバケツの水に手を浸しながら考えていた。

「最近ちょっと客足が途絶えてるから、小物増やしても置くとこないんだよな」

　私は作品で溢れかえった棚を見ながら溜め息をついた。売れないせいでの溜め息ではなく、物を置くスペースのないことへの溜め息だ。

「玄関にかけてある看板が小さ過ぎるのかな。フリーマーケットはまだ先だし、外にテーブル出して農家みたいに無人販売してみようかな」

　古い家々が立ち並ぶ住宅地なので、それくらいのことをしても景観が悪くなるとは思えない。仮に盗まれたら、それだけ魅力的な作品だったんだと自信を持てばいい。無人販売は我ながらにいいアイデアだと一人でふっと笑いながら、私はろくろのスイッチに手を伸ばした。

　私の家には工房がある。今住んでいる二階建ての一軒家を借りた時、同居人が私の為にそのスペースをあてがってくれた。自転車が置ける広い玄関を入ってすぐ右側に、作業のできる場所がある。

　靴を脱いでスリッパに履き替えて工房に入るのだが、スリッパを履かないと靴下が粘土や釉で大変な事になる。どんなに掃除をしたつもりでも靴下は汚れる。同居人曰く、「幼稚園児並みの掃除」を私がしているからだそうだ。失礼だと反発したいところだが、同居人が掃除をすると、同じ工房とは思えないほど床がぴかぴかになる。そして私は、渋々批評を認めるはめとなる。

　工房の窓際には、ポータブル電気陶芸窯と手動ろくろを置いた作業台を設置してある。中央には電動ろくろ。それと並べて置いてある丸い小さめのテーブルと椅子は、お客様をもてなす時に使う。作業台に対面するように、陶器や材料を置く為の木製の棚がある。これは同居人の手作りで、あえて言うならこの棚が、この家にある唯一の仕切りだ。私は一人でいる時間の大半をここで過ごす。

　私は二十四歳。陶芸暦も二十四年。陶芸が大好きで、生まれた時から陶芸に親しんでいたと自負している。

幼い頃、当時家族と住んでいた家の近くに祖父の工房があり、遊びに行っては祖父の手ほどきを受けていた。粘土の練り方から、ろくろの扱い方、さまざまな釉の特長、窯での焼き方など、お弟子さんに教えるのと同じように祖父は私に教えてくれた。一通り基本を身につけてからは、粘土を好きなだけ使い、自由に作らせてもらった。そして、インスピレーションの湧くままに、私は次々とコレクションを増やしていった。

ところが去年の冬、大好きだった祖父が病気で亡くなった。突然だった。追い討ちをかけるように、祖父が大事にしていた工房が人手に渡った。私はショックのあまり、あれだけ没頭していた陶芸に手をつけることが出来なくなった。

腑抜けのようになってしまった私をなんとか立ち直らせようと、同居人は前に住んでいた２ＤＫのアパートを出て、工房スペースを作れる家を探そうと私に提案した。そしてこの家を、四十五件目にして見つけてくれたのだ。

工房のある家2

　自分の工房を持ち、粘土に手を添えることで、悲しみを思い出さない時間を増やすことが出来た。苦しかった心が徐々に癒えていき、二十四時間いつでも陶芸が出来る環境だということにふと気付いてから、私の創作ペースは以前にも増して上がっていった。

　初め、陶芸を仕事にしようなどとは全く思っていなかった。作りたいから作っていたら、買いたいという奇特な人が現れ、常連さんが一人ついてから二人三人とお客が増えるのに、そう時間は掛からなかった。材料費にほんの少し上乗せした値段で売っているので利益はほとんどないが、それでも毎月の小遣い程度にはなった。

　同居人には申し訳ないと思っていたが、欲を出すとろくな作品が作れないような気がして、私はいつも「ごめんね」と謝りながら創作重視の陶芸を楽しんでいた。同居人はそんな私をいつも温かく見守ってくれている。

　同居人とは私の最愛の恋人、六つ年上の坂本洋平の事だ。

「おちょこ……にしようかな」

　冬の足音が聞こえそうな十一月。今から作れば本格的な冬を迎える前に、新作お猪口で二人で乾杯といけそうだ。

「とっくりも新しく作ろう。赤土で作ったのしかないもんな」

　今回は、濁りのない真っ白なお猪口がいいと思った。私は作る物を決めると、乾きかけた手をもう一度水で濡らし、粘土にも指先から滴を垂らした。

「半磁器土は扱いが難しいんだよね」

　土に腰がない為、しっかり両手で挟んで引き上げる。そうしないとなかなか高さが出ず、だらんと下に下がってしまう。おちょこは初心者向けの作品だが、粘土が変わるだけで難易度が増すのだ。でも、粒子の細かさが好きで、私はこの土をよく使う。

「こんなもんかな」

　とりあえず、思い描いた通りのおちょこを五個成形した。同じ形でも、釉をつけるとそれぞれが違った表情を見せるので、並べておくだけでも楽しめる。

「今度はとっくりだ」

　粘土をろくろの上に足した時、向かいの家から元気のいい声がした。午前保育を終えて幼稚園から帰ってきた雄太君だ。

　雄太君はいつも玄関のドアを開ける時、近所に響き渡る大声をあげて「ただいま！」と言う。曜日によってその声のする時間帯が違い、水曜日の今日は十一時半だということを知らせてくれる。雄太君がお弁当を食べて帰って来る日でも一時頃なので、その声を聞くと私のお腹は条件反射のように鳴る。

「もうお昼か……何か食べるものあったかな」

　一人だと食べる事に無頓着になる私は、そう考えつつも創作する手を休めなかった。再び全神経を粘土に集中させる。すると、この時間には聞こえるはずのない声が耳に入ってきた。

「ただいまー」

　洋平だった。

工房のある家3

「あれ？　おかえりー。ごめん！　ご飯まだ作ってないや」

　私は窯の向こうに立っている洋平を見て言った。

「ただいま。ご飯って、いつも俺が作るだろうが」

　ガスの火が苦手な私に代わり、料理が得意な洋平がほとんど食事を作る。時間のある日に彼が多めに作り、冷凍しておいてくれるのだ。それを私が毎日いろいろと組み合わせて夕飯のおかずとして出していた。

「サラダは作ってるじゃん」

　火を使わないものであれば私にだって作れる。私は口を尖らせながら反論した。

　小学生の頃、私は料理の真似事をしていてフライパンの油に火をつけてしまい、立ち上った炎で腕に軽度だが広範囲の火傷を負った。それ以来、火の点いたガス台に近づくだけで足がすくむようになった。よって、炒め物や揚げ物、煮物の類が作れなくなった。

「アハハ、そうだな」

　事情を理解している洋平はそれ以上何も言わず、靴を脱いで工房に上がった。

「そういえば、今日はどうしてこんなに早いの？」

　スリッパを履いてそばに来た洋平に訊いた。

「言わなかったっけ？　今日は半休を取ってあるんだよ」

　洋平はさらりと答えると、「今日は何を作ってるの？」と話題を変えた。

　半休のことは気になったままだったが、私の頭の中は陶芸へと自動的に切り替わった。

「今日はねー、お猪口ととっくり。お洒落なの作るからね」

　陶芸の話となると、気分がとても高揚する。洋平が陶芸に興味を示してくれる事が何よりも嬉しい。

「里奈は陶芸だけはプロ級だからな。教室でもやればいいのに」

　早い帰宅で気持ちに余裕があったのか、洋平は「ちょっとやらせてみ」と私の隣に丸椅子を持ってきた。そして、袖を肘までまくり、バケツの水に両手を入れた。

「冷めてー。いつもこんな水でやってんの？　根性あるなぁ」

　洋平は大きな声で独り言を言った。私の返事の有無は関係ない。洋平はお喋りなので、いつも動作と口が連動する。体に厚みがある分、声も太く響く。

「陶芸だけは、って何よ。それに教室開くんなら窯がもっと大きいか、台数ないと無理だよ。生徒さんの作品、いっぱい焼けないし」

「大きい窯っていくらするんだ？」

「百万くらいかな」

「う、そっか」

「それに自分が無になれる瞬間が好きでやってるようなもんだからね。人に教えるのはちょっと違うんだよ」

「なるほどね……とっくりはこれからなの？　俺が作ってやるよ」

　私がろくろのスイッチを入れると、洋平はすぐさま半磁器土に手をつけた。これまでに数回ビアグラスや茶碗を作ったことがあるせいか、自信ありげな顔をしている。

「あれ？　いつもと感触が違うぞ。すぐにへなるってどういうこと？」

　洋平は粘土に触れるとすぐに戸惑い始めた。

　彼が半磁器土を使うのは初めてだった。陶芸自体それほど経験があるわけではない洋平が、半磁器土でとっくりを作るのには無理がある。

工房のある家4

「あ、その粘土、成形が難しいんだよ。慣れが必要なの」

　私がそう言うと、勝気な洋平はムッとしながら、「俺に出来ない事はない」と言って更に粘土と格闘した。しかし、彼が焦れば焦るほど、粘土は何度も重力に従う。

　しばらく黙ったまま、私は洋平の様子を見ていた。だが、手持ち無沙汰も手伝って、なぜ半休を取ったのか知りたい気持ちが再び湧き上がってきた。

「ねね、どうして半休なんか取れたの？　いつも、休みが取れないーってぼやいてたのに」

　すると、洋平は回転する粘土から手をわずかに浮かせて私を見た。

「ん？　それがね、予定してた相談者が急に来れなくなっちゃったんだよ。今日明日に集中して三人も。せっかくだから誰か休暇を取ろうって事になって、ずっと休みなしだった俺がもらったんだ」

　洋平はセラピストだ。生活や自分自身に悩みを抱えている人の精神的自立を手助けしている。

　洋平は休暇の訳を説明すると、もう一度粘土に手を添えた。でも、一呼吸置いたせいで集中力が途切れてしまったのか、再びへなへなと高さを失っていく粘土を見ながら「ダメだぁ、交代」と力の抜けた声を出した。

「ええー、もうおしまい？　一緒にやろうよ」

　私は、椅子から立ち上がりかけた洋平を捕まえてもう一度座らせた。それから横にぴったりくっついて、彼の手に自分の両手を重ねた。

「こうやって、しっかり両手で挟んで引き上げるんだよ」

「お、ホントだ。高くなってきた」

「そうでしょー」

　洋平の意志に背いていた粘土が、徐々に高さを増していった。私達は顔を見合わせて笑った。

「なんかさ、こうやって二人で作ってるのって、ゴーストのワンシーンみたいじゃない？」

洋平が急に声のトーンを下げ、囁くように言った。

主人公の二人が回転するろくろの前で二人前後に座り、重ねた手を粘土でヌルヌルさせながら、首筋にキスをする……。

私も今ちょうど、思い浮かべていた映像だった。

「ああ、そうかも……洋平、やらしい……」

「やらしいって、おまえ、何、想像してんの？」

「ん？　何って……」

「里奈はすぐエッチなこと考えるからなぁ」

「ちょっとー、裏切らないでよー」

「あ、認めた」

「うるさい！」

「顔、真っ赤だよ」

私は、洋平の企みに引っかかってしまった。半ば当たっていただけに動揺が収まらず、眉間に皺を寄せて脹れているしかなかった。

「俺らは？」

「エッチじゃない！」

私は必死で不利な状況を立て直そうとした。

「どうすりゃエッチになるの？」

「知らない！」

　怒っている私を面白がるように、洋平は不適に笑っている。

「いいか」

　洋平は悪乗りしだした。自分が座っている椅子を私の真後ろに持ってきて、背中から両手を回してきた。もう一度バケツに手を浸してから私の手に自分の手を重ねると、二人の開いた足の間でしっとりとした粘土を上下にゆっくり滑らせた。

「なんかぞくぞくしない？」

　洋平は私の耳元で吐息混じりに言った。首筋にキスまでしてきた。ちょっと危ない雰囲気になってきて、私の怒っていた気持ちもあやふやにどこかに消え始めた。

　えー……ここで？……手が粘土だらけだよ……どうするの？……。

　私が少しだけ怪しい気持ちになったその時だった。

「昼間から何してるんだ、俺ら」

　洋平は先程までの甘い態度から一転して日常の顔に戻った。風船がぱちんと割れるように私の意識は現実に戻された。

「アハハハ！　あーあ、また粘土がへなっちゃった。これじゃ、とっくりは無理だね」

　私は自分の心理状態を悟られないように、少々大袈裟に笑った。

　洋平は、「湯飲みに変更だな」と言いながら、まだ回り続けている粘土に指先で模様をつけた。

　ある行為は未遂に終ったものの、どっしりと構えた愛の結晶が誕生した。とっくりではなくなったが、思い出深い一品となったことには代わらない。

「手、洗ってくる」

洋平は腰を上げると、工房を出て洗面所に行った。洗面所は棚の裏側の、風呂場とトイレを挟んだ間にある。

「ここに水道あるのに……」

小さな手洗い用の水道が工房にはある。たまに洋平も使っているはずなのに、咄嗟に忘れてしまったのだろうか。

棚の向こう側に消えていった洋平にそう言いそびれた私は、出来上がった作品の底を紐で切り、乾燥棚へそっと移した。

洋平は毎朝八時に家を出て、夜の十二時近くに帰ってくる。それに加え、ここ三週間くらいは休みが取れなかった。更に、困っている人がいると放っておけない性質で、プライベートの時間でさえも、その人達にどんなアドバイスをするかを絶えず考えている。大した悩みのない私は、こうした時間、いつも放っておかれる。

洋平が明日も休みということで、欲求不満気味の私の遊び心に火がついた。浮き立つ気持ちを抑えながら、洗面所にいる洋平のところに行った。

「洋平。ドライブ、いこ！」

付き合いたての頃は毎週のように遠出をしていたが、今は数ヶ月に一度行ければ良い方だ。

「ドライブ？　そうだな。たまには出掛けるか」

　開放感からか、洋平も私の提案をすぐに受け入れた。

「どこ行く？」

　洋平の快い返事に嬉しさを隠しきれず、私は興奮気味に尋ねた。行き先はたいてい、洋平が決める。

「どこ行こうか。里奈はどこがいい？」

　洋平は珍しく私に行き先を聞いた。こういうことは滅多にないので、私は一瞬言葉に詰まった。しかし、「どこでもいい」と言ってしまっては、優柔不断なようで自分が許せない。

「えっとね、えっとね……」

　私は過去に行った場所や、テレビでしか見たことのない場所、友達が話していたデートスポットを頭で思い巡らせた。

　江ノ島展望灯台、横浜中華街、浅草花やしき、横須賀ソレイユの丘……。

　しかし、どこも行きたい所ばかりで一ヶ所に絞ることが出来ない。

「ゆっくり出来るからどこでもいいぞ。温泉にでもいくか？」

　ここから日帰りで行ける温泉はけっこうある。洋平は車の運転が好きなので、片道二時間くらいの場所なら、楽に日帰りコースとして考える人だった。

「温泉好きだけど、二人で入れないんだもん」

　広くて足のゆったり伸ばせる温泉は私も好きだった。でも、せっかく二人で過ごせる日に別々の風呂に入るというのはあまり気が進まない。

「部屋に露天風呂が付いてるところもあるから、そういうとこ探せればいいんだけどな」

　洋平は心当たりが思い浮かばなかったせいか、そう言ったきり温泉にはこだわらなかった。タ

オルで手を拭きながら「どうしようか」と、再び私に行き先を訊いた。

「うーんと、うーんと」

　私は少々焦りながら考えた。時間がたっぷりあるのだから、どうせだったら遠出がしたい。

「海でも山でも川でもお好きなところへお連れしますよ」

　洋平は、遠足前でそわそわと落ち着きのない子を見るような目をして言った。タバコに火をつけながら、決して急かすことなく私の答えを待っている。

　私は「どうしよ、どうしよ」と眉をひそめながら洋平に助けを求めた。

「そんなに悩むことないじゃない。ポンとフィーリングで……ささ、どうする？」

　洋平はあくまでも私に答えさせるつもりだ。いつもと違う展開に、私は益々焦ってしまう。

「じゃあね……あそこがいい！」

　ふっと瞬間的に頭にひらめきがあった。前に一度訪れたところで、もう一度行ってみたいと思っていた場所だ。だが、景色ははっきりと思い出せるのに名前が出てこない。

「あそこってどこだよ」

「えっと、川があって、小さな吊り橋もあって、お蕎麦が食べられるレストランがある……」

「道の駅？」

「あ、そうそう！」

　私が言っている道の駅とは、国道４１３号沿いの山梨県道志村にあり、村の特産品などが売られている、田舎の洒落た駅舎をイメージした観光施設だ。

「去年、行ったんだっけ」

「うん。もう一回行って、あったかいうどん食べたい」

「うどん？　そこって蕎麦が名産なんだよ？」

「え？　うどん、なかったっけ？」

「あったかもしれないけど、あそこ行ったら手打ち蕎麦でしょう」

「そか。じゃあ、あったかい蕎麦食べる」

「なんでも好きなもの食べればいいけどさ。じゃあ、道の駅に決まりな」

　目的地で何を食べるかまで決めると、私達は二人で洗面所を後にした。

　私は作業用の汚れてもいいトレーナー姿だったので、着替える為に急いで二階に上がった。二階と言ってもダブルベッドとタンスが置けるだけの広さしかないロフトのようなもので、階段は玄関を入ってすぐ目の前にある。

　タンスを開け、しまってある服を眺めながら少し悩んだ後、チャコールグレーの長袖Ｔシャツとレースの付いた白いキャミソールを出した。そして、引き出しからティファニーのラビングハートペンダントを出して、両手で髪をかき上げながらチェーンを首の後ろを通した。このペンダントは、去年のクリスマスに洋平からプレゼントされたものだ。

　壁に貼り付けてある鏡の前に立った。そこに写ったキラキラと光を反射しているシルバーのペンダントは、今の私の気持ちそのものだった。

異変1

　家に横付けしてあるビターショコラのキューブに乗り込んだ私達は、１６号線を橋本方面に向けてひたすら走っていた。道路沿いの木々の葉は、赤錆色やたんぽぽ色に染まっている。私は、片手で運転している洋平の空いた方の手に自分の手を重ねながら、それらの木々に心を癒されていた。

　４１３号線に入ってしばらくすると、低い建物と山の緑と路面の灰色しかない、のどかな田舎の風景となった。

「道の駅って、道志だけじゃないって知ってた？」

　城山ダムを通過中、洋平が私に尋ねた。

「ん？　知らないよ。道志にあるあの建物の名前が道の駅っていうんじゃないの？」

　私は景色から洋平に視線を移す。

「違うよ。全国に八四五ヵ所あるんだよ。まだまだ増えるだろうけど」

　洋平は視線を前に向けたまま、顔の角度だけ少々私の方に傾けた。

「えー！　そんなにあるの？」

　私が素っ頓狂な声を上げると、洋平は「関東には一二三駅あるんだよ」と、うんちくの一つを披露した。

「じゃあ、東京にもあるの？」

「もうすぐ八王子にできるよ。あれ？　もう完成してたっけかな」

「すごい！　山の方にしかないと思ってたのに」

「八王子インターの近くだから、高速降りてすぐにトイレとか使いたい人の為に作ったんじゃないかな」

「そうなんだ。今度、行ってみたい！」

　私はそう言い、洋平と一緒に味わえる楽しみがまた一つ増えた、と思った。

　海でも山でも自然の景色を眺めるのが私は好きだった。洋平が忙しくて一人の時間が長く続く時、淋しさを紛らわせる為に車でよく出かけた。澄んだ空気の中に身を置いて、波の音や小鳥のさえずりを聞いていると、心が洗われるような気がして穏やかになれた。

　でも、ぽかぽかした太陽の光を浴びていると、彼と一緒に来たかったという想いが浮かんできてしまう。だから、ゆっくりと流れる時間の中で二人して溶け込んでいられる時が、私にとって何よりの幸せだった。

　目に映る光景は、次第に、見上げるほどの山ばかりとなっていった。

「山がキレイ」

　私は四方を取り囲む山々をうっとりと眺めた。木の種類ごとに赤や黄、緑色の葉の濃淡が変わり、控えめながらも自分を主張している。

「紅葉がピークだね。タイミングいいや」

　洋平も車のフロントガラスに広がる景色を見ながら言った。

「カメラ持ってくればよかったかな」

「そうだな」

　そう会話したものの、私達はカメラを持ち歩く習慣がなかった。だから私はいつも想い出にしたい景色を、目の裏にはっきりと焼きつくまで見つめる。私の頭の中のアルバムに収めるのだ。

異変2

　ほどなく道志の道の駅に到着した。駐車場に入っていくと、平日だというのにほぼ満車に近い状態だった。天気がいい上、紅葉が盛りのせいか、授業を自主休講したような若いカップルがやけに目に付く。

　洋平がゆっくりと車を進ませている横で、私は止められる場所がないかと辺りを見回していた。が、なかなか空いている場所がない。ようやく見つけた空スペースは、駐車場入り口から一番奥まで入ったところにあった。しかも、私が一生懸命探していたにも関わらず、運転をしていた洋平が先に見つけた。

　車を停め、洋平が先に降りた。

「空気が締まってる感じが、なんかいいね」

「ホントだね」

　私も車を降り、洋平の言葉を受けて深呼吸する。肺までも一気に冷えそうだ。

　助手席のドアを閉めた後、車の前を廻り込んで洋平のそばに行った。

「雲から光が差してるよ」

　私は、正面を見た先にある空を指差した。雲の隙間から、太陽の光が大地に向かって幾筋にも伸びている。今にも天使が舞い降りてきそうだった。

「幻想的だね」

　洋平の言葉に、私は「うん」と深く頷いた。共感し合える事がとても嬉しい。

　再び地上に目線を下ろし、私達はレストランの前を通過した。どこに行っても、洋平は必ずぐるりとその辺を見て廻る。休憩しようと口では言っていても、まずは歩く。私は彼に付いていく。それが楽しいのだ。

「吊り橋ってどこにあるんだっけ？」

　私はここに来る時に、吊り橋を渡りたいと思っていた。

「レストランの裏だよ。行ってみる？」

「うん」

　前に訪れた時、道の駅には大粒の雨が降っていた。おまけに強い風も吹いていた。横から吹き付ける雨に、少し歩いただけで傘を差している意味もないほど全身びしょ濡れになった。だから散策を諦めて、レストランから窓越しの景色を眺めるだけに留めたのだ。

「意外と小さいんだね」

　吊り橋のすぐ手前で洋平に言った。以前、パソコンでこの吊り橋の写真を見ていて、もっと大きくて立派な橋なのかと思っていたのだ。

「こんなもんだよ。川が広いわけじゃないし、高さもないんだから」

　洋平があっさり言った。

「そっか。小さくてもいいや」

　私もさらりと流し、洋平の腕に掴まった。それを合図に洋平は、「よし、行こう」と言って、一歩前に踏み出した。

　洋平の歩調に合わせ、高揚感も手伝って私は体を上下に弾ませた。短い吊り橋が、これ以上は揺れないだろうというくらい大きく波打っている。

「おまえなぁ、二人で同じように足を踏み出したら、余計に吊り橋が揺れるんだぞ」

　私は科学の匂いがする話に「なんで？」と突っ込んだ。

異変3

「吊り橋の固有振動数と足並みが揃うと、人間と橋が一体化して振り幅が大きくなるんだよ」

　洋平に何を聞いてもたいてい専門的な答えが返ってくる。

「そうなんだぁ」

　ひどく感心するも、私の頭に知識として残るのはほんの数パーセントだ。難しすぎる。でも、洋平の博識振りが見たかった。

「歩調を合わせると人間の重量以上の比重が掛かるから、吊り橋のケーブルが切れることだってあるんだからな」

　洋平の説明は続く。

「怖いね。でも揺れた方が楽しくない？」

　行為を制止させられるほど、私の悪戯心は煽られる。

「子どもだなー」

　洋平は呆れた声を出した。

「子どもでいいんですぅ」

　開き直った私は、その場で体に弾みをつけて更に橋を揺らした。

「しょうがねぇな。ほら、弾んでないで見てみ。水が透き通ってる」

　洋平は橋の下を流れる川を指差した。

「うわぁ、ホントだねー。魚いるかな」

　私は身を乗り出して橋の下を覗いた。陽の光を反射させている川の水は、微かに表面を波立たせながら下流へと流れている。眩しくて、魚を見つける事は出来ない。

　洋平が自分の頭を私の頭に突き合わせてきた。

「何かいそうだけど見えないな」

　真横にある洋平の顔を見ると、眩しさに細めた目をこちらに向けた。目尻に皺を寄せた表情がおかしくて、私は声を上げて笑った。

　ケタケタ笑う私に洋平は、何がそんなに可笑しいの？　と曖昧な笑みを浮かべた。そして、私の額に自分の額をこつんとぶつけた。

「さて、戻って飯にしよっか」

「うん」

　お昼少し前ということもあり、私もほどほどにお腹が減っていた。

　洋平が手を差し出す。大きくて温かい手だ。洋平から手を繋いでもらうと、私は出会った頃のように胸がドキドキする。心が温かくなって、にやけた顔が戻らなくなる。何年経ってもきっとそうだ。きっと、そうに決まってる。

　レストランのある建物に入ると、正面に食事を受け渡しするカウンターがある。洋平は「何、食おうかな」と、カウンター上部に貼られたメニューを見上げた。

　私はカウンターの手前、少し脇に置いてあるワゴンに入れられたお土産に目を奪われていた。建物内にはレストランと同じくらいの規模のお土産コーナーが併設されている。

「どした？」

　洋平が不思議そうに訊いた。手を繋いでいる私が、洋平を引き止めるような形で立ち止まったからだ。

異変4

「クレソン饅頭に、クレソンせんべいだって。クレソンうどんとかもあるよ」

　他にも、生クレソンやクレソン紅梅、あめＤＥクレソン、粉ＤＥクレソンなどがある。私は「何？　このクレソンのオンパレード」と茶化した。

「道志はクレソンの名産地なんだよ、知らなかった？」

「知らないよー。この前来た時も売ってた？」

「売ってたよ。ここにあった。今回だけ気が付いたの？」

「うん」

　前回は、雨を逃れた建物の入り口で、濡れた体を小さなハンカチで拭うのが精一杯だった。売られている物など見ている余裕などなかったのだ。

「クレソンは貧血とかにも利くんだよ。里奈、時々ふらふらしてるから、食べた方がいいかもよ」

　洋平は食物の栄養や効能にも詳しい。

「そうしようかな。最近なんとなくだるかったりするんだよね。じゃあ私、クレソンうどん食べる」

　私は最初にこだわった温かいうどんをオーダーした。カウンターの中には五十代くらいで小太りのおばちゃんがいた。白い三角巾を頭に巻いたおばちゃんはニコニコ笑いながら「クレソンうどんね」と復唱した。

「やっぱり里奈はうどんにするんだ。俺は蕎麦だな」

　蕎麦に決めたものの洋平はおばちゃんを相手に、「今日は冷えますよねー。冷たいの食べたら馬鹿ですよね」と、ざるにするか、かけにするか迷っていた。普段、洋平はざるを食べる事の方が多い。

「ホント、今日は特に寒いわね」

　おばちゃんの一言と、外の寒さに肌をさらしてきた直後ともあって、洋平は温かいクレソン蕎麦を注文した。空気を読んだのだ。洋平は変なところで人目を気にする。「寒い」と会話した後に冷たいざるなど頼めない。だが、おばちゃんが厨房の方に消えた後、「ざるも捨てがたいんだよなぁ」と、再び迷っていた。

　カウンターから一歩離れたところで待っていた。数分後、出来上がった丼をカウンターに載せたのは、おばちゃんではなく、私よりも洋平に歳の近そうな若い女性だった。長い髪を後ろで一つに束ね、前髪をくるりと一回巻いた後、頭のてっぺんで止めてある。お姉さんが温かみのある笑顔で「お待ちどうさまでした」と言うと、気のせいかその場が華やいだ。この人を目当てにここに立ち寄る客も多いのではないか。女の私がそう思ってしまう程、綺麗なのだ。

　お姉さんを前に、私の横に立っていた洋平が声のトーンを上げた。

「寒い日には、あったかいものに限りますよね」

　やけに嬉しそうなのが波動レベルで伝わってくる。どちらにするか散々迷っていたくせに調子がいい。

「そうですね。今日は暖かいものを召し上がる方が多いですね」

　お姉さんが会話を受け止めたのをいい事に、洋平は話を続けた。

「ここの蕎麦、大好きなんですよ。汁にもこだわりが感じられるし」

「ありがとうございます」

　お姉さんは軽く会釈してからニコリと笑った。私には、この季節に相応しくない涼しげな営業スマイルにしか見えない。多少、僻んでいるせいもある。

異変5

「だしに何を入れてるかなんて秘密ですよね。真似して作ってみたりするんですけど、なかなかこの味に近づけなくて」

　だしについてはやはり企業秘密なのか、単に知らないだけなのか、お姉さんは笑って何も答えなかった。

　私達はそれぞれに自分のうどんと蕎麦を盆に載せ、カウンターから離れた。と同時に、まだ半分ニヤけたままの洋平に、私は不満を一気に爆発させた。

「ちょっとぉ、洋平！　寒い日はあったかいものに限るって何？　さっきはざるにしようか迷ってたじゃない」

　私は口を尖らせて捲し立てた。

「なんだよ。なに怒ってんだよ」

　洋平からしたら、私が突然怒り出したようにしか思えないのだろう。カウンター前では私のことなんて視界にも入っていなかったのだから。

「綺麗な女の人が相手だと、言う事がころーっと変わるんだね」

「おまえ、ヤキモチ焼いてんの？」

「ち、違うよ」

　図星だが意地で否定する。このもやもやをヤキモチと言わずに何というのか。

「あのなぁ……まあいいや、とりあえず座ろう」

　私の鋭い目つきの真意がわかったところで、洋平は自分達が立っているところから一番近いテーブルに盆を置いた。

「あのね、いい？　俺はここの美味い汁が好きなのね。その作り方を何とか聞き出せたら儲けものだろ？」

　椅子に腰を下ろしながら、洋平が口を開いた。

「うん」

　私は眉間に皺を寄せたまま頷いた。確かに洋平には、料理番組で自分の食べたいものが出てくると、じっと見入ってレシピを頭に叩き込み、見様見真似で作ってしまうという特技があった。

「俺が料理好きなの、里奈も知ってるでしょ？」

「そうだけど……やけにテンション高かったよ。なんかすっごく楽しそうだった」

　最近二人で家にいても、仕事と向き合っていることの多い洋平が、私とあれほどの笑顔で話をすることなどあっただろうか。そう思った私は面白くなかった。

「初対面だったら、多少テンション上げるだろ」

「男の人でも？」

「そうだよ。俺は男女の区別してないと思うけどな」

　言われてみればそうかもしれない。洋平は男友達も女友達も大勢いて、いつもわいわいと楽しそうにしている。初対面に限らず、その場を和ませる術を知っている。今日の相手は商売をしている女性だ。彼女の方としても仕事として客に対しテンションを上げるだろう。それで洋平も同じようにテンションを上げれば、会話が弾んでいるように見えるのは当然だ。

異変6

「でもさ……」

　女の人と仲良くしてるところ、見たくないんだもん。

　胸に痞えている言葉を飲み込み、自分の嫉妬深さに自己嫌悪になった。少々落ち込み、それ以上何も言えなくなってしまった。

「里奈は気にし過ぎだよ。俺は誰と楽しく話しても何の策略もないよ。ほら、箸」

　洋平はそう言うと、私に割り箸を差し出した。

「ありがと」

　私は立ち直れないまま、洋平から箸を受け取り、力なく真ん中から割った。

「そんな顔しないの。ほら、笑って。里奈の笑った顔が見たいなぁ」

　洋平が私の頭に手を伸ばし、髪をくしゃくしゃっと撫でた。私をあやすには頭を撫でればいいと、洋平はわかっている。

　しかし、忙しい洋平に構ってもらえない日々を過ごしていた私は、なんとなく引っかかる心細さを拭うことが出来なかった。休日までの我慢だと、ずっと必死で耐えていたのだ。ところが、久しぶりに彼と二人の時間を満喫出来ると思っていた矢先、先ほどの一件が起きた。淋しさを抱えていなければ、さらりと流せたかもしれない。私の心は、自分が思っている以上に敏感になっていた。

「やっぱりうまいなぁ、ここの蕎麦。里奈食わないの？　食わないんなら俺が食うぞ」

　洋平は、私のうどんの丼を盆ごと自分の方に引き寄せた。

「わわ、ダメだよ。食べるから。いただきます」

　私は必死で丼を取り返し、ガードしながらうどんを一口食べた。

「あ、おいしい！」

道志の味は格別だった。見た目はありきたりなうどんなのに、洋平の言う通り、汁が旨い。温度も程よく、二口三口と啜るごとに体がじんわりと温まる。自分ではコントロール出来ずにいたネガティブな心に、新鮮な刺激が入り込んだ。

寂しかったとはいえ、今は目の前に洋平がいる。二人でいるのだ。一緒にいられる貴重な時間をつまらない嫉妬で台無しにしてはいけない。

うどんを半分程度食べた頃、私の凝り固まった気持ちが解れ、素直に甘えられる自分に戻っていた。

蕎麦はどんな味だろうと、私は洋平の丼にも箸を伸ばした。

「いっぱい食べな」

洋平は蕎麦の丼を私の近くに寄せた。普段から少食な私を心配している彼なので、私が食欲を見せるととても喜ぶ。でもそうすると、私は自分の分が食べ切れなくなる。それを洋平に差し出すことが多いので、結局は一人分すら食べていないのだが……。

昼食後、私達はレストランを出て、ぽかぽかと陽の当たっている遊歩道を散歩することにした。

東屋のある芝生の広場に沿って、レンガを敷き詰めた小道が続いている。道の端にはプランターが並べられ、花は咲いていないものの、緑の葉が遠慮深げに春の到来を待ちわびている。

異変7

「さっきより暖かくなった気がしない？」

　私は、洋平の歩幅に合わせながら呟いた。外気は相変わらずひんやりとしていたが、お腹を満たし、のんびりと流れる時間の中に身を委ねているせいか、先程までの寒さを感じない。

「そうだな。でも、レストランが暑いくらいだったから体が火照ってるだけかもよ。なんだか顔が赤いぞ？」

　洋平は立ち止まると、私の頬に右手の甲を当てた。

「そんなことないよ。気持ちがあったかいだけだもん」

　否定してみたが、洋平の手の方が冷たく感じるくらい私の頬の方が熱かった。洋平は私と正面に向き合うと、今度は両手で頬を包み込むようにして触った。

「おまえの頬、熱いなぁ。熱なんかないよな」

「ないよぉ。具合悪くないもん」

　私がそう言った途端、北風が髪を逆立てる勢いで吹き抜け、私の首元から一気に体温を奪っていった。

「ううっ、寒い」

　私は洋平の体に顔を埋めながら、今度は逆の言葉を口にした。

　洋平は自分にぴったりとくっついている私に向かって一笑いし、「風邪引くといけないから、ゆっくり帰ろうか」と、言った。

「え？　あ、うん。春になったらまた来ようね。名残惜しいけど」

　寒いと言ってしまった事を後悔した。日常から離れたところに二人でもっといたかった。だが、我が侭を通す訳にはいかない。自分が風邪を引く分には家で寝ていればいいが、洋平に風邪を引かせてしまっては元も子もない。仕事に影響を与えるなんて彼女失格だ。

「暖かくなったらいつでも来れるよ」

洋平が私の気持ちを察した。だが、洋平の言う「暖かくなったら」が、いつになるかわからない。日常に戻れば仕事で忙殺される彼の「いつでも」という言葉には素直に頷けなかった。

二人で並んで歩き出すと、洋平は私の肩に腕を回して自分の体に引き寄せた。

道の駅を出てすぐ、道志のくねくねした道に入った。体を揺られているうちに、私はなんとなく全身の血が引くような感覚に襲われた。

子どもの頃から乗り物に弱かった私だったが、洋平の運転で車に乗る時だけは不思議と酔ったことがなかった。だから他の人の運転ならまだしも、洋平の運転で酔うはずがない、そんな自分が許せない、とさえ思っていた。しかし、だんだん気のせいでは済まないくらい嫌な冷汗が出てきて、動悸もし始めた。

「どした？　いやに静かじゃん」

洋平が私の異変に気付いた。私が黙ったまま動かなくなったのを不思議に思ったらしい。

「ん？　なんでもない……」

そうは言ったものの、私は一生懸命生唾を飲み込んで、胃の辺りのむかつきを必死で堪えていた。

「なんだか顔色悪いぞ」

数メートル先の赤信号で止まった洋平は、しみじみと私の顔を覗き込んだ。

異変8

「真っ青だよ。大丈夫か？」

　洋平に指摘されても、私には答えるだけの余裕がなくなっていた。前方を見据えたまま、浅く呼吸をしているのがやっとだった。顔を動かしたら、今よりももっと状態が悪化しそうだ。

「ちょっと休もうか」

　洋平は私の返事を待たずに、車を路肩に止めた。

　車が停車するのと同時に、私の胃の中のものがぐぐっとこみ上げてきた。慌てて口を押さえながらドアを開く。飛び出した先にあった林の木に片手をつき、私は堪える間もなく嘔吐した。

「酔ったかな。体調、悪かったんじゃないか？」

　後から降りてきた洋平が、何度も吐き続ける私の背中を擦りながら心配そうに訊いた。

「ううん……なんともなかったんだよ……さっきまで」

　私は上体を倒したまま、荒い呼吸の合間にそれだけ答えた。

「ああ、ごめんごめん。喋らなくていいよ」

　私は洋平に体を支えられながら、彼の声を意識の向こうで聞いていた。

　帰宅してからも、胃のむかつきは治まらなかった。一階のフローリングに来客用の布団を敷いてもらい、私はそこで横になった。二階のベッドルームに上がってしまうと、いざという時にトイレに駆け込む事が出来ないからだ。

「どう？　具合は」

　布団の横に腰掛けた洋平が私を覗き込んだ。ここは四畳半ほどの広さのリビングで、真ん中にテーブルがあり、窓際にローソファーが設置してある。テーブルの下は他の床から膝下分くらいの深さに掘ってあり、腰掛けられるようになっている。洋平は今、そこに座っている。

「さっきよりは落ち着いた……」

私は腕を伸ばして洋平の腿に触れた。本当は、車に乗っていた時と同じくらい気分が悪かった。心配されるとつい強がってしまう。

「すぐに良くなるからな」

洋平に私の嘘は通じない。私が腿に手を伸ばしたことで心細さが伝わっている。

「うん……」

肩で呼吸をしながら私は頷いてみせた。その途端、それまでなんとか落ち着かせていた息が乱れ、酷い吐き気に襲われた。再びトイレに駆け込んだが、もう出るものがほとんどない。胃液を吐いたのは生まれて初めてだった。

「救急車呼ぼうか」

嘔吐する声を聞いていた洋平は、トイレから戻って布団に倒れこんだ私に言った。

「ううん、横になってると少し楽だから、いい」

吐いた直後だけは吐き気が治まる。

「そか。明日、病院連れてってやるからな」

「ごめんね。せっかくの休みなのに……」

私は、申し訳ない気持ちいっぱいになりながら洋平に謝った。

「なに、言ってんだよ。ちょうど休みで良かったよ。仕事が入ってたら、おまえ一人、家に置いてかなきゃならなかったんだから」

「うん……」

「担当が決まってるから、他の人にカウンセリングやってもらうことが出来ないし、かと言って、こんな状態の里奈を一人にさせておけないし」

洋平は「気にすんな」と、微笑んだ。

私はゆっくりと目を閉じた。静寂の中に洋平の息遣いだけが聞こえる。彼の呼吸に神経を集中させる。不安な時はいつもそうする。私の精神安定剤だからだ。

「そういえば、昼間作った湯飲みの高台を削んなくちゃいけないんだよな。乾ききったらいけないんだもんな」

洋平は先回りして何でも気付く。

私は目を開けて洋平の顔を見た。洋平は、私に作業を急かしてしまったと思ったらしく、「明日、俺がやるから安心しな」と付け加えた。

「ホントにごめんね……ありがとね、洋平」

洋平の優しさと自分の不甲斐なさが入り混じり、鼻の奥がつんとなった。泣くまいと堪えたが、こみ上げる涙の量の方が多かった。瞬きした目から涙を零すと、洋平は黙って拭ってくれた。いつもなら、「すぐ泣くー」と言うくせに……。

小さな点1

　翌日、洋平に付き添ってもらい、歩いて三分程のところにある掛かりつけの診療所に行った。

　小児科と産婦人科を受診できる小さな町医者だ。内科とは掲げていない。妊婦でもなく、子どもでもない私の掛かりつけがどうしてここかというと、理由があった。

　半年前、私は高熱を出した。朦朧としながら、受診科目も診療時間も確かめずに這うようにしてここに来た。国重医院という看板をいつも目にしていて、具合が悪くなったらここに来ればいいと勝手に思い込んでいたのだ。

　だが、辿り着いたその瞬間、看板に内科の表示がないことに気が付いた。おまけに休診日の札が下げられ、カーテンまでしっかりと閉められている。そうとわかったところで、もう一歩も動けない。診てもらえないことへの絶望感で全身の力が抜けてしまった。

　帰るに帰れずその場にへたり込んでいると、外出先から先生の奥様がちょうど戻ってきた。そして、ぐったりとした私の様子を見かねて中に入れてくれた。奥様はここの看護師だ。

　自宅でもある院内でくつろいでいた先生も、「どしたー？」と、まるで身内を見舞う親戚のおじさんのように、診察室に降りてきてくれた。注射もしてくれた。会計を締めてしまっているので、お金は今度でいいとも言ってくれた。

　三日後、私はようやく動けるようになってお金を払いに行った。別の若い看護師さんがいて、その人にも話がちゃんと通じていた。そして、にこやかに対応してくれた。

　私にとってここの人達は皆、命の恩人で神様だった。人情味のある病院に巡りあう事など滅多にないと思い、それ以来ここが私の掛かりつけとなった。しかし、通常は妊婦さんや子ども達がいる場なので、具合の悪くなった時には前もって電話をし、他の患者さんがいない昼休みや夜に診てもらっていた。

　保険証と診察券を出して、洋平と二人で待合室の長椅子に腰掛けた。午前の診療がすべて終わった昼休みの時間。今朝、電話をした際、この時間だったら大丈夫と言われていた。

「小西さん、どうぞー」

　今日子さんが私を呼んだ。個人的には「里奈ちゃん」と声を掛けてくれる若い方の看護師さんだ。肩まであるさらさらした髪の所謂美人で、最初は近寄りがたいと思っていた。記憶にない

程度のトラウマがあるのか、私は美人を前にすると緊張する。反射的に身構えてしまうのだ。
でも、今日子さんは違った。ざっくばらんに話しかけてくれる、気取りのないお姉さんだった。

「一人で大丈夫か？」

　ふらふらと立ち上がった私に洋平が訊いた。

「うん。大丈夫」

　私は反射的に答えた。しかし、一晩経った今でも胃のむかつきは相変わらずで、背筋をぴんと伸ばす事が出来ない。

「ここで待ってるから、何かあったら呼べよ」

　洋平の声を背中で受けながら、私は診察室に一人で入った。

小さな点2

　患者用の丸い椅子に腰掛ける。「お願いします……」と小声で言うと、院長である国重先生がカルテに挟んであるメモを見た。

「昨日から吐き気が止まらないのか。他に何か症状は？　喉の痛みとか鼻水とか」

　メモには電話で伝えた私の症状が書かれていた。国重先生は八の字眉毛を更に中央で引き上げた。

「咳も鼻水も熱もないです」

　私は弱々しく答えた。

「そっかー。なんか悪いもんでも食ったかな」

「特別、食べてないと思うんですけど……」

「うーん、一応、喉見せて……ああ、少し赤いって言えば赤いかもしれないな」

「風邪……ですか？」

「お腹にくる風邪はまだ流行ってないんだけど、吐き気がすごいんだもんな。どっかでもらってきたかもしれないしね」

「はぁ……」

　ここ最近、家にこもって作品を作っていたので、人込みには行っていない。風邪をもらう機会などなかったはずだ。なんとなく腑に落ちない。

「ちょっと胸の音、聴こうか」

　そう言われた私はシャツの裾を少しだけたくし上げた。先生は隙間に手を入れて、私の胸に聴診器を当てる。

「変な音はしてないね。やっぱり食あたりかな」

　先生が首を傾げた。

「とにかく、胃腸薬出しておくから、それで様子見て。でも、今日一日全く水分が取れないようだったらすぐに来てね。点滴するから」

　簡単な診察が終わった。国重先生が食あたりというのならそうなのだろう。いつの間にか傷んだ何かを食べたのかもしれない。前に生牡蠣にあたった時もそうだった。食べた次の日に症状が出たのだ。きっと食あたりだ。

　そう思いながら私は診察室を後にした。

「どうだった？」

　待合室で待っていた洋平が心配そうな顔で言った。

「うん。胃腸薬くれるって。それで様子見てって言ってた」

「そか。道の駅で冷えちゃったのかな。帰って休もうな」

　洋平は会計を済ませて処方箋をもらうと、「ちょっとひとっ走り行って来ますから、座らせておいてもらってもいいですか？」と、下を向いていた今日子さんに言った。調剤薬局は診療所から三件先にある。

「いいですよ。慌てないで行ってきてください」

　既に体の向きを変え、背中を向けていた洋平に今日子さんは言った。

「すみません。ちょっとお願いします」

　今日子さんの返事を聞いたか聞かないかのうちに、洋平は診療所のドアから小走りに飛び出していった。

「里奈ちゃん、辛かったら横になっててね」

　洋平の開けたドアがゆっくりと閉まる間に、今日子さんは私に毛布を持ってきてくれた。

小さな点3

「ありがとうございます。でも、横になっちゃうと、今度は起き上がる時にすごく気持ち悪くなっちゃうから……」

　私はそう言って力なく笑った。

「そっか。じゃあ、何かあったら声掛けてね。奥の部屋にいるから」

　今日子さんは口角を軽く上げると、受付の奥にある部屋に入っていった。私の診察が終わったので、ようやく昼休みを取るのだ。

　私は今日子さんや国重先生に申し訳ないと心の中で詫びながら、長椅子の一番端にずるずると移動し、壁に頭を寄りかからせた。

　昨日、車に乗る前までは何でもなかった。峠道をくねくねと走ったから、珍しく車に酔っただけだと思っていた。でも、車酔いが二日間も続くとは考えられないし、傷んだものを食べたのなら洋平にも少しは影響があるだろう。いつも同じ物を食べているのだから。

　やはり、何か他に体の不調となる原因が隠れているのだろうか。吐き気がする病気ってなんだろう。胃潰瘍、胃ポリープ、盲腸、片頭痛、肝炎、胆のう炎……。

　気分の悪さでしっかりと意識を保てない中、私は一昨日テレビで放送していた病気の話を思い出していた。

「お待たせ。里奈、帰ろう」

　洋平が戻ってきた。薬局まで往復走ってきたらしい。肩を上下に動かしながら息を切らしている。

「うん」

　私が小さく返事をすると、洋平は受付の奥の部屋に向かって、「ありがとうございましたぁ」と、控えめながらもよく通る声でお礼を言った。

「立てるか？　ゆっくりでいいからな」

　私は胃を揺らさないように気をつけながら、壁からそっと頭を離した。上体を起こしたものの

立ち上がれないでいる私に、洋平は手を差し出した。

「薬を飲めば、きっと良くなるからね」

　私は気弱になりながら頷き、病院を後にした。

　家に到着した。助手席に沈み込んでいた私は、また吐き気に襲われるのが怖くて体を動かせなかった。洋平に支えられながらやっとのことで車から降りたが、家に入った途端、ほんの少しだけ残っていた緊張感はぷつりと切れた。私は玄関を入ったすぐの床に吸い寄せられるようにして倒れ込んだ。

「少し食べて、薬飲んだ方がいいよな。でも、普通の飯じゃ食べられないか」

　洋平は、私の食事をどうしようかと悩んでいる。

「ゼリーっぽいのだったら、食べられるかもしれない」

　水を飲んでも吐いてしまう状態だったが、とにかくこの吐き気をなんとかしたい一心で私は彼に言った。

「よし、わかった。今買ってくるから」

　洋平は脱ぎかけた上着を羽織って出て行った。

　通院の疲れが出たのか、私は少し眠気を感じた。これなら眠れるかもしれない。夕べは気持ちの悪さが睡魔に勝ってしまい、一睡も出来なかった。目を閉じると、麻酔に掛かったように一瞬で意識を失った。そして、私は夢を見た。

小さな点4

　森林が燃えている。山火事だ。とても広い範囲。大きな炎にはならず、ぶすぶすと燻っている。ところどころに黒煙が立ち込め、空を黒く染める。そこから逃れる為に、私は必死に走る。しかし、それをあざ笑うかのように火は迫ってくる。恐怖と疲労で息が上がる……。

　そこで目が覚めた。現実に戻ってからも私は肩で息をしていた。不吉だ。黒い煙の夢ってあまり良くないんじゃなかったっけ……。せっかく眠れたのに、疲れを取るどころか前よりも具合が悪い。眠らなければ良かったと、夢見が悪い時は必ず思う。

　家の電話が鳴った。滅多に鳴らない家の電話が、こういう時に限って鳴る。放っておこうと思った。知り合いからなら掛け直してくるはずだ。私は目を閉じてベルが鳴り止むのを待った。電話は十回鳴って切れた。

　ホッとしたのも束の間、再びベルが鳴った。セールスではなさそうだ。私は憂鬱になりながら、鉛のようになった体を床に這わせた。

「はい……」

　普段だったら二回で出るところ九回ベルを鳴らした。

「もしもし、里奈ちゃん？　寝てた？」

　診療所で顔を合わせたばかりの今日子さんだ。

「あ、さっきはありがとうございました」

「大丈夫？」

「大丈夫です……どうしたんですか？」

　こんな時でさえ、大丈夫と反射的に答えてしまう。

「うん、ちょっとね……」

　今日子さんは何か言いづらそうに言葉を詰まらせた。

「え？……」

「今、一人？」

「ええ。洋平、買い物に行ってるから……」

「そっか。あのね、里奈ちゃんが帰った後に先生がおっしゃってたんだけど、嘔吐する風邪は流行ってないから、ちゃんと検査してみた方がいいかもしれないって」

「検査……ですか？」

「うん。簡単に出来る検査だから、明日もう一度通院してもらえないかって」

「そうですか……」

「どうしても辛かったら、往診してあげる。どう？　来れそうかな」

「あ、はい。大丈夫……だと思います」

　一人で通院する自信など全くなかったが、とりあえずそう答えた。

「無理しなくていいからね。動けなかったら電話ちょうだい」

「わかりました」

「じゃあ、明日、待ってるね」

　今日子さんはそう言って電話を切った。

　ただの風邪じゃ……ないの？　じゃあやっぱり、内臓のどこかに故障があるのかな……薬を飲めば楽になれると思っていたのに……簡単に検査って出来るものなの……？

　重い病気にならないと検査をしないと思っていた私は、自分の体で何が起きているのか不安でいっぱいになった。

小さな点5

「ただいまぁ」

　洋平が買い物から帰ってきた。何を買ってきたのか、パンパンに膨らんだスーパーの袋三つぶら下げている。

「あれ？　どうした？　誰かから電話が掛かってきたの？」

　ぐったりしているはずの私が電話のそばにいたので、不思議に思ったようだ。

「うん。今日子さんから」

「なんて言ってた？」

「ん……大丈夫？　って。心配で掛けてきてくれたみたい」

　私はとりあえず詳しいことには触れなかった。買ってきたものを冷蔵庫や棚に片付けていて、バタバタと忙しなく動いている洋平に話しかけづらかったのもある。

「そう。でも電話に出るだけでも辛かったろ？　ごめんな。もっと早く帰って来てやればよかったな」

　話をする時だけ、洋平は顔をこちらに向ける。

「大丈夫だよ」

　私はやはり、一言しか返せない。

「近くのコンビニにゼリーがなくてさ。スーパーまで行ったから、ついでに調味料とか洗剤とかも買ってきたんだけど、車で行けばよかったよ。さ、早く食べて、薬飲みな」

　洋平は私の隣に座ってりんごゼリーを差し出した。蓋を開け、プラスチックのスプーンも袋から取り出して添えている。洋平はいつもさりげなく、自然にこういうことをする。

「ありがと」

　吐かずに食べる事が出来るか不安になりながら、私はゼリーを口に含んだ。つるんとした感触

が喉元を通り過ぎる。吐き気がしない。これなら何とか食べられそうだ。

「明日は仕事に行くけど、何かあったらすぐに連絡しろな」

「うん」

　洋平に検査の話をしたら、間違いなく欠勤すると言うだろう。彼の仕事に差し支えるような真似は絶対にしたくない。彼の役には立てなくても、邪魔にだけは絶対になりたくないのだ。

「早く食べて……あ、ゆっくりでいいけど、早く薬飲んで、ゆっくり寝ような」

「どっちなのよ」

　私は可笑しくなって少しだけ笑った。洋平の言葉が一番の薬だ。元気が出る。

　この調子なら明日には治っているかもしれない。そうすれば通院も検査もしなくて済む。洋平を巻き込まずに問題が解決するならその方がいい。

　洋平はようやく落ち着いたのか、お茶を啜り始めた。話を聞いてもらえる状況になったが、検査の事は黙っておくことにした。

　翌日。具合の悪さは相変わらずだ。私は通院する事に決めた。洋平に知られないように、彼が出掛けてしばらくしてから身支度をした。

「お願いしまぁす……」

　吐き気が治まることが度々あるので、その隙を狙って診療所に来た。

「里奈ちゃん、大丈夫だった？　気分が悪かったら奥で休ませてあげるから言ってね」

　受付に座っていた今日子さんが、私から診察券を受け取りながら言った。

小さな点6

「ありがとうございます。今のところ大丈夫です」

　私は力の入らない声で答えてから、受付正面にある長椅子に座った。今日は診療時間内なので、三人の妊婦さんが待合室にいる。普通の病人が妊婦さんと一緒にいていいのかと気が引けたが、先生の方からの呼び出しなのだから仕方がない。

　診療所のドアが開き、私と同い年くらいのお母さんが二歳くらいの男の子を抱えて入ってきた。男の子は体を仰け反らせて泣き叫んでいる。病院がよほど嫌いなのだろう。お母さんは四苦八苦しながら受付に診察券を出すと、ドア側に沿ってＬ字に曲がっているカウンターの奥に進んでいった。

　そこには小児科を受診する子どもの為の待合室がある。プレイルームになっていて、絵本やおもちゃが置いてある。以前、通院した時に覗かせてもらったのだが、さながら保育園の教室のようだった。今も数名の子ども達が診察を待っているようで、病気とは思えない甲高い声が微かに聞こえてくる。しばらく響いていた男の子の泣き声は、何か気を逸らせるものがあったのか、いつの間にかぴたりと止んだ。

　母親って大変だ。

　そう思いつつも私にとっては他人事でしかなかった。洋平の様子を見ている限り、子育てはおろか、結婚自体がまだまだ遠い未来の話だった。

「小西さん、中へどうぞ」

　間もなく診察室のドアが開き、先生の奥さんに呼ばれた。来院した順番からしたら、私は最後だと思っていた。いきなり呼ばれたので、反射的に周りの人の目を見た。やはり、どうしてこの人が先なの？　と、怪訝そうな顔をしている。

　申し訳なく思いながら診察室に入ると、すぐに診察ではなくて、奥さんに紙コップを手渡された。検査というくらいだから、血液でも採るのかと思っていた。

「トイレに行ってこれに尿を入れてきてもらえる？」

　紙コップを見れば尿検査だろうということはすぐにわかる。だが、どうしていきなりその検査なのだろうと思った。

「なんの……検査なんですか？」

　私は恐る恐る聞いた。

「あれ？　まだ聞いてなかった？　妊娠しているかの検査よ」

「妊娠？」

　私は予想外の答えに驚いた。考えてもみなかったことだ。

「私まだ、独身なんですけど……」

　すると、奥さんは毅然とした態度で、「結婚しているかどうかは妊娠には関係ないわよ。里奈ちゃん、彼と一緒に住んでいるんだし」と、言った。

「女性が具合悪くなった時には、一番最初に妊娠を疑うのよ。もし、別の病気だったとしても、妊娠していたら治療法方も変わってくるでしょ。昨日は里奈ちゃんがあまりにもぐったりしてたから尿検査しなかったの。だから」

　そう言うと奥さんは私の体を後ろから支えながら、トイレに行くように促した。

　妊娠……。

　私はその一語に囚われながら、一歩ずつ足を引きずるようにしてトイレに向かった。

　二つあるトイレのうち、私は右側の扉を開けて入り、中から鍵を掛けた。暖房つきの便座に腰掛けると、つい、ため息が出てしまった。妊娠していてもおかしくない要因が、私の脳裏に思い浮かんだのだ。

　私は今、洋平と同棲している。毎日の生活の中で、食事をしたり、お喋りをしたり、たまには二人でお風呂に入ったりと、一緒にいられる時間はいつも近くに彼という存在を感じていた。

　セックスも当然、愛情表現の一つとして自然に二人の間に存在した。しかし、同棲しているとはいえ、私達は結婚についても話をしたことがなかった。今の生活に不満はなかったし、籍を入れるか入れないかは、二人にとってあまり重要ではなかった。逆に、書類上で繋がれているより、心の結びつきをいつまでも大切にしたいと考えていた。

小さな点7

　籍を入れていない以上、妊娠して子どもを授かることは出来ない。私は洋平の子どもをいつか産むことが出来たら幸せだなという気持ちは持っていたが、彼が望むまではいらないとも思っていた。だから、いつも避妊を心掛けていた。ただ、生理は規則正しい方なので、それを信用していたところもある。それがいけなかったのだろうか……。

　私は五分くらい座ったままの状態で考え込んでいた。ふと我に返り、持っていた紙コップに用をたし、個室を出た。トイレ内にある検尿置き場があり、私がそこに置くと、診察室に繋がっている小窓から奥さんが顔を出し、「待合室で待っててね」と、言った。

「はい」

　憂鬱な気分が、私の声のトーンを低くさせた。

　椅子に座っていると、私よりも先に来て待っていた三人が次々と呼ばれた。私は検査が先だったというだけで、診察はやはり最後だった。

「小西さん、入ってください」

　再び奥さんに呼ばれた。診察室に入ると、国重先生がカルテを置いた机を前にして座っていた。

「やっぱり、妊娠だね。ちょっと、内診してみようか。尿検査だけだと確定は出来ないから」

　そう言って国重先生は、背中を向けていた側にあるカーテンをさっと開けた。

　カーテンの奥に狭い空間があり、その中央に歯科医院にあるような診察台があった。その台は腰を下ろす部分より下はざっくり切れていて、その先に足を乗せる為のカップが、椅子から伸びている左右二本の棒の先端にそれぞれ付いていた。

「内診台が古くてごめんね。最近のはもっと座り心地がいいみたいなんだけど、これより百万くらい高いからね」

　私は下着を脱ぎ、スカートを腰までたくし上げてから内診台に上がった。古かろうが新しかろうが、私は内診台に上がるのが生まれて初めてだった。

「緊張しなくていいからね。体の力抜いててね」

　お腹の上あたりに小さなカーテンがあって、腰から先は見えない。体の力を抜いてと言われなくても、妊娠と言われてから体の力は抜けっぱなしだ。

「器具入れますよー。息吐いてー。ああ、妊娠してるね。ちょっと見てみる？」

　国重先生は器具を私の体に挿入したままカーテンを開け、自分の方に向いていたモニターを私の方に回転させた。モニターには、白黒の画像の中に壷を真上から見たようなものが映っていた。

「これが子宮ね。真ん中の黒い部分の端っこに白い点があるでしょ。これが赤ちゃん」

　先生が指差した一ミリくらいしかない小さな点がちょろちょろと動いている。こんなに小さくても生きているのか。私は生命の不思議さを感じながら、素直に喜ぶことのできない自分と向き合っていた。

「浮かない顔だね、里奈ちゃん」

　器具を私の体内から抜きながら、国重先生は表情を変えずにいった。

「先生……どうしよう……結婚もしてないのに」

　私は内診台から降りると、すがるような気持ちで先生に尋ねた。

「洋平君に話してみて、それから考えるしかないよな」

　先生はその一言だけ私に告げた。

「はい……」

　私は考える事がたくさんあり過ぎて、それをどの順番で辿ったらいいのかわからなかった。

「里奈ちゃん、一人で悩んじゃダメだぞ。これは洋平君と里奈ちゃん二人のことなんだから。帰ったら必ず彼に相談するんだよ。それでも結論が出なかったら、またここへおいで」

　先生の優しい言葉が心をかすめたものの、私はそれをしっかりと受け止めることが出来なかった。

　もし、洋平の顔が曇ったら……。

　それを思うと、話を切り出す勇気が持てない。力なく診察室を後にしながら、私は深いため息を何度も吐いた。

見えない壁1

　家までの道のりをどう歩いてきたのか全く覚えていなかった。妊娠の二文字が頭の中をぐるぐると廻る。こればかりは時が経てば解決するというものではない。選択肢が限られている。

　選択肢……？

　何を選択するというのだろう。命に関することで私はいったい何を選択しようというのだろう。慌てて頭を左右に振り、恐ろしい考えを自分の中から追い出した。

　気が付くと、ずっしりと重くなった体をソファーに預けていた。ただ正面を向いて、何も映っていないテレビに定まらない視線を送っていた。

　少し経って、私は顔を後ろに反らして窓の外を見た。隣接している公園の花壇に、白とピンクのコスモスが数本咲いていた。あんなに細い茎なのに、少々の風ではびくともしない。

　強い花なんだな……。

　私は、突然襲ってきた問題に動揺している自分と比べながら、コスモスをぼんやり眺めていた。

「里奈ちゃん、いるー？」

　玄関から、聞き覚えのある威勢のいい声が聞こえてきた。鍵が開いているのをいいことに、ずかずかと上がりこんできたその人物は、洋平の弟の准也だった。彼とは十歳、歳が離れている。私よりも年下なのに、私を「ちゃん」づけで呼ぶ。

「あ、いるじゃん。静かだから誰もいないのかと思った」

　部屋の奥まで来て私の所在を確認すると、准也は台所を物色し始めた。

「ちょっとぉ。勝手に漁んないでよね」

　私はだるい体を起こしながら准也の動向に目をやった。准也はひょろりとした背を折り曲げて冷蔵庫を覗き込んでいる。コーラを見つけると何も言わずに取り出して、プルトップに指を掛けた。

「何しにきたのよ」

　私は准也にだけは乱暴な口を利く事が出来る。憎まれ口が彼の口調なので、気を遣っていたら私の神経が持たない。逆に、私が何を言っても全く動じないので楽な相手でもあった。准也は一見無遠慮だが、踏み込んだらいけない領域をわかっている。頭の回転がいいので、ずうずうしくても許せてしまうのだ。

「何しにって、遊びに来たんだよ」

　准也はコーラをぐびぐび飲みながら、私の斜め横に座った。

「洋平、仕事だよ」

「知ってるよ。里奈ちゃん、遊んでよ」

「相手できないよ」

「なんで？　今日は冷たいなぁ」

「具合が悪いんだってば」

　私がいつもと違う様子に准也は気が付かないらしい。准也は、「具合悪いの？　里奈ちゃん」と言って、おでこに手を当てた。

見えない壁2

「熱はなさそうだけど」

「ないよ」

「じゃあ、どこが具合悪いの？」

　准也はおでこから手を離すと、くっきりとした二重の目で私をじっと見た。

「どこがって……」

　熱がなくたって具合悪い時はあるでしょうが……。

　私は先程聞いてきた診断結果を思い出し、再び憂鬱な気持ちになった。

「食欲は？」

　むすっとしている私に准也が聞いた。

「ない」

「気持ち悪いの？」

　私は准也の問いに一瞬身構えた。下手に「そうだ」と頷いて妊娠を疑われたりしたら、誤魔化しきる自信がない。洋平よりも先に准也に知られてしまうのだけは避けたかった。

　私は首を大袈裟に横に振ってみせた。

「そっか……お腹は？　痛い？」

　吐き気の件はさらっと流された。もう放っておいてとうんざりしたが、准也は次々と質問を浴びせてくる。何か肯定しないと延々と続きそうだ。

「うん」

　私はとりあえず、腹痛ということにしてみた。

「そうなんだぁ」

　准也はやっと納得がいったようにニコリと笑った。

「なんか、嬉しそうだね」

　人の気も知らないで……。

　私は最後の言葉を飲み込みながら、准也を横目で睨んだ。

「別に嬉しそうになんてしてないよ。里奈ちゃん、腹が痛いんだ。なんか変なもん、食ったんじゃないの？」

　腹痛に関してもこの調子だ。気持ち悪いと答えなくて良かった、と私は思った。

「なんにも食べてないよ」

「なんにも食べてないの？　体に毒だよ」

「食欲ないんだもん」

「医者行ったの？」

「行ったよ」

「なんだって？」

「え？」

「病院でなんて言われたの？」

　医者に言われた事をそのまま言うわけにはいかない。私は腹痛の原因になりそうな事を必死で考えたが、起きているだけでも辛い時に適当な事など思い浮かぶわけがない。

　言葉に詰まっていると、准也はそこを突付いてきた。

「何か悪い病気なの？」

「そうじゃない……よ」

　私の言葉に切れはない。

「じゃあ、何？」

　どうしてそこまで私の体調に拘るのか理解に苦しむ。私は面倒になって、ふと思い浮かんだ病名を口にした。

見えない壁3

「胃潰瘍」

「えぇ！」

　准也は素っ頓狂な声を出した。

「ちょっと、胃潰瘍って……こんなところにいて大丈夫なのかよ。入院は？　手術とかしないの？　先生はどうして本人に言ったの？」

　准也の驚き方は異様だった。大したことないと伝えたかったのだが、余計に気を遣われるはめになった。准也は胃ガンか何かと勘違いしているのではないだろうか。私は再び、鈍った頭をフル回転させた。

「胃潰瘍っていったって、飲み薬で治せるんだって。小さいものだから」

　親戚の叔母さんが胃潰瘍を患ったことがあった。私はその時のことを思い出しながら慌てて補足した。

「そうなんだ。ああ、びっくりした」

　准也はすんなり納得して胸を撫で下ろした。私も心の中で大きく溜め息を吐いた。

「とにかく休んだ方がいいね。こんなところにいないで、ベッドで寝た方が……」

　准也がそこまで言った時、張り詰めていた緊張が解けたせいか、治まっていた胃のむかつきが蘇ってきた。それは安静にしていた先程までとは違い、激しさを増したものだった。私は准也の体を押し退け、トイレに駆け込んだ。

「里奈ちゃん、大丈夫なの？」

　ドア越しに准也の声が聞こえるが返事が出来ない。私は肩で息を吸いながら、冷や汗をたらたらと流していた。

「里奈ちゃん？」

　准也の何度目かの呼びかけの後、私はトイレから這うようにして出た。

「こんな状態だって、兄貴は知ってるの？　連絡しようか？」

「知ってるから……連絡しないで……」

　床にへたり込みながら、私は准也に懇願した。連絡などしたら、検査通院することを黙っていた意味がなくなる。

「そう。じゃあ、俺、今暇だから、ここにいてあげるね。ベッド行って寝た方がいいよ」

　准也は何か感じるものがあると、無理に訳を聞かない。勘で気持ちを汲み取ってくれるところがあるのだ。

「ううん。吐き気がひどいから一階にいたいんだ」

「でも、ソファーじゃ休めないよ」

「昨日はずっと、そこに布団敷いてたの」

「そか。布団どこにある？　敷くから」

　准也は部屋を見渡した。

「今朝、洋平が外に干してくれたんだ」

　私は庭を指差した。

「わかった。今、取り込んでくるから待ってて！」

　准也は台所横のサッシを開けて庭に出た。物干しに掛けてある布団を数回手で叩いて埃を払う。それを肩にひょいと掛けて戻ってきた。手際の良さは洋平と同じだ。さすが兄弟だなと思いながら、私は准也をぼんやりと見ていた。

「ほら、早く寝な。すっごく具合悪くなったら言うんだよ。病院に連れてってやるから」

　私はこくりと一度頷くと、准也の敷いてくれた布団に身を預けた。どちらが年上だかわからない。四つも下のくせにいつも偉そうにする准也だが、いざという時、とても頼れる。

　夜十時を過ぎた頃、洋平が帰ってきた。

「里奈、大丈夫か？　あれ、准也？　なんでいるんだよ」

　真っ暗な部屋の灯りをつけた洋平が、トイレの前に敷いた布団でぐったりしている私と、ダイニングカウンターにうつぶせて寝ている准也を見つけた。

「ん？……あ、兄貴！　遅いよ、こんな時間までこんな状態の里奈ちゃんほったらかしにして何してるんだよ」

　一瞬寝ぼけたものの、准也は洋平を見るや否や責め立てた。

「こんな状態って……里奈、大丈夫か？」

　洋平は准也を軽く睨むと、すぐに私の方に向き直った。少しうつらうつらしていた私は、意識がはっきりすると同時に吐き気に襲われ、すぐに答える事が出来なかった。寝起きが一番、気分が悪くなるのだ。

「胃潰瘍なんだって？　兄貴、ちゃんと看病してやれよ。里奈ちゃんが可哀相だよ」

　青ざめた私の代わりに准也が答えた。適当に言った病名を、准也は真剣に信じ込んでいる。

「胃潰瘍？　昨日、そう言われたのか？　今日子さんから掛かってきた電話って、もしかしてその事だったのか？」

　洋平はひどく焦った顔をしている。洋平にだけは嘘をつきたくない。自分の心の中を整理できたら本当の事を話そうと思っていた。でも、今のままでは話がどんどん違う方向に逸れてしまう。

「あのね……」

　私は話しを切り出そうした。何をどう話そうか、自分でもわからない。

「俺、帰るわ。兄貴帰ってきたからもう大丈夫だもんな」

　准也が口を挟んだ。また私の気持ちを察したのだ。

「おう、サンキュウな。助かったよ」

　洋平は准也に礼を言うと、立ち上がって一緒に玄関に向かった。准也を見送って玄関の鍵をかけると、再び私のそばに来た。

「里奈も寝ろな。俺、風呂は入ってくるから」

　准也が話を遮ってくれたおかげで、慌てて打ち明けずに済んだ。私は「うん」と小声で返事をしてから、布団に顔を半分うずめた。

　翌朝、目が覚めてからしばらくの間、布団の中でごろごろしてからトイレに起きた。気持ちが悪くなるのが怖くて、ゆっくりとしか動く事が出来ない。洋平は顔を洗ったり、カバンに書類を詰めたりと、私の数倍の速さで忙しなく動いている。

　今日は本当の事を話さなくては……。

　私は洋平を目で追いながら、タイミングを見計らっていた。考えていても無駄に時間が過ぎていくだけだ。一人で解決できる問題ではないのだし……。

　そう思って身構えていると、見つめていた背中が急に振り返った。

見えない壁5

「今日は少し早めに帰って来れそうだからゆっくり休んでろよ」

「う、うん」

　私は焦って返事をした。

「お腹に優しいもの作ってやるからな。何がいいかなぁ。やっぱり洋平特製スペシャル雑炊かな」

　私を明るい気持ちにさせようとしているのが伝わってくる。

「里奈は、食べたいものあるか？」

「うーん……」

「食欲ないんだから考えられないか。ま、スーパーで適当に見繕って買ってくるから」

「うん……」

「ほら、不安そうな顔してないで。何かあったらすぐにメールしろよ。仕事中だからって遠慮しなくていいからな」

「うん」

「じゃあ、いってきます！」

「いってらっしゃい」

　タイミング、合わず。慌しい朝に重大な話なんて出来ないか……。

　私は少し作り笑いを浮かべながら、洋平に手を振った。

　洋平が出かけてから三十分くらい経った頃、私はダイニングカウンターに置いてあったノートパソコンを開いた。どうしても調べたい事があった。

私は電源を入れてから、口の中の違和感が消えることを祈って、カウンターに常備してあるキャンディーを一つ頬張った。キャンディーは、御煎餅屋さんが煎餅を入れて店頭に置いているガラスのビンに入れてある。

私と洋平の間では、キャンディーがなくなりそうになった時、気付いた方が買い足すという暗黙のルールがあった。実際、洋平がディスカウントショップで買ってくることの方が多かったが、なくなる前に足すのでいろんな種類のキャンディーが入り混じり、ビンを彩っていた。

キャンディーの一つ一つを見ていると、洋平の様々な声が聞こえてくる。

変わったのがあったよ。舐めてる途中でどくろのマークが出てきたらハズレだって。

ぽんかんかぁ、子どもん時、よく舐めたんだよなぁ。

今日は俺の好きなミルク味。笑うなよ、俺は大きなガキなんだから。

洋平はキャンディーを買ってくると、それについて必ず解説をつけた。その度に私はケタケタと笑っていた。次にどんなものを買ってきてくれるのか楽しみで、わざと買わないでいることもあった。

パソコンが立ち上がったのでインターネットに繋げた。『妊娠』の文字を検索欄に入力すると、いくつものサイトがヒットした。その中の『はじめての妊娠』というサイトを開いた。

見えない壁6

目次の一つに『分娩予定日早見表』というのがあった。

「最終月経の一日目が妊娠初日？　生理中なのに妊娠してるって考えるんだ……」

私は自分の前回の生理がいつだったかと、ダイニングカウンター横の壁に貼ってある十一月のカレンダーを見やった。新聞屋さんがくれた、数字が大きくて予定が書き込めるカレンダーだ。それには、前の月と次の月のカレンダーもそれぞれ左右に分かれて上の方に小さく印字されている。

私は先月の方のカレンダーを見た。生理痛がいつもよりひどく、一日寝込んでいたのは確か十四日あたりだったはず……。

「ってことは、私の予定日は……七月二十日、なんだ」

早見表から割り出された日付の数字を、私はぼんやりと眺めた。

「洋平は、産んでいいっていうかな」

私はこのことばかりを昨日からぐるぐる考えている。でも、自分はどうなんだろう、とふと思った。洋平の心の中ばかり気にして、自分の意思はどうなのかを考えてはいなかった。

このまま妊娠を続ければ、夏には私達の子どもが生まれる。一つの生命を産み落とす日がやってくる。だが、もし洋平が反対したら、私は自分のはっきりとした考えを持たないまま、子どもを殺すのだろうか……。

私は流されるままにとんでもないことをしてしまうかもしれない。そう思ったら全身が震え出した。「子どもを殺す」という発想が自分の頭に浮かんできた事自体恐ろしい。私は慌てて頭を振って、その考えを自分の中から外へ追いやった。

分娩予定日早見表からサイトのトップページに戻した後、紅茶でも飲もうと椅子から立ち上がった。すると、玄関のチャイムがなった。

「はい」

私はカレンダーの横に添えつけてあるインターフォンを取った。

「俺。具合どう？　また一人で寝込んでたら可哀相だと思って来ちゃった」

　インターフォンから准也の声がした。

　玄関の鍵を開けると准也が「りんご、買ってきた」と言いながら、スーパーの袋を持ち上げた。

「あ、ありがとう」

　私がりんごを受け取ろうとすると、准也は黙って私の手を制した。

「具合悪い人はこんな重いもん持たなくていいの」

　そして、ラックから取ったスリッパを履くと、「里奈ちゃん、昨日よりは元気みたいだね」と言って笑った。

「うん。胃がむかむかしてるのは変わらないんだけど」

　そう言えば、今日は朝から吐いてない。体調がいいとは言い難いが、なんとなく動ける分、気持ち悪さから気を逸らしていられた。

　准也は、自分の家にでも帰ってきたかのようにして私よりも先にリビングに入った。

「コーヒーと紅茶、どっちがいい？」

　背中を向けている准也に、私はキッチンに向かいながら訊いた。

見えない壁7

「え？　ああ、いいから里奈ちゃんは座ってて。里奈ちゃんが動いてたら俺が来た意味ないじゃん」

　准也は私の両肩を後ろから軽く押しながら、カウンターの椅子に座らせた。その時、准也の視線が一点に止まった。立ち上げたままのパソコンの画面を凝視している。

「はじめての妊娠？　里奈ちゃん、なんでこんなの見てるの？」

　准也はぽかんとした表情で私に言った。私は、しまった、と思った。

「え？　あ、これはね。友達が妊娠したかもって不安そうにしてるからちょっと見てたの。まだ結婚してないからどうしようって悩んでるんだよ。困ったもんだよね」

　不安になって悩んでて困ったもんの自分を、私は空想の人物に当てはめて准也に説明した。

「ふーん、そうなんだ。大変だね」

　准也は疑わなかった。

「その子ね。彼に相談するの、すごく悩んでるみたい」

　私は友達の話としてこの話題を続けた。不安な気持ちを誰かに受け止めて欲しかった。

「どうして？」

　准也は私の隣に腰掛けて、不思議そうにした。

「どうしてって？」

　私は准也に聞き返した。そういう疑問詞が返ってくるとは思わなかった。

「だって、付き合ってる彼なんでしょ？　どこの誰だかわからない野郎じゃないんでしょ？」

「うん」

「自分の彼なら、そのまま相談すればいいじゃん。相談する事を悩むなんて変だよ」

　准也はあっけらかんとして言った。

「だって、もしだよ？　もし、彼が嫌な顔したらショックじゃない？　産むってことは結婚してって言ってるようなもんなんだから」

　私は語気を荒げた。

「嫌な顔するような相手と結婚しなくて済むって思えばいいんじゃないの？」

「お腹の子は？　彼と別れたって、お腹の子は育っていっちゃうんだよ」

「それは、未婚の母になるか、堕ろすしかないよね」

「堕ろす？」

「男がしっかりとした態度を取らないんだったら、女の子が心を決めるしかないじゃない。辛い選択だろうけどレイプじゃないんだし。妊娠するようなセックスしたのは、お互い合意の上でしょ。女の子にも責任あると思うけど」

「女の子だけ、体も心も傷を負うなんて不公平だよ」

「だけど、そういう男ってわからないでやっちゃったんだから、取るものだけしっかり取って、あとは女の子が考えていくしかないんじゃないかな」

「そんな……」

　私は准也の現実的な意見に、なんだか悲しい思いでいっぱいになった。

「その子は彼を信頼して付き合ってきたわけだよね？　相談する事を悩むってことは、彼を信じてないってことにならないかな」

　眉を潜めた私に准也が諭すように言った。

見えない壁8

「え……」

「悩むって事は相手が悪い反応を示すかもしれないって疑ってる事でしょ？　妊娠は二人の間で起こったことなんだから、きっと真剣に向き合ってくれるって考えてもいいと思うんだけど」

「そうだけど……」

「もちろん、いきなり結婚を考えるとなると躊躇するのは正直なところだし、一瞬、もしかしたら顔が曇るかもしれない。でも最終的に、彼女を傷つけまいとする行動をとるんじゃないかな。彼女の事を大事に思ってるならね」

「うん」

「だから、自分の彼ならそうしてくれるって言い切れるくらい、信じてもいいんじゃないかな。ってか、信じるべきだよ。自分が好きになった相手なんだから」

　准也は信念を込めて言った。

「そう……だよね」

　私は洋平を信じている。洋平はきっと顔を曇らせたりなんかしない。悩む事なんか一つもないのだ。

　私は准也の言葉を噛み締めながら、今夜こそ話そうと改めて強く心に誓った。

「里奈ちゃん、いやに真剣だね。友達の話でしょ？」

　こっそりと決意を固めていた私に、准也が疑いの目を向けた。

「え？　そ、そだよ。友達の話だって、真剣になるよ」

　私は焦りを隠しながら、パソコンの電源を落とした。

「変な里奈ちゃん。あ、そうだ忘れてた。りんご食べよう。包丁借してね」

准也もそれ以上、妊娠話には触れようとしなかった。台所に立ち、「俺、皮剥くの得意なんだよ」と言いながら、りんごのてっぺんから細く長く皮を剥いた。

准也は夕方までこの家にいた。

床に寝転がってテレビを観たり、「ちょっと芸術に触れたい」と言いながら工房でろくろを回したりと、ソファーで座っている私の視界の中でずっとうろうろしていた。

その間、私が相槌を打つ打たないに関わらず、准也は独り言をぶつぶつ言っていた。それを聞いているだけで私は退屈しなかった。兄弟揃ってお喋り好きなのも珍しいなと、つい吹き出しそうになりながら楽しい時を過ごした。

「そろそろ帰ろかな。夕飯は？　作っといた方がいい？」

芸術の時間を終えた准也が、洗った手をタオルで拭きながら言った。

「ん？　準ちゃん、料理出来たっけ？」

私はソファーからは見えない准也に向かって答えた。

「あ、何言ってんだよ。ずっと前だけど本格スペイン料理作ってやったろ？」

准也がそばにきた。覗かせた顔に、気のせいか怒りの色を浮かべている。

「へ？　何作ってくれたっけ」

ヘソを曲げられたところで、思い出せないものは思い出せない。

「忘れちゃったの？　魚介類たっぷりパエリア。ムール貝、奮発したじゃん」

ああ、そんなこともあった気がする……。

私は目をパッと開いた後、ワンテンポ遅らせてニカッと笑った。

見えない壁9

「兄貴が作ったやつはいつまでも覚えてるくせに、俺のはすぐ忘れちゃうんだなぁ」

　准也が拗ねた。

「ちゃんと覚えてるってば。今、体調がいまいちだから、記憶を手繰り寄せるのに時間が掛かるのよ」

　ちょっと苦しい言い訳だった。

「へいへい。で、夕飯は作っとく？」

　准也は投げ遣りな返事の中にも優しさを見せる。

「ううん、いい。洋平が作ってくれることになってるんだ」

「何作るって？」

「お腹にいいものって言ってた」

「とすると、兄貴の得意なリゾットかな」

「近い。私の得意でもある雑炊だよ」

「ええ？　里奈ちゃん、料理出来たっけ？」

　今度は准也に仕返しされた。

「うるさいわねぇ。レンジやオーブンで作るものなら作れるよ」

「火が使えないなんて、ホントお子ちゃまだよなぁ」

　私のトラウマのことは知っている。准也はあえてそれを表面化させる。そして、「でも、恐かったんだよな」と付け足す。無理に思い出さないようにするのではなく、火傷を負った現実を受け入れ、怖かったという感情を感じ尽くせ、それがトラウマを克服するための近道だからだというのだ。心理学は洋平の専門分野のはずなのに、私に応用するのはいつも准也だった。

「いいの！　もう帰るんでしょ？　寝るから早く帰んなさいよ」

　私は准也の忠告を軽く突っぱねた。聞く耳を持てないのは、准也に反発しているのではなく、他の人のカウンセリングに明け暮れている洋平に私の事も見てもらいたいという願望を、心の片隅に隠し持っているからかもしれない。

「ひでぇ、人を邪魔者扱いして。でも、元気になってきたみたいでよかったよ」

　悪態をついても笑ってくれる准也に、いつも私は救われる。

「ありがとね。ホントに元気出たよ」

　私は素直になってみた。准也の顔がほころぶのがわかった。

「うん、良かった。また来るね。おだいじに」

　准也はそう言い残すと玄関に向かった。靴をささっと履く音をさせたかと思うと、「じゃあねー」と言って出て行った。

「ふぅ」

　一人になった部屋に楽しい余韻が残った。

　私は買い物くらい行けるんじゃないかという気になっていた。食材だけ買って洋平にメールを入れておけば、彼が買い物に寄らずに済む。またいつ具合が悪くなるかわからないから、動ける時くらい洋平の負担を軽くしたい、そう思った。

　部屋着のままだった私は着替えをして、財布を買い物袋に入れた。そして、はたと悩んだ。

見えない壁10

車で七、八分のところにある大型スーパーに行くか、近所の商店街に行くかだ。

スーパーに行けば、ここだけでいっぺんに用事が済むし、洋平の好きな珍味もある。商店街はいくつかの店を廻らなくてはならないが、レジの長い列に並ぶ必要がない。吐き気に時々襲われる今、万が一レジが混んでいたりしたら早く清算して帰れないので、私は商店街を選択した。

玄関を出た。夕方ともあって、とても肌寒い。マフラーをした首元を手で押さえ、私は背中を丸めて歩き出した。

住宅地を抜けると商店街がある。昔からある古びた店が立ち並び、ここだけ昭和にタイムスリップしたようなのんびりとした空気が流れていた。

その入り口にあるアーケードの下に立ち止まり、私は洋平がどんな雑炊を作ってくれるか想像した。

お腹に優しいといったら三つ葉かな。にんじんとだいこんと卵は家にあったよね。鶏肉は買わなきゃ。納豆入れたらおいしいってグルメ番組で言ってたなぁ。それから……。

それだけ考えると、私はひとまず、商店街のほぼ中央にある『柿沼青果店』に向かった。

夕飯の材料を調達に来た人達で商店街はごった返している。そのやや端の方を私はゆっくりと歩く。私より更に端を通ろうとする自転車や、大きな買い物袋をいくつもぶら下げているおばさま方が容赦なくこちらに向かってくるので、私の方がぶつからないように素早く避ける必要があった。体の弱った私にとって少々過酷な運動だった。

息が切れ始めた頃、私は近くの障害物から遠くの物に視線を移した。行書体で『柿沼青果店』と書かれた横に長い看板が見える。私は立ち止まり、着いたーと、安堵した。

私は買う物をもう一度頭の中で復唱しようとした。が、気を抜いたのがいけなかったのか、治まらない動悸と共に嫌な冷や汗が出てきた。

全身から一気に血が引いていく。もう立ってなどいられない。

私は青果店に隣接する雑貨屋のショーウインドウに寄り掛かり、地べたに直接腰を下ろした。ま

た強い吐き気が私を襲ってきた。

　やっぱり無茶だったのかな……。

　私は浅い呼吸を繰り返しながら、家を出てきた事をひたすら後悔した。目を閉じて数分間じっとしていたが、良くなる気配がない。

　どうしよう……。

　すぐに帰るつもりだったので、携帯も家に置いてきてしまっていた。洋平にも准也にも連絡が取れない。

　誰かに助けを求めようと目を開けた。が、足早に通り過ぎていく人々は隅にうずくまっている私のことなど気が付かない。顔見知りの柿沼青果店のおじさんも、なかなか店頭に出てこない。貧血さえ治れば電話を借りに行く事が出来るのにそれすら出来ない。

　座っているのも辛くなり、私は地面に横たわった。再び目を瞑ると、近づいてくるヒールの音がした。

「大丈夫ですか？」

　一人の若い女性が私に声を掛けてきた。セミロングの髪を肩から前にさらりと垂らし、私の顔を覗き込んでいる。会社帰りのＯＬのようだ。

見えない壁11

「大丈夫？」

　ＯＬが、何も答えずにいた私に再び尋ねた。

　私は、ありがとう、の意味で頷いた。失態を見せないように、息を整えてから事情を説明しようと思った。だが、その少しの間が誤解を招いた。何を勘違いしたのか、女性は「大丈夫なら行きますね」と、その場を立ち去ってしまった。

　待って……助けてください……。

　私の心の叫びは届かない。動揺から再び呼吸が乱れ、声を出したら吐いてしまいそうだった。

　コンクリートの冷たい感触が、倒れたままの私の体温を奪っていく。これだけ人が多く集まる場所なのに、まるで山奥で遭難したような状況に陥っている。知り合いなら手を差し伸べるが、見ず知らずの他人となると途端に関心が薄くなるのか。都会とはいえ、もう少し人の心の温かさは残っていると思っていたのに。

　倒れて雑貨屋のワゴンの陰に潜り込んでしまい、前を見て歩いている人からは見えない状態になっているとも知らずに、私は絶望的な気分に陥っていた。やがて、意識が遠のいていった。

「里奈？　大丈夫か？」

　頭上から声がした。目を閉じたままの私は幻聴でも聴いているのかと思った。

「なんでこんなところにいるんだ？」

　私はうっすらと目を開けて、私のすぐ傍でしゃがんでいる人物を見た。クセのある短い髪、二十代の頃からある笑い皺、厚みのある赤みがかった唇……。

「洋平？……」

「大丈夫か？」

「あ……」

幻ではない。洋平がそこにいる。私を見つけてくれた。

心細さが解き放たれ、目頭がじわじわと熱くなった。

「立てるか？」

洋平の問い掛けに首を小さく横に振った。貧血がまだ治らず、起き上がるのが怖かった。地面に生気を吸い取られてしまったかのように、自分本来の体温を感じられないのだ。

「そか。じゃあ、少し休んでから帰ろうな」

洋平はそう言いながら、自分の着ていたジャンパーを脱ぎ、私に掛けた。

「ちょっと一人で待てる？　俺、野菜買ってくるから」

薄い長袖Ｔシャツ姿になった洋平が柿沼青果店を指差した。

私はこくりと頷いた。それを確かめた洋平は、「すぐ戻ってくるからね」と言い、私の頭を軽く撫でた。

離れていく洋平の後姿を見ていた。先程と同じく人が遠ざかる光景だったが、私は安心感に満たされていた。私は大きく深呼吸をしながら、良かった……と心底思った。

目を閉じて呼吸することだけに集中していた。冷たい空気をゆっくりと鼻から吸い込み、口から細く長く吐き出す。花の匂いを嗅ぐように、静かにそっと……。これは、洋平が教えてくれた呼吸法だ。

何度か繰り返すうち、徐々に楽になってきた。全身に血が通い出したのがわかる。

見えない壁12

　私は体を横向きにしてから地面に手を付いた。頭を下げたまま上半身を少しずつ起こしていく。血が下がる感覚はない。なんとか落ち着いたとホッとしながら最後に顔を上げると、買い物を終えた洋平が私の隣りに座っていた。

「戻ってたの？　気付かなかった」

　そう呟くと、洋平はにっこり笑った。店の屋根と屋根の間から見える空は、すっかり暗くなっている。

「もう大丈夫か？」

　洋平は私が動けるようになるのを黙って待っていてくれた。

「ずっとそこにいてくれたの？」

「うん。買い物は五分も掛からなかったからね。下手に声かけない方が落ち着くのが早いかなと思って」

　さっき、首を振っただけで吐きそうだったので、彼の判断はとてもありがたかった。

「ごめんね……寒かったでしょ」

　私は借りていたジャンパーを洋平に渡しながら謝った。

「いいよ、さぁ帰ろう」

　洋平が手を差し出す。私は洋平の手につかまりながら腰を上げた。

「うん、帰ろ」

　元来た方へ、二人で手を繋いで歩いていった。洋平に少し重なるようにして身を寄せる。たくさんの人や自転車が押し寄せてきても、もう怖くない。

　商店街を抜けると、灯りのついた家々を静けさが包み込んでいる通りに出る。自分達の家もすぐそこにある。

私は洋平に話さなくてはいけないことを思い浮かべていた。彼は妊娠の事実を知ったらどう思うだろう。どう反応するだろう。私は再びその心配に囚われていた。

不安なまま彼を見る。気配に気付いた洋平も私を見た。そんな話を私が抱えているとは微塵にも思っていない顔をしている。

悩むってことは、相手が悪い反応をするかもって疑ってるってことだろ？

准也の言葉を思い出した。そうだった。私は洋平を信んじている。悲しませるようなことはしないと信じているのだ。

「どした？」

心の中で葛藤していながら、口を噤んでいる私に洋平が訊いた。

「ん？　うん」

今夜には話そうと決意していたことなのに、私の体のあちこちに話をする為の勇気が散らばっている。

「あのね……」

やっとの思いで声が出たものの、肝心な言葉が喉につかえて出てこない。

「疲れたか？　もう少しだからちょっと頑張ってな」

洋平が私を気遣ってくれている。もう、胃潰瘍などと偽っているのは嫌だ。本当の事を話したい。もしも……万が一、洋平が子どもの事を躊躇したら一人で育てればいい。それだけのことだ。私の心は決まっている。洋平と別れる事になっても、子どもの命には代えられない。

洋平と別れる事になっても……。

ふと、彼を信じているという気持ちとは裏腹なことを思った。

見えない壁13

　人間である以上、傷つけ合うことのない関係は有り得ない。故に、洋平に頼らないでいれば、傷を最小限に留めることが出来る。それに、今回の事は人の命に関わる事だ。私自身がどうしたいかを決めていれば、彼がどう出ようと何も戸惑うことなどない。

　私は産みたい。それを明確にした瞬間、「そうじゃないの！」と勢いを付けて言った。

「え、なに？」

　洋平は足を止めた。

「胃潰瘍じゃないの。私、妊娠してるの」

　私はもう何も考えずに一気にまくし立てた。

　洋平は一瞬言葉を失った。眉までひそめている。不安が現実になるかもしれない。それでもいい。私はこの後、洋平がどんな表情に変わるのか、最悪な状況を覚悟した。

「俺の子が、お腹にいるの？」

　洋平が慎重な声で訊いた。

「そうだよ。洋平の子がここで生きてる」

　私は毅然と答えた。まだ膨らみを持たない自分の下腹部を両手で擦る。洋平の子であると同時に私の子だ。洋平が何と言おうと私は産んで育てる。

「なんか、びっくりしたけど、でも……楽しみだな。俺、子ども好きだし」

　洋平は、言葉を一つ一つ選ぶようにゆっくりと呟いた。それから、少し照れたように笑った。

　洋平が、楽しみだと言った。一人で育てる気になっていた私は耳を疑った。

「産んでも、いいの？」

　この場に相応しくない聞き方だったが、それしか言葉が浮かばない。

「なんで？」

「だって、産むってことは……」

「ああ、金が掛かるよな」

「っていうか……」

「頑張って働かなくちゃ」

「っていうかね……」

「家もそのうち改築しなくちゃな。子ども部屋とか作らないといけないし」

「っていうかぁ……」

　産んでもいいとは言うが、ある事を強要されている事に洋平は気付いているのだろうか。彼から愛されている実感はある。けれども、洋平が私と同じことを心から望んでいるのかという自信がない。私が途方にくれていると、洋平がふいに正面に立った。

「里奈」

　洋平は少し屈むような姿勢で私と目線を合わせた。

「そんな恐いひょっとこみたいな顔すんなよ」

　眉間に皺を寄せ、口を尖らせている私に洋平が言った。

「なに？」

「そんな顔してたら、言いづらいだろ？」

「言いづらいって何を？」

　私は更に眉に力を入れながら訊いた。何を言おうとしているのか、思い浮かぶ事はある。だが、あえてわからない振りをした。いや、わからないというより、想像した言葉を洋平が言わなか

ったら……と、高まる気持ちにブレーキを掛けたのだ。

　洋平と出逢う以前、何度となく期待しては落胆し、信じてみようと思ったことに裏切られてきた。今、洋平といて信じられないことなど何もない。だが、これ以上のことが私に訪れるわけがないと、幸せを前にすると過去のトラウマが顔を出す。現に、お金だの家だのそんなことばかり拘っている洋平の事だ。思い切り予想外のことを口走るかもしれない。

見えない壁14

「結婚しよ」

　洋平はまっすぐに私を見つめながら言った。私の後ろ向きな期待を裏切った。でも、彼の言葉は髪を揺らす風のように私の耳元をさらりと抜けていった。それくらい短く、彼にしては小さな声だった。

「結婚してください」

　黙っている私に、洋平がもう一度、今度ははっきりとした口調で言った。そして、深々と頭を下げた。

「だめ？」

　自分の行為が恥ずかしかったのか、洋平はすぐに顔だけひょこっと上げた。

「何か、答えてよ」

　頬を赤らめながら、洋平は私に催促した。

「里奈が何か言ってくれないと、俺、すごく恥ずかしいんだけど。勇気出したんだから何か返事してよ」

　いろいろと問い掛け続ける洋平を私はじっと見ていた。だが、瞬時に湧き出てきた涙に遮られ、彼の姿は見えなくなった。心に絡みつく様々な不安がみるみるうちに解けていく。安堵による涙だと自分で悟ったのは、何度か呼吸を繰り返した後のことだった。

「おいおい、泣くなってば」

　怖い顔をしていた私が泣くとは思わなかったのだろう。洋平は慌てながら私を抱き締めた。

「ずっと一人で抱えてたんだろ。ごめんな、気付いてやれなくて」

　背中を擦る洋平に、私は何度も首を横に振った。二人の間の見えない壁が消えた。

「もう泣くなよぉ。ほら、俺のシャツがぐしゃぐしゃ」

洋平の胸に顔を押し付けていた私は、少しだけ洋平から離れた。ジャンパーの下の白いシャツが、広範囲に渡って淡いグレーに変色している。まずい、と思いながら洋平の目を見ると、「鼻水つけんなよ」と言って笑った。私はこれ見よがしに鼻を思い切り啜った。

まだ目は潤んでいるものの、いつもの調子に戻った私に洋平が切り出した。

「里奈、プロポーズの答えは？　涙って微妙なんだけど」

意地悪い口調だ。

「だって……」

普通プロポーズを受けたら、こちらこそとか、よろしくお願いしますとか答えるのだろうが、微妙などと言われてしまっては素直になれない。

「だって、なに？」

洋平が急かす。

「だって……嬉しかったんだもん」

私は半分むくれながら、答えになっていない答えを呟いた。

「そっか。それなら良かった」

曖昧な言葉でも納得したらしく、洋平はニコリと笑った。おそらく、肯定的な言葉なら何でも納得したのだろう。何でもいいから私に答えさせたかったのだ。

「里奈、俺の子、身ごもってくれてありがとな」

洋平が改まって言った。私は大きく頷いた。そして、自分で発した通り嬉しさでいっぱいになった。

「体、冷えきっちゃったから帰ろう」

洋平は私の右手をぎゅっと握りしめて、家への道を歩き出した。

秘密の指輪1

　一ヶ月経ち、つわりがだいぶ落ち着いた。朝起きてしばらくは動悸がするものの、寝込んだまま動けないということがなくなった。ただ、口の中がねちゃっとしていて、食事の後味が悪いのは治らない。そのせいで食べられるものも酷く偏った。食パンにマーガリンだけ塗ったもの、大学芋に里芋の煮物、ピザはコーンとチーズだけトッピングしたもの、アイスクリームにチョコレート、ゼリー、ヨーグルト等と、これらの繰り返しだ。この他の物も口に入れている最中は何でもなかったりするが、後で胃がもたれて苦しくなってしまう。

　そんな私を見るたびに作り手の洋平は、何がいけなかったのかを分析し、次の食事は何がいいか考える。ピザが平気なのにマヨネーズがダメという我が侭にも応えてくれる。疲れて帰って来て、休む間もなく料理を作るだけでも大変なのに、嫌な顔一つしない。本当に救われる。

　夕方、私は窓から外の景色を眺めていた。もうすぐクリスマスとあって、近所の家の門や生垣には、その家々の個性を表したイルミネーションが飾られていた。赤、青、黄色、緑と彩り鮮やかな家もあれば、白一色、光のボリュームを調整しながら一本の樹に飾り、闇の中に際立つオブジェを作り上げている家もあった。

「ただいま」

　洋平がいつもよりも早く帰ってきた。日課になった偏食対策料理をして、今回は珍しく胃もたれせずに済みそうな私の横で、少し早めの夕食を終えた洋平が私に囁いた。

「これから夜の散歩に行かない？」

　洋平が意外な事を言った。

「今から？」

　洋平との散歩は、寒かろうが暑かろうが私は大歓迎だ。でも、私の体が冷えないようにといつも必要以上に気遣う彼が、真冬の夜の散歩とはどういう風の吹き回しだろう。洋平が何を考えているのか予想がつかない。

「うん、今から。ちょっと連れていきたいところがあるんだ」

「え、どこ？」

「へへぇ、内緒」

　洋平は悪戯っ子のように笑うと、二階に駆け上がっていった。なにやらガサガサやってから降りてきたかと思うと、「里奈はこのセーターとマフラーしてからコート着るんだぞ。あと、手袋とニット帽」と言って、これらのものをテーブルの上にどさっと置いた。

　セーターは太目の毛糸で編まれた白い丸首のもので、これだけで相当な保温性がある。

「完全防備だね」

　私は訳のわからぬまま言われた通りにセーターを羽織ろうと、着ていたパーカーのチャックを下ろしかけた。長袖Ｔシャツの上に直接着ようと思ったのだ。

「脱いじゃダメだよ。パーカーの上からセーター着なきゃ意味ないじゃん」

　洋平が慌てて私を制した。

「もこもこしちゃうよ」

　パーカー自体が裏起毛で厚手の生地なのだ。

「いいの！　見た目は気にするな」

「だって、どこに行くんだか知らないけど恥ずかしいよ。全部真っ白だし」

　唯一、はいていたスカートだけは濃紺のデニムだった。

「大丈夫。人がいないところだから」

「カッコ悪い」

「俺も着替えてくるから」

　再び二階に上がっていく洋平の後姿に私は抗議した。が、同時に日の落ちた外の寒さは尋常じゃないことを思い出した。今、風邪を引いたらお腹の子にも悪影響だ。妊娠中はやたらと薬も飲めない。仕方がないと観念し、私は洋平が指示したモコモコ雪だるまになった。

　玄関を出ると、私の頬を冷気がさらりと撫でにきた。反射的に身を縮めたが、思いの外寒くない。洋平が用意してくれた防寒着のおかげで、温まった体を冷やすまでにはかなり時間を稼げそうだ。

「さて、行こう」

　洋平が私の肩に軽く手を乗せた。彼の服装は、私の防寒第一の出で立ちとは大違いだった。下はチャコールグレーのコーディロイのズボン、上は黒いＴシャツに、生成りのネルシャツ。その上にタイトに決めたジャケットを羽織っている。

「洋平、それで寒くないの？」

　今度は私が心配する番だった。

「大丈夫だよ」

「それにしても、お洒落してない？」

　洋平はアイビーハンチングまで被っている。

「ん？　普通でしょ」

「普通じゃないと思うけど……」

　いつも休日の外出といったらジーンズに長袖のハイネックと決まっている。

「まあまあ、いいから」

「私もお洒落したいよぉ」

「里奈のお洒落は薄着だからダメ」

　子どもに風邪を引かせまいとする過保護な親のようだ。

「いいから早く乗って」

　洋平は右手を伸ばし、キューブのキーレスエントリーのリモコンで開錠した。

「車？　そんなに遠くに行くの？」

　てっきり、近場を歩いて散歩するのかと思っていた。

「すぐだよ。この時間なら」

　私が車のドアをなかなか開けなかったので、洋平が私の前を遮って助手席のドアを開けた。

「お嬢さま、お乗りください」

　大袈裟な身振りで、洋平が執事のように私を車内に導く。

秘密の指輪3

　私はよくわからないまま車に乗り込んだ。私がシートに収まったのを確認すると、洋平が外からドアを閉めた。そして、小走りで車の前を通って運転席側に廻った。私はその様子をフロントガラス越しに目で追った。

　洋平が隣りに座り、シートポジションを調節する。シートベルトを締めたところで私もそれに習う。この後にエンジンを掛ける。シートベルトをしてからエンジンを掛けた方がエコなのだという持論を洋平は持っている。走ってもいないのに燃料を使い、排ガスを出し、騒音になるという無駄があるから、だそうだ。

　スイッチが入ったままのエアコンの噴出し口から冷たい風が出ている。温まるまでの辛抱と私は身を硬くした。

「エンジンが温まるまで、ちょっと切っとくか」

　私が硬直しているのを見て、洋平はスイッチをオフにした。我慢しなくていいんだと、そうしてもらってから思う。自分一人の時はさっさとスイッチを切るくせに、洋平と同行している時は彼にすべてを任せる。彼のコンディション優先と無意識に思ってしまうせいかもしれない。

　自宅を出発し、住宅地を抜け、広い公道に出たところで洋平が再びエアコンをオンにした。温風が足元を包み込んだ。

「洋平、この恰好、暑い。脱いでていいよね」

　車の暖房が効き始めた頃、私は洋平に訊いた。

「ああ、脱ぎな。汗かいたら余計冷えちまうもんな」

　洋平の許可が下りたので、私は帽子と手袋とコートを取り、後部座席にひょいと投げた。勝手に脱いで機嫌を損ねられたりしたら大変だ。しなくてもいい喧嘩はしたくない。

「パーカーも脱いでいい？　きつきつに締め付けられてて苦しいから」

　洋平がお洒落な恰好をしているので、私もパーカー姿になるより、お気に入りのセーター姿で洒落たかったのだ。でもそんなことを言うと、「お洒落より防寒」と言われそうな気がしたので、苦痛を強調してみた。

「え？　たっぷりしたセーターなのに、きついの？」

　今回はすんなりＯＫが出なかった。

「う、うん。お腹が大きくなってきたからかな」

　私は着込んだセーターより苦しい言い訳をした。

「まだそんなに目立ってないと思うけど？」

　当然、突っ込まれた。

「子宮が大きく膨らんでるのよ。洋平も写真見たでしょ？　内側が膨らんでるって苦しいんだから」

　子宮の辺りに膨張感があるのは事実だ。

「胃の膨満感みたいなもんだな。里奈が楽な恰好してな。酔ったら大変だから」

　少し違うような気もした。が、これ以上の議論は危険と判断した。お洒落をすることが目的で、膨満感と子宮の膨張感の違いをはっきりさせたいのではない。私はいそいそとパーカーを脱ぎ、ようやく雪だるまから完全に解放された。

　走り出してから一時間が経過した。道が空いていたのと青信号が続いたおかげで、ほとんどノンストップここまできた。

秘密の指輪4

「近くないじゃん」

　私は海が見えたところで、やけに静かに運転している洋平に言った。

「こんなの遠いうちに入らないよ。俺のテリトリーだし」

　洋平は、なんだかつんけんしている。私の今の言葉が気に触ったのだろうか。確かに自分を否定されることを嫌がる洋平ではあったが、今回は洋平を否定したのではない。場所が近くないと言っただけだ。私の感覚を素直に述べただけなのにヘソを曲げるなんて……。私は心の中で必死に自分を援護していた。洋平に直接ぶつける勇気はない。

　またしばらく二人で黙っていた。くねくねした通りを挟んだ両側には、シャッターの閉まった古い商店や民家の並んでいる。私は、どこへ行くのかなと考えながら、通り過ぎていくそれらを見ていた。

「もうそこだよ。あ、ほら、着いた」

　洋平は車を左折させ、何かの敷地内に入った。

　車から降りた私の目の前に二本の高い松の木があり、その向こう側に古びた平屋の建物が見える。壁は白く、やけに尖った三角屋根はたぶん臙脂色をしている。暗いので臙脂に見えるが、もう少し明るい色なのかもしれない。屋根に近い窓は、ステンドグラスになっている。建物の右横には、鉄骨で組まれた足場のようなものがあり、そのてっぺんには十字架があった。あまりお洒落な風合いではなく、庶民的な雰囲気のある建物だった。

「目的地はここ……？」

　私は洋平に近寄って尋ねた。

「うん。そうだよ」

　車から降りても洋平はポーカーフェイスのままだ。彼にしては珍しく多くを語ろうとしない。やはり怒っているのだろうか。

「散歩って、教会に来ることだったの？」

「うん」

「こんな夜中に？」

「まあまあ、いいから。とにかく入ろう」

「入れるの？」

「入れるさ。教会は、いつでもどなたでも来てくださいってところなんだから。懺悔したい時ってたいてい夜じゃないか？」

「うーん、懺悔したいって思ったことないから……」

「里奈、反省したりすることないの？」

「あるけど、わざわざ教会に行こうとは思わないもん」

「そっか。まあ、今日は懺悔しに来たんじゃないから、難しく考えずにいこう」

　どうしてこの時間に教会に来たのか、謎が解けないままだった。

　私は洋平に、もう一度そのことを問いかけようと、「それで、どうして……」と言いかけた。その瞬間、潮の香りの混ざったひんやりとした風が、その後のセリフをさらうかのように私の髪を一撫でしていった。もう、謎などどうでもよかった。パーカーを脱いでいた私はあまりの寒さに慌てて後部座席のドアを開け、コートを取り出してセーターの上に着た。

秘密の指輪5

「寒いね。入れるんなら早く中に……」

　車のドアを閉めてから、寒いのをどうにかしたい一心で洋平に言った。すると、すぐ隣から声を掛けたにも関わらず、全く噛み合わない言葉が返ってきた。

「あ、忘れてた。ちょっと待ってて」

　洋平は私を手で制して、急に何かを思い出したように教会の裏へ向かって走り出した。

「ええ！　ちょっと待ってよぉ」

　私は洋平を追いかけようとした。でも、お腹のことを考えると走るわけにもいかない。洋平はついて来ちゃダメとでも言いたげに、あっという間に闇に姿を消した。彼を見失った私は、寒くて真っ暗な場所に一人取り残された。

「お寺じゃないから、幽霊は出てこないよね」

　私は恐る恐る辺りを見渡した。墓はなさそうだ。だが、薄暗い外灯が二つあるだけの見知らぬ場所は、何も出てこなかったとしても恐怖を感じるには十分だ。何か嫌な感じを受ける場所には何かいると思った方がいいと、霊感の強い友達が言っていた。そんな余計なことを思い出しながら私は、「大丈夫。怖いけど嫌じゃない。洋平が連れてきてくれたところは嫌な場所じゃない」と、呪文のように唱えていた。

　ところが、何も出てこなくても怖い場所に怖さを引き出すものが突如現れた。元々いたのかもしれないが、キョロキョロしていたせいでそれを見つけてしまった。敷地の入り口付近に、目線を低く下げた位置で二つの点が光っている。ここから十メートルほど離れた辺りだ。

「うっ」

　大声を上げそうになり、咄嗟に両手で口を押さえた。二つの光る点は時折消えたり、左右に動いたりしている。目を逸らせずにいるとその点が右の方にすーっと移動し、外灯のほの暗い灯りの下にぼんやりと影を映した。その輪郭に私は目を凝らした。

「犬？」

　動物が好きな私はホッとした。犬ならいい。どこで飼われている犬でもたいてい手懐ける自信がある。私は犬を脅かさないように少しずつ近寄って……いこうとして、ピタリと歩みを止めた。首輪をしていない。しかも、後ろ足で立ち上がったら私の背丈くらいありそうな体格をしている。首輪が付いている飼い犬なら、万が一噛まれても狂犬病の心配はないだろう。しかし、目の前にいるのは狂犬病の感染の可能性のある野良犬だ。ある意味、お化けより怖い。

「慌てて逃げると、向こうもびっくりして飛び掛ってくるかもしれないもんね。そっと逃げよう、そっと、そっと……」

　自分を冷静に保つために小声でひとり言を呟きながら、私はゆっくりと後ずさりした。一歩、一歩、ゆっくり、ゆっくり……。

　教会の方へ後ろ向きのまま、五、六歩下がったその時だった。そこにあるはずのない生暖かな壁にぶつかった。

「キャァ！」

　私は反射的に悲鳴を上げた。冷静ならそれが何だかすぐに理解出来そうなものだが、なにせ、神経がぴりぴりと尖っている。犬を刺激しないようにしていたことなどすっかり忘れた。

秘密の指輪6

「おい」

　人の声にますますパニックに陥る。幽霊まで出てきたのかと思いながら振り返ると、目をまん丸くした洋平が立っていた。

「あ」

「あ、じゃないよ。何、悲鳴なんて上げてるんだよ。びっくりするじゃん」

　洋平がぶつぶつと文句を言っている。文句を言いたいのはこっちの方だ。安心したのも手伝って、私は腹が立ってきた。

「もう！　どこに行ってたのよぉ。急に置いてかないでよー」

　洋平に怒りをぶつけながら私は半ベソを掻いていた。

「ごめん、ごめん」

　洋平は笑っている。私がパニくる度に喜ぶ傾向がある。

「野良犬に病気移されるとこだったんだからね！」

「野良犬？」

「ほら、あそこ」

　私はずっと同じ場所にいる大型犬を指差した。洋平が近視と乱視の混ざった目を細める。メガネを持っているが運転する時だけしか掛けない。暗いと何も見えないと言いつつ、いつも車の中に置きっ放しだ。

　前屈みになって数歩犬に近づいてから洋平が言った。

「野良犬じゃないじゃん」

「だって首輪してないよ」

　私は必死で訴えた。

「してるって。よく見てみ。毛がふさふさしてるから隠れてるんだよ」

「へ？」

　まだ恐怖の抜け切らない私は、洋平の腕にしっかり掴まったまま犬を凝視した。すると、栗毛色の長い毛のわずかな隙間から、同じ栗毛色の首輪がかすかに見えた。

「それに、しっかり鎖で繋がれてるよ」

　洋平の言葉を聞くのとほぼ同時に、私も鎖を確認していた。

「ほんとだ……」

　私は呆然としたまま洋平に顔を向けた。

「ホントにおっちょこちょいだよな、里奈は。おっちょこ里奈。おちょ里奈と命名してあげよう」
　洋平は私をおちょくっている。

「だって、暗くてわかんなかったんだもん。それに一人でこんなところにいて、すっごく怖かったんだからね」

　私は思いっきり口を尖らせて抵抗した。

「わかったわかった、もう置いてかないから」

　洋平はよしよし、と子どもをあやすように言ってから、「さてと、行きますか」と、私の肩に腕を置いた。

「どこへ？」

「どこへって、この中だよ」

　洋平は顎で教会を指した。

「あ、そか。忘れてた」

「せっかく来たんだから入ってみようよ」

「うん」

洋平のやや大きめの歩幅に合わせて、私は教会の入り口へと向かった。

入り口は、先ほど洋平が消えていった教会の裏手にあった。両側に開く焦茶色の二枚扉があり、片方だけ開いていた。

「夜なのにドア開いてるんだ？」

「え？　ああ、俺がさっき開けっ放しにしちゃったんだよ」

「もう中に入ったの？」

「入ってないよ。開いてるか確かめただけ」

洋平は私の質問をさらりとかわした。確かめるだけなら私が一緒でも良かったはずなのに。私は心細い思いをした分、何か腑に落ちなかった。が、その話をぶり返しても意味がないと黙っていた。

「里奈、おいで」

先に教会の扉の内側に立った洋平が私を手招きした。気のせいか照れているようにも見える。彼が左手を差し出したので、私は彼に近い方の手を伸ばした。すると、私達の他には誰もいないはずの教会に、オルガンの音が鳴り響いた。

「なに？」

私は突然の音色にびくりと身を竦めた。

「大丈夫だよ」

　洋平は何もかも知っているような顔で私に囁いた。私は事態を把握できないまま、洋平の目を見た。洋平は目を細めて笑うと、私の手を右手に持ち替え、自分の左腕に組ませた。

　Ｊ．Ｓバッハの『主よ、人の望みの喜びよ』の優しいゆっくりとした旋律が、ステンドガラスから差し込む月明かりを揺らしている。

「奥に行くよ」

　正面に向けられた長椅子が両側に何列か並べてあり、その中央には赤い絨毯が敷かれている。私達はその上を歩き始めた。父親の腕に掴まってはいないものの、ドラマでよく見る情景だった。

「なんだか、これって……」

　私は小声で言いながら洋平の顔を見た。すると、人差し指を自分の口に当て、静かに、のポーズをした。

　この状況で真面目な顔してると誤解を受けるよ？

　会話をしてくれない洋平に、私は心の中で問い掛けた。洋平は黙って前を見つめている。例えテレパシーが使えても、答えを返してくれそうもない雰囲気だ。

　私はしばらく落ち着かない心持ちで辺りを見渡していた。その間にも洋平は一歩ずつ、私を前へと導く。

　十字架の前にある聖壇の正面に着いた。その時、向かって左横に設置されているオルガンを弾いている人物がはっきり見えた。

秘密の指輪8

「どうして准ちゃんがいるの？」

　美しい旋律を奏でていたのは准也だった。

　准也は幼い頃からピアノを習っていた。バラードからロック、ジャズ、ラテンに至るまで、彼は何でも弾きこなしてしまう。耳がいいこともあり、一度聴いただけで譜面がなくても自由自在に楽器を操る。その際自分流にアレンジしてしまうのだが、大学で組んでいるバンドのライブではそれがかえって好評だった。

　准也は陶酔した表情でオルガンを弾いていた。こういう時に何を言っても、彼の耳には届かない。

　准也の演奏を聴くのは久しぶりだった。彼の創り出す音色が私を神秘の世界へ誘う。准也の演奏には魂が宿っている。生きているのだ。私は准也の演奏を聴くたび、自分の心が潜在的な部分から歓喜するのを感じる。

　曲が鳴り止んだ。

　鍵盤から手を離した准也がゆっくりと立ち上がり、私達の所へやって来た。三十センチ四方の平たくて四角い物を手に持っている。よく見ると、生成りの生地の表紙にクマのアップリケが縫い付けられた、うちにあるものとそっくりなアルバムだった。

　准也は私と洋平の前に立つと、アルバムを自分の手の平に載せた。

「これ、聖書の代わりね。二人ともキリスト教徒じゃないから」

　そう言いながら、准也はアルバムをパラパラと捲って見せた。やはり、私達のものだった。台紙をパンパンになるまで増やしたアルバムには、付き合い始めた頃から最近までの思い出がぎっしり詰まっている。同棲する前から私が貼り続けていたものだ。

　キョトンとしている私とは反対に、洋平は軽く微笑んでいる。事情を知っているようだ。

「えー、ではこのお二人の想い出のアルバムに宣誓していただきます。ここに手を載せて下さい」

　何がなんだかわからないのに、手を載せられるわけがない。

「どういう……こと？」

　私は准也と洋平を交互に見ながら聞いた。

「俺達の結婚式をするんだよ」

　洋平がぽつりと呟いた。

「結婚式？」

「そう。子どもが生まれる前に式をあげとこうと思ってさ」

　結婚式……。

　私は心の中でこの言葉を何度も繰り返した。信じられない気持ちでいっぱいだった。子どもが生まれる前に籍は入れると約束していたが、式をしている暇などないと諦めていた。

「イヤだった？」

　戸惑っている私を見て、洋平が訊いた。

「ううん……」

　私は首を横に振るのが精一杯だった。嫌ではないことは事実だ。ただ、想像もしなかった急な展開に心がついていかない。

「準備にけっこう時間掛けたんだよ」

　准也が横から割って入ってきた。

秘密の指輪9

「里奈にばれないようにするのが大変だったよ」

　洋平が准也に応えた。

「そうだよ、里奈ちゃんずっと家にいるから」

「アルバム、どうやって持ち出そうかって作戦練ったんだよな」

　洋平と准也が示し合わせて準備をしてくれていた。私はようやくこの事態を把握した。

　私が照れながら口角を上げると、それを合図に准也が口調を変えた。

「さて、そろそろ式を進めてもよろしいでしょうか？」

「うん、いいよ」

　洋平が答えると、准也は再び即興牧師に成り代わった。「では……」と言った後、コホンと咳払いをして、少し演技の入った態度で語り始めた。

「グレタ・ガルボの言葉に、『結婚をしないで、なんて私は馬鹿だったんでしょう。これまで見たものの中で最も美しかったものは、腕を組んで歩く老夫婦の姿でした。』というのがあります。若いカップルが腕を組んで歩いているのも、初々しいというか、傍からすればうっとうしいこともありますが、二人が共に歳を重ね、メタボリックに悩むようになり、白髪や皺を鏡で見つけてはため息を付き、そんなことはどうでもよくなるおじいちゃん、おばあちゃんになるまで、お互いを信じ、思いやる心を忘れず、諦めることなく人生の荒波を乗り越えた暁には、こうした幸せが待っているのです」

「おまえ、随分と人生を悟ってるな」

　二十歳の准也の言葉に、洋平が茶々を入れた。

「俺、いいこと言ってるだろ？」

「生意気なんだよ」

「まあ、まあ」

　准也は自分の声に合わせながら、下に向けた手を二回縦に振った。用意してきた言葉に自信があるらしく、洋平に何を言われても気にしない様子で宣誓を続けた。

「ではクライマックスいきます。汝、坂本洋平はこの女、小西里奈を妻とし、腕を組んで歩く老夫婦となるまで彼女を愛することを誓いますか」

「なんか、准也に言われるとむかつくなぁ」

　そう言った洋平の横顔を見ると、心なしか頬が赤い。

「いいから！　誓いますか？」

「脅迫すんなよ」

「脅迫なんかしてねーよ。誓わねぇのかよ」

　准也が半分イライラしてきているのがわかる。私は少しハラハラしながら二人のやり取りを聞いていた。弟が真面目に怒り出す境目を知っている洋平も、これ以上は限界と思ったのだろう。私と一瞬目を合わせ、きっぱりと、でも静かな声で「誓います」と言った。

「よしよし」

　准也は本来言わせたかった言葉を聞いて満足したのか、すぐに機嫌を直した。

「では、汝、小西里奈はこの男、坂本洋平を夫とし、腕を組んで歩く老夫婦となるまで彼を愛することを誓いますか」

　体の向きを変えながら准也が私に尋ねた。

　私は、白髪混じりで目の辺りに笑い皺が目立つようになった洋平の腕につかまって、陽だまりの中を散歩している自分を頭に浮かべていた。私も同じように笑い皺を作りながら、幸せな気持ちいっぱいで笑っている。そんなことを想像しながら横を見ると、笑い皺が未完成の洋平が顔をほころばせていた。

秘密の指輪10

「愛する事を誓いますか？」

　洋平の顔を見つめたまま黙っていた私に、准也が質問を繰り返した。

「誓います」

　私は、濁りのないまっさらな気持ちで答えた。准也は再び満足そうな顔をした。そして、式を進めた。

「では、指輪の交換を行います」

　准也が当たり前のように言った。

「指輪なんて……」

　買ってないよ。私がそう言いかけると、洋平が上着の内ポケットに手を入れ、手にした物をすっと准也に渡した。准也は、私に見せるようにして渡された物の蓋を開いた。准也の手の中にすっぽりと収まった小さな箱には、大小二つ並んだ結婚指輪が入っていた。

「え、なんで？　サイズ、知らないでしょ？」

　ネックレスやブレスレットならともかく、サイズを測らなければ買えないはずの指輪がそこにある。元々、あまりアクセサリーをせず、指輪は一つも持っていない私の指のサイズがどうしてわかったのだろう。だいたいの予測で選んだのだろうか。

「はめてみないとわかんないけど、俺の小指と里奈の人差し指が似てるって前に言ってただろ？　こうやって」

　洋平は私の手を取り、自分の小指を私の人差し指につけてみせた。

「だから薬指は、それより少し細めって考えればいいかなと思ったんだ。ちょっと自信ないんだけど」

　いつも、彼の小指と自分の人差し指を比べて長さが同じだと私が嬉しがっていた事を洋平は覚えていた。それでサイズを予測して買いに行ってくれたのだ。忙しい合間をぬって用意してくれ

たサプライズに、私は感激して目が潤み始めた。

「里奈ちゃん、まだ泣かないでください」

　泣くのを堪える為に唇を噛み締めていた私に、准也はいち早く気が付いた。

「泣いてないもん」

　私はいつものくせで、准也に意地を張った。

「そ？　では、あらためて、指輪の交換をしてください。さて、はまるでしょうか」

　准也は私の言葉を軽く流す。これ以上突くと、もっと泣いてしまうことがわかっているからだ。

「いざ」

　洋平は小さく気合を入れながら、小さい方の指輪を箱から取り出した。

　私は躊躇いながら、左手をゆっくりと洋平に差し出した。彼は再度私の手を取り、薬指の先端に指輪をはめると、一度動きを止めた。

「ドキドキするなぁ」

　顔を上げた洋平が、緊張した空気を破るように大きな声を出した。すると准也が、「俺もぉ」と言って身をよじらせた。私も少しだけ肩の力を抜く。

秘密の指輪11

「はまってくれ」

　洋平が小声で祈るように呟いた。

「大丈夫。神様がついてる」

　准也も、根拠のないことを言いながら胸で十字をきっている。

　厳粛なはずの儀式が、細かいプラモデルでも作っているかのようだ。それぞれに削って、これ以上は削れないというところまでいった凹凸を、今、組合せようとしている。この場にそぐわない緊張感だ。

　洋平が私の薬指の根元に向け、徐々に指輪を沈めていく。キラキラ光るシルバーリングが、私の指の一部になっていく。あと少し。三人で固唾を飲んで見守っていた。

　突然、洋平の手が止まった。第二関節の手前だった。私の関節は少々節が太い。

「うっ、やっぱり目測じゃダメだったか？」

　間髪入れずに准也が言った。

「そんなこというなよ。俺の目に狂いはない」

　冷静に反論していたが、洋平が焦りを見せまいとしているのは一目瞭然だった。それまで指輪を軽く摘まんでいた指先に力が入っている。

「捻りながら押すと入るかも」

　私は、友達がそうやって指輪をはめていた時のことを思い出した。

「こうか？」

　洋平は指輪を右回転させた。それでもうまく関節を通過しない。

「そんなにきつそうに見えないけどなぁ。里奈ちゃん、痛くない？」

　准也が心配そうな顔をした。

「痛くないよ。大丈夫」

　私は落ち着いて答えた。この指輪は必ずはまる。洋平が選んでくれた指輪が私にはまらない訳がない。そんな揺るがない信念が私の中にあった。

　そして、洋平が何度か指輪を持ち直した直後だった。

「お、やった」

「兄貴、さすが」

　つかえていた関節を通り過ぎ、指輪は根元の五ミリ手前にすんなりと収まった。

「すげぇ。ぴったりじゃん」

　准也が自分の事のように喜びながら叫んだ。

「だから言ったろ？　彼女の指のサイズくらい、見ればわかるんだよ」

　難関を突破した洋平は天狗になっている。先程までの焦りはなかったかのようだ。

「いやぁ、見ただけじゃ普通わかんないと思うよ。里奈ちゃんが指を比べたからだろ？」

「まあそうだけどさ。それにしてもぴったりだな。驚いた」

「やっぱり自信がなかったんじゃねぇか」

「うるせーよ。いいから、早く先に進めろ」

「はいはい」

　兄貴のいうことは絶対らしい。兄貴は年上としてのプライドを捨てられないらしい。洋平に急かされた准也は、それ以上反論せずに牧師に戻った。

「では、今度は里奈ちゃん、どうぞ」

　そう言って准也は、一つ置き去りになっていた大きい方の指輪を私に差し出した。

秘密の指輪12

　私の指にはめられたものとお揃いの指輪が光っている。その指輪が洋平の指におさまった時、私達は誰からも認められる夫婦となるのだ。そうなる準備をしてくれたのがこの二人。妊娠がわかってから様々な不安を抱えていた私を光の中に誘い込んでくれた二人に、何といってお礼を言ったらいいかわからない。私は指輪を受け取る前に、感慨深く准也と洋平の顔を見た。

　ところが、私と目が合った二人は目を真ん丸くして、ん？　といった表情をした。兄弟で全く同じ顔をしたので、私はつい「アハ」と笑ってしまった。

「え？　何がおかしいの？」

　洋平が尋ねた。

「ううん、なんでもない」

　私は答えなかった。何か言うのはすべてが終わってから、と思っていた。

「里奈ちゃん、人の顔見て笑ってないで早く指輪を取ってください」

　准也はこの事態を取り合わなかった。

「はい……」

　私は口角を上げたまま、箱から指輪を抜き取った。

「兄貴の指こそ、はまるのか？」

　私が、洋平の左手に手を添えた時、准也が小声で言った。

「あたりまえだろ。自分で買ってきたんだから」

　洋平の言葉の通り、指輪は節の太くない彼の薬指の付け根まで、滑らかに滑っていった。それを見届けると、准也が心なしかニヤリとして言った。

「ええ、では、誓いのキスを……どうぞ！」

　語尾に力を込めて言ったが早いが、准也はくるりと私達に背中を向けた。

「おお、気を遣ってくださって」

　洋平が准也の背中に向かって言った。

「違うよ。濃厚なのを見せつけられたらたまったもんじゃないからな。もういいか？」

　急かすように准也が訊いた。

「まだだよ。じゃあ、見るなよ」

　そう准也に忠告すると、洋平は私にゆっくりと顔を近づけ、唇の柔らかさと温度がわかる長さのキスをした。それは、付き合って初めて洋平がくれたキスと似ていた。

　お互いがお互いをまだよく知らず、それでもお互いに愛しくて、その気持ちを恥ずかしさと少しの意地でひた隠しにしながら、でも表現せずにはいられなかった頃のキス。それに似ていた。

　唇を離した洋平の目を見つめる。すると、洋平は両手を広げて私を包み込んだ。洋平の胸に耳を当てると、彼の心臓の鼓動が普段よりも速く、私の心に響いてきた。

「あ、なんか、俺、お邪魔虫だな」

　痺れを切らして振り向き、抱き合ったままの私達を見て准也が言った。オルガンの椅子に掛けてあった皮ジャンを掴むと、「先、帰るね」と言いながら、バージンロードを出口に向かって歩き出した。

「准ちゃん」

　私は洋平から体を離して呼び止めた。すると、准也が顔だけこちらに向けた。

秘密の指輪13

「今日はありがと」

　私は心を込めてお礼を言った。

「お幸せにね」

　准也は白い歯を見せながらにっこり笑った。そして暗闇の中に消えていった。

「あいつが提案してくれたんだ」

　准也の姿が見えなくなった時、洋平が呟いた。自分の身内を褒めたせいか、少し照れている。

「ちょっと座ろう」

　洋平が最前列の椅子を指す。私は小さく頷いた。

　椅子までの数歩、私はゆっくりと進み、腰を下ろす。話の続きが気になり、目で催促。洋平は私の左隣に座り、ふぅ、と軽く息をついた。ホッとした時の溜め息だ。

「里奈のつわりがひどかったのをあいつも見てただろ？　胃潰瘍じゃなくて妊娠してるんじゃないの？　って聞くから、実はそうなんだって言ったんだ。隠しててもいずれわかることだからね。そしたら、何か想い出になることしてやれよってさ」

　時折私と目を合わせながら、洋平がこれまでの経緯を話し始めた。

「准ちゃん、知ってたの？　昨日だって、胃潰瘍の具合はどう？　って聞いてきたのに」

　私は驚きながら訊いた。

「今日の事、ばれないように必死だったんじゃないの？　准也、すぐに顔に出るから」

「ええ？　知らない振りするの、上手だったよ」

「そか？」

「うん」

　私は力強く頷いた。同時に、妊娠したのは友達だと誤魔化していたことも、准也にばれていたのかと恥ずかしくなった。

「ここ、あいつの知り合いの教会なんだよ。それで、オルガン借りられるっていうから、何日か前から段取り組んでたんだ。盛り上げてやるよっていうから任せちゃった」

「そうだったんだ」

　准也も洋平と同じように交友関係が広い。いろいろな場面でいろいろな手筈を整えるので、感心することがよくある。今回もまた准也に助けられたと思っていると、洋平がそれに反した顔をした。

「でも、こんな式で里奈は良かった？」

「え？」

「もっと友達とか呼んで、披露宴とかやりたかったんじゃない？」

　洋平は不安気だ。人に対してどこまでも気遣う彼は、私の意思を聞かずに計画を立てたことを気にしていた。

「ううん、披露宴はやりたくない。形式的なことやっても嘘っぽいし」

　私はきっぱりと言った。型にはまったことが嫌いな私の本心だ。洋平をかばったのではない。

「嘘っぽい？」

「仲間内でホームパーティみたいなのでお祝いしようよって言ってもらって、来たい人だけ集まるっていうんだったら嬉しいけど……」

　私が語尾を濁すと、「けど？」と洋平が首を傾げた。

秘密の指輪14

「自分達で綺麗な会場借りて、招待状出したりすると、本当は来たくない人まで来てくれたりしそうじゃない？」

「ま、往々にしてそういうことあるな」

「だから、わざわざお金掛けてそういうことするの、私好きじゃないの」

「そっか」

「今日みたいな結婚式、私の理想だからすごく嬉しかった」

　自分の発した言葉に後から感情が付いてきて、私は心の中でもう一度、ホントに嬉しかったよねと自分に向かって呟いた。

「そう思ってくれるならよかった」

　洋平はようやく安心したようだ。笑みが戻ってきた。

「指輪だって、こっそり用意してくれてたんだもんね。その気持ちにジンときちゃった」

　私は真新しいリングの光っている左手を洋平の太股に載せた。

「お店の人にどんなデザインがいいかとか聞きながら選んだんだ。これ、シルバーなんだけど、ホントはプラチナにしようと思ってたんだよ。でも、このデザインでプラチナは取り寄せに時間が掛かるって言うから……」

　私の手に自分の手を重ねながら、洋平は指輪を撫でた。

「どうして？　シルバー好きだよ、私」

　私は手をくるりと返し、洋平と手を無造作に握った。

「シルバーってすぐ黒ずむだろ」

　洋平は自分の手を回転させながら、指と指を交互にさせる形で手を繋ぎ直した。

　私は繋がれた手を見つめながら、器を買いに来るお客さんのシルバーネックレスが黒っぽく変色していたのを思い出した。胸元を飾るはずが、その人の美しさを半減させている。もったいないと思った。

「クロスで磨けばいいんだよね？」

　前向きに考える。

「まあね」

「手入れをしっかりすればいいのよ。そうすればいつもピカピカしてるでしょ。大事にするからね」

　そうそうないが、ネガティブな洋平を前にすると、私は極端なくらいポジティブに振まってしまう。

「ありがとな」

　洋平は私の髪をさらっと撫でた。お礼を言わなくてはならないのは私の方なのに。そう思っている隙に、洋平は私にもう一度短いキスをした。私の、ありがとね、の言葉は彼のキスに遮られ、空気を震わすことはなかった。

「俺達も出ようか」

「うん」

　洋平の後について教会を出る。私は何気なく空を見上げた。首をかくんと後ろに倒し、ほぼ真上を見る。空と言うより広い広い天井だった。あるいは丸い天体の内部から外枠を見ている感覚。いつも無意識に視界に入ってくる空とは明らかに違っている。

「星がたくさん！」

　透明感のある紺碧の空一面に、無数の星が光っていた。余計な灯りに邪魔されないため、細かい砂粒のような星でさえ見失われることなく輝いている。これほど綺麗な星空を見たことのなかった私は、洋平の腕に自分の腕を絡ませながら少し興奮していた。

「都会と違って、それだけ空気が澄んでるってことだよな」

　洋平は私とは反対に冷静に呟き、それきり沈黙した。言葉では空のことを語っていても、何か別のことを考えているようだった。どうしたんだろうと、空に送っていた視線を彼に移すと、洋平は静かに口を開いた。

「入籍は、里奈のお母さんに挨拶してからにしような。この式だって本当はそうしてからにしたかったけど、長い休みがすぐに取れそうもなかったからね」

　入籍という言葉が二人の間で交わされたのは初めてだった。しかも洋平からだ。意外さと嬉しさが入り交じる。私の胸の淡い気持ちを感じる部分が、星空の下で心地好く痛んだ。

香水1

　同棲から、私達は事実上の夫婦として生活するようになった。今までの暮らしと何ら変化があるわけではなかったが、洋平の妻として名乗れることが私にとってこの上ない幸せだった。

　私は結婚指輪を眺めては「洋平とお揃い」と思ってニタニタしていた。

　これまで私達は、ペアで何かを持った事がない。私は前からずっと、いつも持ち歩けるものでお揃いのものを持ちたいと思っていた。が、これといったものが思い浮かばなかった。携帯はそれぞれに使い慣れている機種があるし、ストラップも私と洋平とでは趣味が違う。洋平はネックレスをしないし、ペアルックはそもそも抵抗がある。何も思いつかないと諦めていたところへ、結婚指輪の登場だ。結婚指輪をそれらの類と一緒に考えるのはどうかと思うが、私はようやく念願のものを手に入れることが出来た。しかも、洋平が選んでくれたというおまけ付きだ。嬉しさがこみ上げない訳がない。実際持ってみて、離れている時間もいつも一緒にいるような気になれたのは想像通りだった。

　だが、満たされた心とは裏腹に、年が明けても私の体調は不安定な状態が続いていた。つわりはほとんどなくなってはいたが、めまいや立ち眩みが頻繁に起こり、ひどい時には頭痛もした。国重先生によると、ホルモンや自律神経のバランスの変化によるものなので、もう少し日が経てば軽減すると言うことだった。

「里奈ちゃん、夕御飯どうしてるの？」

　今日子さんに呼び止められた。四週おきの定期検診を終え、会計を済ませて診療所の玄関を出て行こうとした時だった。

「え……出来合いの物を買ってます」

　洋平の作り置きは切れ気味だった。最近の彼は休暇をほとんど取れない。スタッフが一人辞めてしまったとかで、その分の仕事が廻ってくるらしい。洋平が料理する時間がない為私が支度をするのだが、サラダは作れても火を通すものはやはりどうしても作れない。

「そか……料理もけっこう体力使うものね」

　カウンターの奥から出てきた今日子さんは、靴を履こうとしてふらついた私の体を支えながら言った。

　ずっと寝込んでいるわけではないので火さえ怖くなければ料理を作れるのだが、事情を知らない今日子さんは私が体調のせいで作れないと誤解した。でも、私はあえて本当のことを説明しなかった。火が使えないというコンプレックスは、あまり人に晒したくない。

　靴が履けたので礼を言って帰ろうとすると、今日子さんが「洋平君、帰り、遅いの？」と訊いてきた。

「十二時くらいです」

　話が続くと思っていなかった私は、少し驚きながら今日子さんの方に向き直った。

「じゃあ、家のことは全部、里奈ちゃんがやってるんだ」

「まあ……。でも、埃で死なないから掃除はしなくていいって言いながら、洋平がちょこちょこやってくれるんです。何かのついでにクイックルワイパーで」

「何かって？」

「立ったついでです。トイレとかお風呂とか」

「アハハ、まめなのね」

　今日子さんは声を上げて笑うと、「お洗濯は？」と続けた。

「うちに頂き物の乾燥機があるんで、これを使って畳むだけにしてます」

「頂き物？　高価なものくれる人がいるのね」

「知り合いが抽選で当てたらしいです。二台あっても仕かたがないからって」

　乾燥機が来てからも、雨の日に使う以外は外に干していた。洋平も私も陽に干した後の匂いが好きだからだ。が、妊娠してからフル活用している。

「なるべく疲れないようにした方がいいものね。無理して赤ちゃんにもしものことがあったら大変だから」

　私が考えていた事を今日子さんは口にした。私は「ええ」と軽く頷いた。

「でも、食事が出来合いっていうのは栄養偏りそうよね。もしよかったら、私、仕事帰りに里奈ちゃんちに寄ろうか？」

　突然の提案だった。

「え？」

「ご飯作ってあげるよ」

「そんな……」

「遠慮だったらしなくていいから。迷惑だったらやめるけど」

「迷惑だなんて……」

「近所なんだし。私いつも一人でご飯食べてるでしょ。里奈ちゃんと一緒に食べられたら嬉しいななんて思ったんだけど」

「あ、私も嬉しいです」

「でしょ？　夕方、買い物してからだと七時くらいになっちゃうけど、いいよね」

「はい」

「じゃあ、決まり。待っててね」

今日子さんはそういうと、私の前に廻り込んでドアを開けてくれた。私が「すいません」と頭を下げながら外に出ると、「後でね！」と言って手を振り、ドアを閉めた。

閉まったドアを見つめながら、私は少々呆然としていた。完全に彼女のペースだった。断る理由もないが、考える余裕もなかった。夕食の話題になってからの今日子さんの話すスピードは凄まじかった。それでも、もう少し遠慮すべきだったかなと思った。が、今日子さんも一人の食事は寂しいと言っていたことだし、断るのも気まずいかと自己完結した。

家に向かって歩き始めた。一瞬、後ろを振り返る。今日子さんのアパートは、病院からうちとは反対方向に、同じ距離だけ離れたところにある。行ったことはないが、彼女がそう言っていた。

今日子さんは我が家に来たことがある。商店街でばったり会い、陶器の話で盛り上がり、私の作品を見たいというので連れてきた。売っているとわかると、数日後に友達と来て、大量に買いしめてくれた。世話好きな人だとなのだと薄々思っていたが、その通りだった。

家に着いた。靴を脱いだところで力尽き、床にうつぶす。妊娠しているせいなのか、体調のせいなのか、病院の行き来だけで疲れてしまう。この後、夕飯の支度をするとなると少し休んでから気力を奮い起こすのだが、今日はその必要がない。そう思ったら気が抜けて、すーっと気持ちよく意識が遠のいた。

「里奈ちゃん？　大丈夫？」

遠くで声がした。誰だろうと思って薄目を開けると、今日子さんが寝そべった私の横でしゃがんでいた。

香水3

「あ……すみません」

　私は半分眠っている状態で反射的に謝った。ちょうど深い睡眠に入ったところだったのか、頭がぼーっとしている。

「勝手に入ってごめんね。いくらチャイム鳴らしても出てこないから……」

　今日子さんも恐縮している。

「い、いえ……いいんです」

　私は状況を把握しないまま首を横に振った。

　どうして今日子さんがいるのだろう……。

　何気なく今日子さんの手元に視線を移す。白地に英文字が印字された買い物バッグを持っている。スーパーで売られているエコバッグだ。その中から長ネギが見えている。

　長ネギ…………？

　長ネギの青い部分をしばらく見つめた後、私の記憶は物凄い勢いで数時間前に遡った。

「すみません！」

　意識がはっきりした。床に這いつくばっていた体を勢い良く起こす。私はようやく約束していたことを思い出した。

「鍵、いつも開けてるの？」

　今日子さんは面白いものでも見たかのように笑っている。

「いえ、いつもは閉めてます」

　恥ずかしかった。人を来させておいて、この応対は失礼極まりない。

「夕食作るって言ってなければ帰ろうと思ったんだけど、ちょっと心配になっちゃって」

「ごめんなさい。いつも夜まで一人だから、絶対に鍵掛けるんですけど」

「通院は疲れるものね」

「すみません……」

　決して人を責めない今日子さんに、私はまた謝っていた。それから今日子さんの寒そうな足元を見て、慌ててスリッパを差し出した。

「ありがとう。今日は、鶏肉のじぶ煮を作るね」

　スリッパを履きながら、今日子さんが献立名を言った。

「じ、じぶん煮？」

「じぶ煮。本来は鴨肉使って料理するみたいなんだけど、今日は手羽肉」

「じぶ、って何ですか？」

「じぶ煮っていうのはね、鳥肉をそぎ切りにして小麦粉をつけて、醤油と砂糖とみりんとお酒で煮た料理のことなの。鴨とか白鳥とかを使った『麦鳥』っていう料理があって、それが誤って『じゅぶ』って呼ばれて、それが『じぶ』になったんですって」

「はぁ……そうなんですか」

　わかったようなわからないような曖昧な返事をすると、今日子さんはニコリと笑い、台所に向かった。

「キッチン借りるね。あとで洗うから調理道具とお皿も使っていいかな？」

　材料をシンクの前に置いた今日子さんが、私の方に顔をひょいと上げた。

「あ、はい。調味料もうちにあるのでよければ使ってください」

　うちには洋平がこだわって選んだ調味料が揃っている。

「ありがとう。一応持ってきたんだけど、足りなかったら使わせてね」

　私はソファに座り、料理をする今日子さんを見ていた。調理台はカウンターに対面して設置されている。野菜を切るテンポのいい音がしていたと思ったら、鍋に調味料を入れてさっと火にかけ、あっという間に材料を煮込み始めている。手際がいい。

　私も火さえ使えれば……。

　心がもやもやした。洋平が料理をしている時には湧かなかった感情だ。コンプレックスが、私に何かを知らせている。その何かはわからない。

「出来たよ。お待たせ」

　あっという間だった。暗いトンネルに入りかけていた私は、今日子さんの声で引き戻された。

　今日子さんが浅めの鉢とご飯をよそった茶碗を二つずつ運んできた。鉢には煮込んだ手羽肉とほうれん草としめじが品良く盛られ、その真ん中にゆずの皮の細切りとわさびが添えられている。

「うわぁ、おいしそうですね」

　臭覚を刺激する冶部煮の湯気が、減少気味の私の食欲を一気にそそった。

「ご飯炊いてると遅くなっちゃうから、レンジでチンするやつ買って来ちゃった」

　レトルトのご飯だ。

「ああ……ごめんなさい。気が回らなくて……」

　またも、引けを取る。

「いいのよ。何を作るかは買い物しながら決めたんだし。もしパスタだったら、ご飯いらない

でしょ？」

「そっか……」

「うん。だから気にしないで」

　今日子さんは台所に戻ると、もう一品、きゅうりの漬物を運んできた。几帳面に切り口を揃えてある。私だったら切ったきゅうりを包丁で拾い上げ、どさっとばらばらに盛っているところだ。

「これ、私がいつも食べてるのなんだ。美味しいよ」

　そう言って漬物をテーブルに置き、私の斜め前に腰を下ろした。

「ささ、食べよう！」

　今日子さんは箸を両手の親指と人差し指の間に挟んで「いただきます」と言った。ありきたりな動作でも、身のこなしの一つ一つが優雅だ。同じことをしてみても、私はぎこちない。

　まず、鶏肉に箸をつけてみた。しっかりと染み込んだ汁の味がじわっと口の中に広がる。妊娠してからというもの、口の中に違和感があって何を食べても後味が悪かった。が、今日はあまりそれを感じない。

　私は出された物を全部平らげた。この間、病院で初めて会った日のことや国重先生の普段の様子、病院に来る患者さんのことなど、今日子さんが主に話し、私は相槌を打っていた。おもしろ可笑しく話してくれるので笑ってはいたが、後半疲れて愛想笑いになっていたことは否めない。

香水5

「よかった。食欲はあるみたいね」

　私よりも早く食べ終えた今日子さんは、私が箸を置いたのを見計らって台所に向かった。

「これも、里奈ちゃんの手作りよね」

　食器棚から湯飲みを二つ出し、私に掲げて見せる。そして、食材と一緒に買ってきたティーパックのほうじ茶を入れた。

「すみません。初めていらしたお客さんにお茶まで入れさせちゃって……」

　私は負い目を感じた。

「いいのよ。里奈ちゃんが気を遣っちゃうんじゃ私が来る意味がないわ。じぶ煮、口に合ったかしら」

　今日子さんがお茶を啜りながら言った。

「ええ、とってもおいしかったです。今日子さん、料理、お上手ですね」

「またぁ、お世辞言わないで」

「お世辞じゃないですよ。私、洋平の作った料理以外、おいしいと思うことって滅多にないんです」

　栄養を逃さない野菜の切り方、肉を柔らかく煮たり焼いたりするコツを洋平はよく知っている。

「あら。洋平君、お料理上手なの？」

「上手ですよ。学生のとき、レストランの厨房で働いていた事があるって聞いてます」

「そうなんだ。洋平君の分も作っておいたんだけど、持って帰ろうかな……」

　ここへきて初めて、今日子さんが自信のなさそうな顔をした。

「いや、置いといてください。洋平、今日子さんの手作りなんて言ったら、喜んで食べますから」

　私の発言で、人の好意を無駄にするのはさすがに気が引ける。

「そう？　いいのかな。じゃあ、置いておくね」

「はい。助かります」

　私は自分の導いたことで今日子さんが動いたことに感謝した。同時に、今日子さんが調理していた時に感じたもやもやが、色濃く黒い影のようになってきた。笑顔が引きつる。私は今日子さんに表情を読まれないよう、両手で頬の筋肉をほぐした。

「食べたら眠くなってきちゃったね」

　私のしぐさを今日子さんは良いように誤解した。

「そうですね」

　私はもう一度笑顔を作り直した。

「そろそろ片付けてから帰ろうかな」

　今日子さんがテーブルの上の二人分の食器を重ね始めた。私はホッとした自分をはっきりと自覚した。

「それくらい私、やりますから」

　私は手前にあった食器を手にした。

「いいから座ってて！　片付けさせちゃったら、お惣菜買ってくるより負担が増えちゃう」

　今日子さんは私から食器を取り上げると、素早くシンクまで運んだ。私は、（出来たお惣菜だって、お皿に盛るんですけど……）と、何か勘違いしている今日子さんに向かって心の中で反論した。

私は座ってなどいられず、重ねられずに残された湯飲みを持って、今日子さんの後を追った。

香水6

「ああ、もう、里奈ちゃん、ホントに気にしないで。私こういうこと全く苦にならないのよ。看護師やってるでしょ？　弱ってる人見てると放っておけないの。職業病ね」

　今日子さんは私の手から素早く湯飲みを奪い取った。私の両肩を後ろからそっと押し、ソファーに誘導する。私は、されるがままだった。今日子さんの勢いにおされ、自己主張が出来ない。今日子さんは私を座らせたことで満足したのか、にっこりと笑い、左腕にはめた腕時計を見た。

「あ、いけない。もう十時じゃない。のんびりしちゃった。遅くまでごめんね」

　今日子さんは台所に戻ると、洗い桶に水を溜め、水道の水を止めてから食器を洗い始めた。急いで片付けようとしているが、慌てている様子を見せない。何もかも手馴れている。

　洗い終えた今日子さんがこちらに戻ってきた。

「明日も来ていいかな？」

　つけていたエプロンを外しながら今日子さんが言った。

「え？」

　私は正直戸惑った。

「もし、里奈ちゃんさえ良ければ、明日も手伝いにこようかと思うんだけど」

「私は来ていただけると助かりますけど……」

　苦しい社交辞令だ。

「そう？　じゃあまた何か買ってくるね」

　遠慮する間もなかった。今日子さんはそう言うと、空になった買い物袋を持ち、玄関を出ていった。

　閉まった玄関を見ながら、私は深いため息をついた。楽をさせてもらったはずなのに、心と体がずっしりと重い。両手を上げ、軽く伸びをして、肩に入りっぱなしだった力を抜いた。

　明日もこれが続くのか……。

　私は彼女の香水の香りを消す為に、無意識に窓を開けた。

「ただいまー」

　日付が変わるすれすれの時間に洋平が帰ってきた。テレビをつけたまま半分うとうとしていた私は、洋平の声で目を覚ました。

　洋平は靴箱の上の木箱で作られたオルゴールの中に、数個の鍵のついたキーホルダーをしまった。彼の動きはオルゴールの音でわかる。箱の蓋を開けると流れる曲は『ウイ　アー　オール　アローン』。その曲が止むと、洋平が部屋に入ってくる。

　私はゆっくりと立ち上がり、洋平を出迎えた。鞄を受け取りながら「おかえりなさい」と言うと、洋平は二つ数えるくらいの長さのキスをくれた。

「どう？　具合は」

　洋平は真っ先に私の体調を気にした。

「うん、少しまだふらつくけど平気」

　私は彼がそばにいるだけで元気になれる。

香水7

「のんびりリラックス出来た？」

「それがね、今日……」

　私は洋平に、今日子さんが食事を作りに来てくれた事を報告した。嬉しかったとか楽しかったとか、嘘になることは言わなかった。本心も隠した。洋平は愚痴を嫌う。

「へえ、そうなんだ。今日子さんって親切なんだね」

　コートをハンガーに掛けながら、洋平は満更でもない顔をした。

　親切……なのだろう。でも実際には、彼女の行為により疲れ切った自分がいる。私は同意できないまま、「そうだね」と小声で呟いた。

「もう食べたの？」

　二階から着替えを出してきた洋平が訊いた。

「うん、今日子さんと一緒に食べた」

　こう答えてから私は、しまった、と思った。話の流れからして、次に洋平が言う言葉がわかる。

「そっか、俺も食べたかったなぁ」

　言わせてしまった。火を使えない私が決して言わせることの出来ない一言を洋平が言った。後でさり気なく食卓に出し、他の話題で気を逸らせて、この料理に関してはさらっと流そう、そう考えていた。

「洋平の分もあるよ」

　私は言いたくなかった一言を言った。

「え？　ほんと？」

　案の定、洋平の顔がぱっと明るくなる。してほしくなかった反応だ。

「うん。これなんだけど……」

　私は冷蔵庫にしまっておいた洋平の分の鉢を出した。後ろをついて来た洋平が、覗き込むや否な、「治部煮だね」と言った。

「どうしてわかるの？」

　驚いた。この料理名が出てくるとは思わなかった。

「鶏肉がとろっと煮てあるし、わさびも添えてあるからそう思ったんだけど……当たり？」

「うん」

「さすが、俺」

「あ、自分で言ってる。私が言おうと思ったのに」

　私は先に言われたことにかこつけて、溜め込んでいる気持ちを軽くぶつけた。口も尖らせてみる。

「アハハ、じゃあ今度褒めてね」

　洋平は上機嫌でさらりと受け流した。私が雰囲気で気持ちを表したところで、楽観的な洋平には伝わらない。

「それにしても今日子さん、凝ったの作るね」

　洋平が話を戻した。

「作り出してからテーブルに出すまで早かったよ」

　私は料理そのものから話を逸す。

「そっか。彼女は料理、得意なんだね」

洋平は私のコンプレックスを忘れている。

「人の世話するのが苦にならないんだって」

また、逸す。

「看護師さんだもんな。里奈、良かったな。俺ちょっと風呂入ってくる」

洋平は一人で会話に区切りをつけて、浴室に行ってしまった。

私は、「あのね」と洋平の背中に向かって言いかけた。洋平は振り向かずに服を脱いでいる。

「ねえ」

もう一度、声を掛ける。今度は浴室のドアを開ける音に遮られた。

気を遣うから疲れちゃったんだ……。

私は素直に言おうとした言葉を飲み込んだ。

香水8

　浴室からシャワーの音がする。

　私は治部煮をレンジに入れた。温まるまでの間、箸をテーブルに並べる。一緒に自分の箸も並べようとして、ふと、手を止めた。今日はその必要がない。いつも夕方食べ残した物を洋平と食べるのが習慣だった。

　もう食べたんだっけ……。

　私は少々寂しくなりながら、一膳だけ箸を片付けた。

　台所でマグにココアの粉を入れる。ポットのお湯を注ぎ、それを持ってカウンターの椅子に腰掛けた。少し落ち着こう。頭を真っ白にしよう。自分にそう言い聞かせる。何にも拘る事などない。洋平と楽しい時間を過ごせればそれでいい。大丈夫。大丈夫だから……。

　私がココアを半分も飲み切らないうちに、洋平が風呂から上がってきた。

「ああ、さっぱりした。ビール飲もうかな」

　洋平が冷蔵庫を開けた。湯船にゆっくり浸かってきたのか、タオルを腰に巻いた洋平の体から湯気が立ち上っている。洋平は汗が引くまでは、真冬でもパジャマを着ない。

　私は椅子から降り、自分の手を彼の体にかざした。

「俺、里奈のストーブみたいだな」

　洋平は缶ビールのプルトップを開けながら、ぼそっと呟いた。

「だって、あったかいんだもん」

　洋平の体温は私を芯から温める。

「そっかそっか」

　洋平はビールをテーブルに置くと、私を両手で抱きしめた。

「冷え切っちゃってるじゃん。窓際でなんか寝てるから」

　洋平の心配する声を体で感じながら、私はようやく安心することが出来た。

　ところが。

「よし、今日子さんの手作り料理をいただくとしますか」

　ほっとしたのもつかの間、洋平は私の体を離すと食事に注目した。

　私の胸は再び痛んだ。料理という言葉に異常なほどびりびりと反応してしまう。空腹なのだから彼の言動は当然だという単純な発想が思い浮かばない。

「いただきます。里奈は？　全部食べちゃったんだっけ？」

　洋平が訊いた。私は必死で笑顔を作りながら頷いた。

「おお、うまいな。これは作り慣れている人の味だね」

　洋平はいつになくハイペースで料理を口に運んでいる。他の女の人が作った料理で腹を満たしている。

　私は洋平に自分で作ったものを食べさせてあげる事が出来ない。悲しかった。悔しいと言った方が今の気持ちに近いかもしれない。

「ずいぶん、静かだな」

　洋平がやっと、話に乗ってこない私に気が付いた。

「え？　ちょっと疲れちゃって……」

「俺を待って遅くまで起きてると疲れちゃうよな。先に寝てていいぞ」

　そうじゃないよ……。

　心で訴える。洋平が帰ってくると、どんなに疲れていても元気が湧いてくるのが私なのだ。それを伝えたら、じゃあ、なぜ？　と洋平は聞くに決まっている。今日子さんに嫉妬しているなど

と口が裂けても言えない。洋平はきっと困った顔をする。今日子さんは洋平を喜ばせたのに、私が彼の笑顔を曇らせるなんて絶対に嫌だ。

　私はすくっと立ち上がった。

「思い出した。今日、検診日だったんだ。病院行くだけで疲れちゃうなんて体力落ちたよね。今日だけ先に寝るね」

　早口でそう告げると、私は二階へと上がった。

　次の日、やはり今日子さんはやって来た。

　前の日と同じ時間に来て、同じように手の込んだ料理を手早く作った。私と二人で食べて、今日子さんの身の周りで起きたことについて彼女が主に話し、十時ごろ帰っていった。その次の日も、またその次の日も、同じような光景が繰り返された。

　さばさばとした今日子さんの振る舞いは、決して気に触るものではない。私に対して無理を強いる事もない。それでも私は日に日に憂鬱さが増していく。たぶん、今日子さんの好意が私の為だけに留まっていれば、何も心に引っかかるものはなかったのだと思う。しかし彼女は毎日、洋平の食事も欠かさずラップをして冷蔵庫に残していく。それがどうしても嫌だった。洋平が毎日それを美味しそうに食べるということが、辛くてたまらなかった。

疎外感1

　今日子さんがはじめて来た日から数えて九日後、洋平が久しぶりの休暇を取った。今日子さんには昨夜のうちに、『明日の夜は予定があるので』と伝えてある。だから今日は二人で一日のんびり過ごせる。昨日までずっと取れなかったこめかみの痛みが、今日は全く感じられない。

　私は洋平のためにコーヒーをいれ、トーストといちごジャムを用意した。二人でパジャマのままカウンターに並んで座り、私は洋平の横顔を覗き込んではニヤニヤしていた。

「嬉しそうだなぁ、里奈」

　手についたパンのかすを皿に落とすと、洋平は顔をこちらに向けて私の顔を覗き込んだ。

「え、そう？」

　私はトーストにかじりつきながら、とぼけてみせた。

「里奈は面白いな」

　唐突に洋平が言った。

「ん？」

　私は唇についたジャムを舐めながら訊いた。

「わかりやすいよ」

「何が？」

「今、俺といて楽しいって顔してる」

　当たり前でしょ。

　私はそう答える代わりに、にたーっと笑う。

「洋平は？　私といて楽しい？」

　お返しに訊く。滅多に聞けないのでいい機会だ。

「聞かないとわからない？　俺の気持ち」

　洋平もはっきりとは答えない。なので、

「わかるもん。すっごく楽しいって思ってる！」

　と、そうだったらいいなという願望を断定した言葉で言った。

「アハハ。ムキになってる」

　洋平は私をからかうようにして笑った。私は膨れっ面をしながら、内心嬉しくて仕方がなかった。洋平が私の髪をくしゃっとする。怒った振りを続けられず、私はまた、にたーっと笑った。

「今日は天気もいいから、どこかに出かけようか」

　洋平が提案した。

　私は「うん！」と勢い良く返事をした。窓から見える空を見た時から、そう言ってくれるのを待っていた。が、何か忘れている気もする。私は頭の中のスケジュールを紐解いた。

「ダメだ……今日しか来られないっていうお客さんが昼に来るんだった……」

　私の作品を見たいという人との約束を思い出した。がっかりしていると、

「じゃあ、俺がしっかりと里奈の作品、売ってやるからな」

　と、洋平が私の肩に手を置いた。洋平の話術は長けている。その彼がお客さんの相手をしてくれるとなれば、これほど心強いことはない。私は再び気分を高揚させながら「うん」と頷いた。

「それまでの時間、素焼きしたままの湯飲み、釉掛けない？　本焼きしちゃおうよ」

　洋平が言った。私達の共同作品の作りかけの湯飲みのことだ。粘土で作ったその日から私のつわりが始まった為、高台を作ったり素焼きしたりと、そこまでの工程を洋平が一人で作業してくれていた。

「そうだねー。どんな模様にしよっか」

　私は陶器の写真集を棚から出してきて、パラパラと捲って洋平に見せた。

「これなんか、いい感じじゃない？　この色」

　洋平は、半磁器土で作られた壷を指差した。

「マロン釉だね。うん、赤っぽい感じが可愛いかも」

「じゃ、決定ね。うちにある？　その釉」

「あるよ。棚の一番下に」

「よし、さっそくやろうか」

　食器を私の分まで片付けてくれた洋平は、腕まくりをしながら作業場へと向かった。私もよいしょと立ち上がる。洋平の背中について行く。思わず頬が緩む。二人の共同作業が始まると思うとつい、気持ちが弾んでしまう。

　洋平がバケツにマロン釉を入れている間に、私は棚から素焼きした湯飲みを持ってきた。

「お、サンキュ。入れるぞー」

　そう言って洋平は、釉の中にそっと湯飲みを沈めた。白かった湯飲みが紅色に変化した。

「いい色だね」

「こんなのでいいよな」

　私が窯の蓋を開けると、洋平は化粧し終えた湯飲みを入れ、一二五〇度に温度をセットした。

「十三時間後が楽しみだな」

「うん」

出来上がりを思い浮かべながら私は頷いた。

玄関のチャイムが鳴った。

「こんな朝早くから誰だろ」

洋平が言った。十時を少し過ぎただけだったが、寝坊して一時間前に起きたばかりの私達にとっては早朝と同じ感覚だった。

「はーい」

ドアスコープを覗くとすぐに、洋平はドアを開けた。

「あれ？　今日子？　今日子だよな？」

洋平は驚きながらも弾んだ声を上げた。

「あれ？　洋ちゃん？　なんでここにいるの？」

その声は今日子さんだった。昔からの知り合いのように、お互い下の名を呼び合っている。私は息を潜めながら玄関の様子をうかがった。

「なんでって、ここが俺の家だもん」

「里奈ちゃんの旦那さんって洋ちゃんだったの？」

「そうだよ。看護師の今日子さんって今日子の事だったんだ。この前、受付にいたよなぁ」

「うん。でも目が合わなかったね」

「俺、慌てて薬局に飛んでったからな」

「私も下向いてたのかも」

「帰る時も受付覗かなかったしな」

「奥さんの為に偉いね」

「当たり前だろ。上がれよ」

洋平は私に何も聞かないうちに今日子さんを家に上げた。

疎外感3

　私は心臓がズキリとした。嫌な鼓動も打ち始めた。二人きりでいられるのは午前中だけなのに、それを知っていながら洋平は彼女を招き入れた。しかもあんなに親しげにしている。私は浅い呼吸しか出来なくなった。

「里奈ちゃん、こんにちは」

　作業場でうつむいていた私に、今日子さんが挨拶をした。眉間に皺が寄っていた私は、一回ぎゅっと目を瞑ってから顔を上げた。

「こんにちは！　今日は仕事お休みなんですか？」

　私はつとめて明るく振舞った。

「午後から用事があるから今日はお休みもらったんだ。里奈ちゃん、朝ならいるかなと思って来ちゃった」

　そう言って今日子さんは「ふふっ」と笑った。私は、予定があるのを夜と限定したことを後悔した。

「今、お茶いれますね」

　私は作業場を出た。

「あ、私やるわよ」

　いつもの調子で今日子さんが台所に向かおうとする。

「いえ、今日は体調がいいんです。今日子さんは座っていてください」

　私は今日子さんを軽く手で制した。自宅だというのに、人に世話になっているところなど洋平に見られたくない。こめかみがズキズキと痛み出す。今日子さんのつけている甘い香水の香りを嗅いだ途端だった。

　洋平が今日子さんをリビングに通す。私は台所へ。

　激しくなっていく頭痛に耐えながら急須を手に取った。洋平と今日子さんの会話は全く聞き取れない。時折、今日子さんの甲高い笑い声が部屋中に響き渡る。洋平が彼女を笑わせている。私は耳を覆いたいのに覆えない。

「どうぞ」

　私はテーブルの上に熱いお茶の入った湯飲みを三つ置いた。洋平と私にはいつも使っている大小お揃いの湯飲みで、今日子さんには彼女がいつもうちで使っている湯のみだ。

「あれ？　里奈ちゃん用の湯飲みがあったんだね。いつも違う湯飲み使ってごめんね」

　今日子さんは湯飲みの違いにいち早く気付いた。

　彼女がいつもうちでお茶をいれる時、食器棚から適当なのを選んで出してくれていた。私も普段、来客があると洋平とお揃いの湯飲みを使わず、すべてバラバラのデザインのものを出した。一人だけ違うものにすると、その人が疎外感を感じるのではないかと考えてしまうからだ。それほど神経質にならなくてもいいと洋平には言われるが、誰かが淋しい思いをするのが嫌だった。

「いえ、いいんです。お客さんが来た時は自分の湯飲み、使いませんから」

　そう言いながら、今の私は今日子さんに対し、自分の意に添わない事をしている。罪悪感に苛まれながらも、意識的にこのお揃いの湯飲みを選んでいる。自分でも整理のつかない胸の内を、この女性に訴えたかったのかもしれない。

「そう。なら良かった」

　今日子さんは何も気にしていない様子だった。

　一瞬の沈黙。空気が張り詰めていると感じたのは、おそらく私だけだろう。いたたまれなくなり、私から話題を振った。

疎外感4

「洋平は今日子さんとどういう繋がりなの？」

　あまり聞きたくはない話だったが、口をついて出たのがこの事だった。

「今日子は中学の時の同級生だったんだ。こいつ、おしとやかそうにしてるけど、男相手に喧嘩ふっかけたりするんだぜ」

　洋平は懐かしそうに昔を振り返った。

「人聞きの悪い事言わないでよ。筋の通らないことが嫌いなだけよ」

　今日子さんが洋平に反論する。

「正義感が強いんだよな」

「別に、普通でしょ？」

「相変わらずだな。男見たいなとこ」

「うるさいなぁ。大人の女性つかまえて失礼よ」

　二人の会話に私の入る隙はない。もう既に置いてきぼりだった。

「それにしても、すっげぇ久しぶりだよな。中学以来か？」

「そうかもね。私、高校入学と同時に引っ越しちゃったから」

「ああ、だから急に見かけなくなったんだ。どっかの男に騙されて遠くに連れてかれたのかと思ったよ」

「なによ、それ」

「おまえ、男関係派手だったじゃん」

「人を遊び人みたいに言わないでくれる？」

　洋平が他人に向かって乱暴な口を利くのを、私は初めて聞いた。しかしそこには、親密な同士だけに通じる柔らかさがあった。

「午後、急ぐの？　時間があるんなら昼だけでもうちで食ってけば？」

　洋平が今日子さんに食事をもてなそうとしている。

　ちょっと待ってよ……。

　私は心で必死に抵抗する。

「もしかして、洋ちゃんが作ってくれるの？」

「そだよ」

「ホント？　嬉しい！　昔から洋ちゃん、料理上手だったもんね」

「まあな。里奈、今もだよな」

　二人の注目が私に集まる。

「え？　ああ、うん」

　私は治まらない頭痛を堪えながら、下がっていた口角を上げた。

「今でも時々作ってるんだ？」

　今日子さんが再び洋平に目を移し、興奮気味に訊いた。

「そりゃそうだよ。俺、料理、趣味だもん」

　洋平は得意気だ。

「久しぶりに食べたいなぁ」

　今日子さんは甘えるような声で洋平に言った。

「いいよ、そうしな」

　洋平はすんなりＯＫした。

　私は今日子さんを訝しく思った。

　この人は貴重な二人の時間をどこまで邪魔するんだろう。洋平が忙しくていつも家にいないことを知っているのに……。

　無神経すぎると思った。それともわざとやっているのか。そんな疑念さえ湧いてきてしまう。

疎外感5

「よし、ちょっと待っててな」

　洋平は私の入れたお茶を急いで飲み干し、腰を上げた。

「ほんとにいいの？」

　台所へ向かう洋平に、今日子さんが言った。

「いいのかな？　里奈ちゃん」

　洋平が答えなかったせいか、私にも訊いた。

「ええ」

　ここまで話が進んでいるのに、ダメですと言えるはずがない。今日子さんのわざとらしさに私は辟易した。

　洋平は浅い鍋とフライパンをシンクの下から出すと、冷凍していた豚バラのブロック肉を取り出した。

「一番得意なの、作るから」

　洋平が振り返りながら言った。

「洋ちゃんの得意っていったら角煮でしょ。里奈ちゃん、いつも洋ちゃんの料理が食べられて幸せね」

　今日子さんがテーブルに両肘をついて、洋平の事を眺めながら言った。洋平は既にフライパンで肉を焼くことに集中している。

「いつもじゃないです。仕事で帰りが遅いですから」

　たまにだって十分満足だった。幸せです、と答えたかった。でも、洋平の得意料理を食べたことのあると言った今日子さんに対して、私は自分でも嫌になるほどひねくれていた。

「あ、そっか……私が来てた昨日まで一回も洋平君と顔を合わせなかったんだから、作ってる暇だってないわよね。ごめんごめん」

　今日子さんはあっさりと答えた。私のとげとげしさが全く気にならないようだ。小さくため息をついた私を見て、「里奈ちゃん、顔色がなんだか悪いわ」と、誤解さえしている。

「ちょっと、さっきからまた頭が痛くて……」

　その香水の匂い、なんとかなりませんか……。

　吐き捨てそうになるこのセリフを、私は何度も飲み込んだ。

「里奈ちゃん、ホントに大丈夫？　ちょっと洋ちゃん！」

　今日子さんがふいに彼を呼んだ。私の頭痛の事を知らせようとしている。

「今日子さん！　洋平には」

　私は慌てて彼女を制した後、「言わないでください。心配掛けたくないんです。頭痛はいつものことだから」と、声を潜めて言った。

「え？　何か言った？」

　背中を向けたまま大声で洋平が訊いた。鍋に調味料を入れている最中だった。

「ううん、あとどれくらいって聞こうとしたんだけど、まだだよね」

「なんだよ、じゃあ急かすなよ。まだ時間、大丈夫なんだろ？」

「うん、大丈夫」

「なら、静かに待ってろ」

　洋平の言葉に今日子さんはぺろっと舌を出した。

「少し横になる？　病院で妊娠中でも大丈夫な薬、処方してもらってこようか」

今日子さんが私の耳元に顔を近づけて小声で言った。香水の香りが鼻につく。強まる痛さに心が揺らいだが、今日子さんに甘えたくない気持ちの方が強かった。

疎外感6

「すぐに治まると思うんで……。すみません、少し目を瞑っててていいですか」

　私は今日子さんの返事を待たずに、目を閉じてうつむいた。

　私は意識してゆっくりと呼吸を繰り返しながら、触覚と聴覚を過敏に働かせていた。今日子さんが立ち上がれば、乱された風が私の肌を撫でる。洋平に近づこうとすれば、足音は私から遠ざかる。それが現実のものとなっても、私は決して言葉で制することは出来ない。引き止める正当な理由が見つからない。

　洋平のそばに近寄らないで！……。

　私は呪文のように心の中で叫んでいた。

「お待たせー。洋平特製、豚の角煮だぞ。今日はワインで煮込んだから美味いよぉ」

　洋平が角煮を盛った大皿を運んできた。だいこんとゆで卵も一緒に煮てあった。

「うわぁ、美味しそう！」

「うまいに決まってんじゃん。ほら、食べな」

　洋平から箸を受け取った今日子さんは、角煮に手を伸ばした。ひとかたまりの大きさがかなりあったのだが、今日子さんはそれを一口で頬張った。洋平は「今、ご飯よそってくるから」と言って台所に戻った。

「おいしい！」

　今日子さんは洋平を目で追いながら言った。本当に美味しそうな顔をしている。

「そうだろ？　俺の自慢料理だからな」

　ご飯をよそった茶碗をテーブルに置きながら、洋平も満面の笑みを浮かべている。私は全く食欲が湧かなかったが、誰かの前で無愛想にしていることを洋平は極端に嫌うので、気を張って背筋を伸ばしていた。

「里奈も食べな」

　穏やかな振りをしているのが精一杯で、箸を持つ事を忘れていた私に洋平が言った。私にはいつもの優しい言い方だった。

　今日子さんには決して投げ掛けない優しい言葉遣い……。

　今日はそれがなんとなく淋しかった。

「あ、うん。いただきます」

　私が食べ始めると洋平は、「料理は楽しいけど、腰が痛くなるな」と言って腰を叩いた。私が軽く微笑むと、洋平は再び今日子さんと会話を始めた。

「午後から用事って、もしかして今日子、デートじゃないの？」

　たんまりとご飯を口に入れながら、洋平が今日子さんをからかった。

「そうだったらいいんだけどね。父の誕生日プレゼントを買いに行くのよ」

　今日子さんは軽くかわす。冗談めいた質問にはまともに取り合わないという感じだ。

「親父さんの？　親孝行じゃん」

「離れて暮らしてるし、今、体壊してて入院してるのよ。気が滅入ってるみたいだから、何かこう、和めるようなものあげたいなと思って」

「何買うか、決まってんの？」

「……それなんだけど」

　今日子さんはそう言うと、ほんの一瞬沈黙して言葉を濁した。

「まだ決めてないの？」

　洋平は今日子さんの言葉を引き出す。

疎外感7

「うん。何にしたらいいか候補も思いつかなくて、どこのお店に行こうかも迷ってるの」

「そうなんだ。何がいいんだろうね。親父さんだろ？　そうだなぁ……」

　洋平は真剣に考えているようでいないような曖昧な態度を取った。会話が途切れる。私も黙っていた。目だけを動かし、今日子さんの表情をみる。何か躊躇っているようだ。

「あのさ……」

　少しの沈黙の後、今日子さんが口を開いた。

「ん？」

　洋平が応える。

「もし良ければなんだけど、お二人で私の買い物に付き合ってもらえないかな？　アドバイスしてほしいななんて思ったんだけど」

　今日子さんが上目遣いをしながら言った。ずうずうしいお願いだとわかっているといったアピールをしている。

　私は謝りながら断ろうとした。午後は洋平の助け舟してもらいながら、陶芸品を買いに来るお客さんを迎えるのだ。たとえ今日子さんにひがんだ気持ちを抱いていなくても、買い物に付き合うことは出来ない。ところが……。

「いいよ。なあ、里奈」

　洋平は二つ返事で今日子さんの申し出を受けてしまった。私はたまらず、

「でも、午後はお客さんがくるから……」

　と、洋平に訴えた。

「あ、そっか……」

洋平はそのことをすっかり忘れていたらしい。

「何か予定が入ってるんだね。ごめんね。気にしないで！」

今日子さんはすぐに申し出を撤回した。

「ごめんな……申し訳ない」

洋平は何かとても悪い事をしたかのようにバツの悪い顔をした。

私は心が苦しくなった。私を優先してくれた事はこの上なく嬉しかったが、彼が人に謝罪しなければならない状況を見過ごすのは嫌だった。助けを求めた人をこのまま帰してしまったら、洋平はしばらくの間、このことを引きずってしまうに違いない。第三者の間に挟まれてどちらかを選択しなくてはならないのならともかく、今回は私が我慢すれば済むことなのだ。たとえ、相手が今日子さんであっても……。

「私は一人で平気だよ。洋平、今日子さんと買い物に行ってきて」

「え、でも、里奈ちゃんを一人置いて行けないわ。だって、まだ……」

今日子さんは私の頭痛を気にしている。

「大丈夫です」

私は頭を小さく横に振って、今日子さんに黙っててくださいと合図した。

「一人で接客出来るか？」

洋平が訊いた。今日子さんが言いかけたことには気づいていないようだ。

「うん。だっていつも一人だよ」

「そか。じゃあ、買い物行ってくるぞ？」

「うん。今日子さん、洋平といいもの見つけてください」

「ホントにいいの？　大丈夫？」

　今日子さんが改めて訊いた。

「はい」

　嫉妬する気持ちが脹らんで不安から洋平を縛り付けたのでは、彼の役に立つどころかお荷物になってしまう。そんな自分ではあまりにも情けない。私はそう思って、

「早く行って、いろんなお店見てきてください」

　と、二人に笑ってみせた。

疎外感8

　洋平と今日子さんが出かけてから、私は作業場の片付けに取り掛かった。

　作業台は綺麗に雑巾がけをし、庭を飾っていたパンジーのプランターを置いた。このプランターは私がタタラ作りで作陶したものだ。それからお客さんとお茶を飲めるように、端に寄せてあった小さめの丸い木製のテーブルと椅子を中央に移動させた。

　頭痛はいつの間にか和らいでいた。体を動かした心地良い疲れが気分を軽くする。

　ファンヒーターをつけると、玄関をノックする音がした。

「こんにちは」

　ドアを開けると、川崎さんがにこりと笑って会釈した。半年前、私がフリーマーケットで出店した時から付き合いのある小柄な女性だ。歳は五十歳前半といったところか。ご自分にお子さんがいないせいか、私を娘のように可愛がってくれる。

　私が手で招くと、川崎さんは一歩ずつゆっくりと家の中に入ってきた。

「ご無沙汰してます。わざわざ来ていただいて恐縮です」

　私が挨拶すると、川崎さんは「モナカ買って来たの。これ、美味しいわよ」と、包んでいた風呂敷を広げ、お土産を私にくれた。

「すみません、気を遣っていただいて。ありがとうございます」

　私がそう言うと、川崎さんは「里奈ちゃんと一緒に食べたかったのよ」と微笑んだ。

　川崎さんは、ここまで電車で一時間かけてやって来る。フリーマーケットの日、川崎さんは友達の家に遊びに来ていて、散歩途中、私の広げていた店に目を留めてくれたのだ。

　私は作業場に案内し、まずはのんびりとお茶を飲んでもらおうと椅子を引いた。

「川崎さんはコーヒーと紅茶、どちらがいいですか？　モナカだからお茶がいいですか？」

　川崎さんが椅子に腰掛けてから訊いた。

「えっと……じゃあ、紅茶をいただこうかしら」

　川崎さんはおっとりとした口調で言った。

「わかりました。ちょっと待っててくださいね」

　私が台所に行って紅茶を用意し、モナカを添え、天然のい草で畳風に作られた小振りの盆に載せて出した。

「あら、お洒落。里奈ちゃん、趣味がいいわ」

　川崎さんが盆を指して言った。これまで数人の来客にこの盆でお茶を出したが、注目したのは川崎さんが初めてだった。

「ありがとうございます。私も一目惚れだったんですよ。陶器を載せるのに柔らかい感じがいいなと思って」

　私は照れ臭さを隠しながら説明した。

「私もこういうの、買おうかしら」

　川崎さんがカップをソーサーごと浮かせて、盆に描かれた紫のリンドウの花を眺めた。私はモナカをかじりながら、「使い易いですよ」と付け足した。

「このお盆、どこに売ってるの？」

　川崎さんが訊いた。

「近所の雑貨屋です。商店街の中の」

「じゃあ、近いわね。帰りに寄ってみようかしら」

「ぜひ。商店街わかりますか？」

「うん、大丈夫。ありがとう」

川崎さんはそう言うと、カップを盆に下し、モナカを口に運んだ。

疎外感9

「今、棚にあったものを見せていただいてたんだけど、あれなんか素敵ね」

　口の中のモナカを飲み込んだ後、川崎さんが言った。

「どれですか？」

　私が訊くと、川崎さんは立ち上がり、棚に近づいた。川崎さんが指したものは、貝殻の模様をあしらった円形の平皿を、三枚三つ葉のように組み合わせた器だった。

「川崎さんだったら、これに何を載せますか？」

　いろいろな用途に使えそうだが、人はどう使うのか聞いてみたかった。

「そうね、剣山を置いて花を生けてみたりするのはどうかしら」

　川崎さんは間を置かずにすぐに答えた。最初に皿を見た時、既にイメージしていたようだ。私が質問するであろうということもわかっていたのかもしれない。

「さすが。食器としては使わないんですね」

「ううん、三枚にそれぞれ違うお惣菜を載せるのも洒落かなとは思ったんだけど、それじゃ当たり前だから少し頭をひねってみたのよ。いろんな種類のプチケーキを載せてケーキパーティやったら楽しいと思わない？」

　この器は幅が三十センチあり、プチケーキだったら十個くらい載るだろうか。

「そしたら、もう一つ同じようなお皿作りますよ。私みたいにケーキが大好きな人が集まったら、このお皿に載るだけじゃきっと足りないかも」

「ふふ、そうね。じゃあまずは一枚、いただこうかしら」

　川崎さんは、ほとんど迷うことなく決めた。

「ありがとうございます。他のもゆっくり見てってくださいね」

私はそう言って、川崎さんの選んだ器を包装するために作業台に運んだ。

久しぶりに手に取った器を見ながら、私は洋平の言葉を思い出していた。

これには酒のツマミを入れられるよな。三種類。

作品を作り上げる度、洋平はその一つ一つに必ず感想を言う。

これで焼酎飲んだら美味そうだな。

俺の角煮用に作っただろ。

その時の事を思い出すと、すべての作品に愛着が湧いて手放し難くなってしまう。でも、全てを自分達で使うことは出来ない。使わないで棚に置いたままにしておくのは陶器があまりにも不憫だ。生活の中で必要とすることで陶器は生きるのだから。

だから、私は大切にしてくださる人だけに譲る。買ってくださった方と陶器の縁を信じて……。

一通り見て廻った後、川崎さんは三つ葉平皿の他に黒釉のぐい飲みを選んだ。私はそれを丁寧に包み、紙袋に入れた。

「紅茶、入れ直しますね。お座りになってて下さい」

紙袋を川崎さんに手渡し、私は盆を持って再び台所に立った。ティーポットの中の茶葉を新しいものにし、ポットの熱いお湯を注ぐ。三分ほど蒸らしてからカップへ。それを運んでいくと、川崎さんが無表情で私の方をじっと見ていた。

「川崎さん？」

私が名前を呼んでも、川崎さんは何も答えない。川崎さんの目を見ると、私の体の輪郭に沿って瞳を動かしているようだった。

どうなさいました？

そう聞こうとしたが、言葉にしてはいけないような軽い威圧感があった。少しの緊張を強いられる。私は静寂を壊さないよう、紅茶をそっとテーブルに置いた。

しばらくして、川崎さんは小さく鼻から息を吸い込んだ。

疎外感10

「里奈ちゃんのオーラが見えたんだけど……」

　川崎さんがようやく言葉を発した。沈黙が長く感じられたが、飲まれずにいた紅茶は白い湯気をまだたっぷりと漂わせていた。

「オーラ……ですか？」

　私は戸惑いながら訊いた。

「うん、オーラって知ってる？　人や動物とか命があるものに存在する微弱な電波エネルギーなの」

「はあ」

　オーラという言葉は聞いた事がある。が、どんなものなのか、具体的にはわからない。

「少し気になる事があったんだけど、言ってもいいかな」

　そう言った川崎さんの表情が心なしか曇った。良くない事を告げようとしているのは明らかだった。

　聞かない方がいいかもしれない。私は直感的にそう思った。でも、聞かないで過ごしたらもっと心配になる。現に不安の種があるのだ。眠れなくなりそうなのが想像できる。

　私は葛藤の末、「聞かせてください」とお願いした。すると川崎さんは、「わかったわ」と言い、元々伸びている背筋を更に伸ばした。

「里奈ちゃんの体の周りを光の輪が包んでいて、頭の上の光が藍色をしているのね。それが少し濁った色をしているの。これって、孤立とか憂鬱とかを感じている人の色なんだけど、何か思い当たる事はない？　人間不信になるような……」

　憂鬱と言われ、あの人の事がすぐに思い浮かんだ。今日子さんだ。今日子さんが悪い人だとは思っていないが、ここ最近、心を悩ます原因となっていることは確かだった。

「彼の周囲で何か起こってないかしら」

「彼がどうかしたんですか？」

　私は彼女のことには触れずに訊いた。

「うん、彼に何かをしようとしている影が見えるの。それが里奈ちゃんの心を孤独にしているような気がする」

　今日子さんが彼に何かをしようとしている。私は、川崎さんの言葉を瞬時にそう変換した。

「何か、気になる事がありそうね」

　私の眉間が寄っているのを川崎さんは見逃さなかった。

　妹のように面倒をみてくれる今日子さんや、大好きな洋平の事を疑いたくはない。でも、会話する二人の息がぴったり合っているところを見ているのは正直辛くて仕方がなかった。

「実は……」

　ネガティブな感情が溢れてきた。もう抑えられない。

「私の具合の悪い時にお世話をしてくれている看護師さんがいるんです。その人、彼の中学の時の同級生だったんですけど、彼女と話をしている時の洋平って、私には見せない顔をするっていうか、すごくリラックスしてるっていうか……。私は洋平に甘えさせてもらっているばかりで、洋平が私に甘えてくれることがないなって思ったら、なんだか自信がなくなってきちゃって……」

　私は心の中の燻りを一気に吐き出した。

「その看護婦さんの方に彼の気持ちがいってしまうんじゃないかって不安になってるのね」

　川崎さんは私の気持ちをすぐに察した。

「彼女はとてもしっかりしていて、細かい事によく気が付く人なんです。お料理は上手だし、病気のお父さんを励まそうと一生懸命だし、私の世話も嫌な顔一つしないでしてくれるし、私にないものをたくさん持ってるんです。彼だって、いい人だって思ってるに決まってる」

「そう……」

　川崎さんは静かに相槌を打つ。

「彼、今、彼女の買い物に付き合っているんです。二人きりで出掛けていろんな話しているうちに、昔を思い出してすごく仲良くなっちゃうんじゃないかってすごく心配なんです」

「里奈ちゃん……」

「私みたいな何にも出来ない女の子より、よく気が付く子の方がいいって思っちゃうかもしれない。川崎さん、どうしよう。彼、私から離れていっちゃったら……」

　声が上ずる。私は自分で不安を煽っていた。

　出掛けていく二人を見送った時、私は精一杯強がっていた。そして今、洋平を引き止めなかった事をひどく後悔している。

　私の約束の方が先だったんだから、一緒に接客してって言えばよかった。

　行かないでって言えばよかった……。

　川崎さんの目は私を哀れんでいた。そんな川崎さんを見ているのも辛くなって、私は頭を抱えながらうなだれた。二人の事を疑い妬む気持ちに心が押し潰されそうだった。

　その時、意識の向こうから小さな声がした。

「愛してる人のことだけでも信じようよ」

　川崎さんが私の肩に手を置いた。細く、でも温かい手だった。

「里奈ちゃんは洋平君のこと、愛してるんだよね？」

　少しの間を置き、低めの声で私に訊く。私は答えることが出来なかった。

　私は洋平を愛しているつもりだった。彼と生活を共にし、喜び、悲しみを共有することで、愛し合っていると思っていた。でも、今の自分には根本的な、もっと大事な部分が抜けている。川崎さんに問われて、そう思った。

「オーラってね、人の状態でいくらでも変わるものなの。でね、未来を楽しいものにするかつま

らないものにするかは自分次第なの」

　川崎さんが話の矛先を変えた。

「未来は変えられるってことですか……？」

　私はゆっくり顔を上げた。

「変えられるというより、未来って自分で作るものなのよ。この一瞬の積み重ねが未来に繋がっているの。いきなり未来に飛ぶわけじゃないのよ」

　川崎さんはゆっくりと言葉を紡ぐ。

「未来を自分で作る……ですか」

　私は耳にしたことを繰り返す。

「そうよ。意識的に辛いことばかり思い悩んでいたら、毎日はどうなる？」

「辛い日々が続いてしまう……」

「じゃあ、小さな幸せを見つけて、嬉しいって気持ちを大切にするように心掛けて過ごしたら？」

「毎日、楽しくいられる」

「でしょ？　楽しいことだけ考えて一年、二年と歳月を過ごすということは、十年後だって楽しくしていられるってことなのよ。十年っていったらかなり未来だと思わない？」

　川崎さんがにっこり笑った。

「そう……だと思います」

　私はまだ、笑う余裕が持てない。

疎外感12

「今という時をどう過ごすかで、未来は決まってくるの。今現在の意識は自分でいくらでもコントロール出来るよね。だから、現在と繋がっている未来もコントロール出来るってことなのよ。里奈ちゃんが彼を強く信じる心を失わないで、彼との毎日を楽しいものにするようにしていれば、この先だってずっと幸せでいられるのよ。信じることが大事よ」

　川崎さんの話は、とても納得のいくものだった。でも、今日子さんと洋平が一緒にいる姿をみていると辛くなるというのは、変えがたい事実なのだ。気持ちを偽るなんて出来ない。無理にでも平気だと思えばいいということなのだろうが……。

「どうにもできないという恐れを捨てようね。存在すると思っている目の前の壁は、過去の苦い経験から作り出された里奈ちゃんの想像の産物だから、現実にはないんだからね。壁があると決め付けて、壁の向こうに行けないものと諦めてるのが今の里奈ちゃんの状態。壁がないっていう信念が持てれば、いくらでも壁の向こうにいけるからね」

　硬い殻に閉じこもっている私に、川崎さんはそう言い残して帰っていった。

　洋平のことを信じてる……。

　頭の中で繰り返す言葉に植えつけたい信念は、触れただけでぽろぽろと崩れ落ちそうなくらい脆いものだった。信じていたいのは確かだ。でも、不安というエゴが私をどんどんネガティブな方向へと引きずり込んでいく。

　私は洋平に一秒でも早く帰って来てほしいと、そればかり考えていた。

　日が暮れて、真っ暗な空に雲を薄く重ねた月が出ても、洋平は帰ってこなかった。

　私は洋平と連絡を取りたい衝動に何度も駆られた。二つ折りの携帯を開いては閉じ、テーブルに置いてはまた発作的に手に持ち……ということを繰り返していた。

　でも、どうしても電話を掛けられなかった。掛けたところで何を言えばいいかわからない。いや、掛けてしまったら、「いつ、帰ってくるの？」と問い詰めてしまうだろう。そばにいてほしいという想いをぶつけてしまうかもしれない。

　彼に何かをしようとしている影……。

それが今日子さんに思えて仕方のない私は、我が侭を声にすることだけは避けたい一心で、打ち消しては現れる邪念を振り払っていた。

何もする気になれなかった。食事はもちろん、ゆったり風呂に入る事も、テレビをつけることも、落ち着かない気持ちを紛らわせる行為そのものをする意欲が湧かなかった。

私は玄関の外に出た。

首を左右に振りながら、道の遠くまで見渡しては彼の姿を探した。でも、こういう時に限って誰一人この道を通る人がおらず、洋平の幻すらも見えそうになかった。私は夜風に凍え、寒さに耐え切れなくなると家に入り、また少しして外の様子が気になって仕方がなくなると、サンダルを突っ掛けるということを繰り返した。洋平を待つことに、病的なくらい執着していた。

壁に掛けてある胡桃の樹で作られた時計の針が、二本ぴたりと合わさった時だった。洋平が帰ってきた。

私は、やっと帰って来てくれたと思った途端、自分でも不思議なくらい思い悩んでいた気持ちがどこかへ消えてなくなった。私は喜び勇んで彼のそばに駆け寄った。

しかし、洋平は少し疲れたような顔で、「ただいま」と一言呟くと、私の前をすーっと通り過ぎて二階へ上がっていった。

疎外感13

「洋平……？」

私は想像もしなかった洋平の態度に戸惑いを感じた。でも、着替えたらすぐに今日の事を話しに下りてきてくれるだろうと、私はソファーに座って細長いクッションを抱きながら待っていた。二階から聞こえてくる彼の足音や服を脱ぐ時の擦り合う布の音に神経を集中させながら、ちらちらと階段を見上げていた。

だが着替え終えた彼は、一階にいる私の様子を気にかけることなく、ベッドサイドの灯りをパチッと消した。毛布にくるまっていた私は、呆然としたまま動けなくなった。

私は寒さで目が覚めた。カーテンの隙間から見た外はまだ暗い。

部屋の電気をつけたまま、ソファーの背もたれに頭を寄りかからせて眠ってしまっていた。冷気が足元を覆う。私はそれから逃れるように猫のように体を丸め、足をソファーの上に載せた。視線だけ動かして壁の時計を見ると、針は五時を指している。まだ起きるまでに時間があったが、体の力が抜けてしまい、二階に上がる気力がない。洋平のそばに行くのが恐い、というのが本音だったかもしれない。

私はそのまま、再び浅い眠りについた。

「里奈、里奈」

ほんの数分後のように思えた。私の名を呼ぶ声に気が付き、重い瞼をゆっくりと開く。目の前に、心配そうに眉をひそめた洋平の顔があった。

「あ……」

電気はいつのまにか消され、外はすっかり明るくなっている。

「あ……じゃなくて、ダメだろ、こんなところで寝ちゃ」

怒っているような口振りだ。

「ごめんなさい……」

　私は反射的に謝っていた。

　私があまりにも情けない声を出したせいか、洋平が表情を緩めた。私とソファーの間に入り込んで、自分の胸に私を引き寄せる。

「体、冷え切っちゃってるじゃないか。ほら、足だって氷みたいだよ。真冬に毛布一枚じゃ俺だって凍えちゃうよ」

　毛布から出ていた私の足を洋平が右手で擦った。彼の手の温かさが足から徐々に私の体を上昇していき、喉と目の奥を刺激した。

「洋平……」

　私は涙声で洋平の名を呟いた。

「どした……？」

　洋平は驚きながらも優しい声で私に尋ねた。

「ん……」

　私は何も言う事が出来なかった。

　泣いている訳をどんなに柔らかく遠まわしに伝えたとしても、私は洋平を責める気持ちを隠し切れないだろう。責めるということは、あなたを疑っていますと宣言しているようなもの。それだけはしたくなかった。それに、洋平と一緒に出かけた相手が男の人だったら、私はこれほどまでに不安にならなかったはずだ。相手が女性だったから……何かあったのではないかと心の深い部分で疑っているのだ。遅く帰ってきたという他には何一つ心配な事などないはずのに、私は思い込みで自分を追い詰め、洋平の気持ちを見失っていた。

「夜、淋しかったか？」

　洋平が私の心の大部分を占めていたことを言った。わかってくれた。そう思ったら、体中に絡まっていた鎖が一瞬緩んだような気がした。私は洋平の腕にぎゅっと掴まりながら首を横に振った。

淋しかったよ……淋しかったけど、もう平気。そんな気持ちを込めていた。

するとと洋平はもう一言、呟いた。

「ごめんな。今日子の相談に乗ってたんだけど、深刻だったからさ」

やっぱり、今日子さんのことで何かあったんだ……。

私は再び心臓が締め付けられた。

困っている人を放っておけない洋平の事を理解したい。でも、理性とは裏腹に、感情はすぐに私と別人格を持とうとする。私は洋平の腕に掴まっていた手の力をそっと抜いた。

雨、降って……1

　今日子さんの相談に乗ったという日から、洋平は仕事とは言うものの、朝まで帰ってこない日が続いた。始発で帰ってきたかと思うと、シャワーを浴びてすぐにまた家を出てしまう。理由を問うと、「今、大変なことになってるから」と言うだけで、詳しい事を教えてはくれなかった。

　他人のプライバシーを当事者以外の人間に話さないということは、カウンセラーとして当たり前なのだが、今回は洋平自身のことまでも守秘義務があるような態度に、私は取り残された気持ちが拭えなかった。

　今日子さんもその日以来、私の家に来なくなった。彼女からの連絡はない。

　診療所に検診のため訪れると、ここにも今日子さんの姿は見当たらなかった。それとなく受付で尋ねると、ここ数日休暇を取っていると教えてくれた。悪い予感が現実に近づくような要因が一つ一つ増えてくる。洋平の朝帰りが始まって四日目のことだった。

　その夜、私は緊急以外、洋平の仕事中は連絡をしないという決まりを破った。メールをしても一向に返信がなかったからだ。

　洋平はどんなに遅れてもメールの返信を必ずくれる人だった。私が妊娠してからは特に、何かあったのかと心配し、カウンセリングの合間に折り返し電話をくれるようになっていた。

　それなのに、朝帰りをするようになってからは、折り返し電話はもとより、メールさえもくれなくなった。連絡よりも帰宅の方が先になり、顔を見合わせるだけのコミュニケーションで終るのだ。

　だから私は、たまらなくなって電話をした。すると、信じられないことに電源が切られていた。カウンセリング中で留守電にしてあることはよくあったが、電源が切られていたのは初めてだった。ショックだった。

　五日目の朝。帰宅後シャワーを浴びてからミネラルウォーターを出して飲んでいる洋平に、私は話を切り出した。

「仕事って、こんなに毎日、朝までやらなくちゃいけないの？」

「え？」

　洋平は面食らったような顔をした。私は洋平の仕事のことで意見したことが過去に一度もなかった。

「寝る時間、いつ取ってるの？　ここんとこ、家では一睡もしてないよ」

「昼休みとか、夕飯食った後とかに少しずつ寝てるよ」

「細切れじゃ、倒れちゃうよ。目の下、くまが出来てる」

「大丈夫だよ、心配しないで」

　洋平の体が心配なのも事実だ。でも、本当に気になっていることは別にある。私は久しぶりに洋平と会話したことで、言わないようにしてきた不安をわかってもらいたい衝動に襲われた。

「籍、いつ入れるの？」

　恐々、洋平に訊いた。声が震える。

「いつ……って、里奈のお母さんに挨拶したらだろ？」

　洋平は、何言いだすんだよと軽くあしらう。

雨、降って……2

「九州、いつ行ってくれるの？　あまりお腹が大きくなってからだと、飛行機乗るのが不安なんだ」

　本当の不安はこんなことではない。

「休み取れるように調整するからちょっと待っててな」

　洋平は濡れた髪をタオルで忙しなく拭きながら、私の頭をぽんぽんと軽く二回叩いた。洋平に危機感はない。私は問い詰め続けた。

「でも、休みどころか、家にいる時間も少なくなっちゃったんだよ。夜中に電話しても電源切れてるし」

「電話、掛けたの？　仕事中はしない約束だろ？」

　洋平の表情から笑顔が消えた。

「具合が悪かったんだもん」

　私は咄嗟に嘘をついた。

「今、夜に受け持ってる相手には集中してカウンセリングしたいんだよ。だから、誰からの電話にも出ないで済むようにしてたんだ」

「私が倒れて助けを求めたくても？」

　私は洋平に突っかかった。

「里奈、嘘はすぐわかるよ」

　洋平は低い声で諭す。

「嘘かどうかなんて、どうしてわかるのよ！」

　私は大声を上げた。唇を噛み締め、自分の想いが伝わらないことに焦れた。でも、洋平はそれ

にかまわず二階に上がり、汗の引き切らない体で服を着た。一分とかからないで下に降りてくると、

「今、籍を入れるとか、考えられない状態なんだ」

　と、冷たく言い放ち、カウンターに積み上げていた書類をカバンに詰め込み始めた。

「お腹の子は、どんどん大きくなっちゃうんだよ」

　洋平の背中に訴える。

「わかってるよ。落ち着いたらいろいろと話しよう」

　洋平は私を見ない。

「いつ？」

「だから、もう少し待ってて」

　洋平は、いい加減にしてくれとでも言いたげだ。

「今日子さん、最近来ないんだけど」

　私は、一番気掛かりでありながら言い出せなかった彼女の名を出した。

「来ないのが当たり前なんだから、自分でしっかりやれよ」

　洋平に動揺の色はなかった。それどころか、私を突き放した。私は張り詰めていた糸がぷつりと切れた。

「しっかりって、私のこと心配じゃないの？　洋平、今日子さんと会ってるんじゃないの？　今日子さんとのことで何かあるんでしょ？」

　私は、今まで遠回しにしか言わなかったことをストレートに言った。理性は働かず、後先のことは全く考えられなくなっていた。

雨、降って……3

「ごめん、時間ないんだ。行ってくる」

　私の最後の言葉を聞いた瞬間、洋平は肯定も否定もしない代わりに鋭い眼光を私に向けた。バッグを持ち、黙って玄関を出て行く。いつもの洋平ではない。まるで、別人だった。

　私は立ちすくんだまま、浅い呼吸を繰り返した。心臓の鼓動は治まるどころか、徐々に速さと強さを増してくる。目を開けているのに、リアルな景色は私の網膜には写らない。洋平の苛立った顔と声だけが、私の脳裏を占めていた。

　洋平に嫌われた、私達は終わるんだ……。

　そう思った途端、全身が震えだした。自分の体の周りに、すべてのものを遮断する薄い層が出来てしまったような感じがする。これまでに経験したことのない孤独感だった。

　私はふらつく足でテレビ台に近づいた。血の気のなくなった手で、引き出しから文字の印刷された薄い紙を取り出す。

　こんなの、もらってくるんじゃなかった……。

　そう思った途端、涙腺が緩んだ。涙が数滴、紙の上に零れ落ちる。紙に書いた自分の文字が徐々に滲んでいく。

　紙をくちゃっと握り締め、私は玄関を出た。キューブの助手席のドアを開ける。ダッシュボードを開き、丸めた紙を奥に押し込んだ。浮かれて先走った自分の行動を忘れるために。

　一日中、私は泣いていた。涙が止まると脱力感に苛まれ、意識を失う狭間を彷徨っていた。

　夢遊病者のようになりながらも、洗濯をしなくちゃ……食料もないはずだから……と、日常の事を普通にこなそうとしていた。

　いつもと同じように過ごしていれば、きっとこれからも洋平と仲良く暮らせる……。

　意識が朦朧とした中では諦めていない自分がいた。

だが、ふと我に返ると絶望感に打ちひしがれた。

現実に引き戻される度、私は嗚咽しながら部屋中をうろうろと歩き回り、喪失感で身動きが取れなくなっては床にうずくまっていた。

取り乱した気持ちを整理できないまま、次の日の朝を迎えた。

瞼が腫れてほとんど開かなくなった目に映ったのは二階の寝室の天井だった。私はどうやってベッドに入ったのか、全く覚えていない。諦めていない自分がまた出てきて、洋平を待つために私をベッドへと誘ったのか。そう、何となく思った。

昨日、水もろくに口にしなかったせいか、体がだるく寝返りが辛い。ベッドから降りる気力を持てないまま、私は再び目を閉じた。

真っ白な時間の中で、真っ暗な闇の中に身を委ね、半分眠りに落ちかけた時だった。

「里奈、おはよう」

枕元で声がした。

「洋平？……」

私の目に、軽く微笑みを浮かべた人物が映った。

雨、降って……4

「ずっと泣いてたの？」

　洋平は小さな子をあやすように言った。その声に弾かれて、涙腺がまた緩んだ。

「仕事、やっと落ち着いたよ。もう、朝帰りしないで済みそうだから」

　昨日とは違う、いつもの穏やかな洋平だった。私は反射的に彼にしがみついた。彼の体温を感じる。その温かさに私は声をあけて泣いた。

「そんなに泣かないで」

　洋平は私の体を両手で包み込んだ。彼の声が私の体を振動させて伝わってくる。静かに、低く、響いてくる。

「なんにも食べてないだろ」

　私の背中をそっと擦る。

「うん……」

　私は洋平から体を離して上目遣いで彼を見た。

「あーあ、目がすごく腫れちゃってる。今、タオル冷やして持ってきてやるから待ってな」

　洋平が腰掛けていたベッドを降りようとした時、私は慌てて洋平の腕を掴んだ。

「洋平……」

「ん？」

「ごめんね」

　自分の中の靄が完全に晴れたわけではなかった。が、洋平の怖い顔だけは二度と見たくない。彼を失うことの方が数倍も辛い。私はその一心で洋平に謝った。

「いいよ。早く、九州行く予定立てないとな」

　洋平は私が言った事を覚えていた。

「うん……」

　嬉しかった。私はまた、ぽろぽろと涙を零した。

「もう泣かないの。ん……」

　洋平は唇を寄せて私にキスをした。触れているだけの、少し長いキスだった。

「一緒に一階に行くか？　歩ける？」

　洋平は立ち上がると、私に右手を伸ばした。私が手を差し出すと、洋平はその手をぎゅっと握り締めた。階段を先に下りながら、「里奈がふらついたら、俺も一緒に落ちるだろな」と、おどけて笑った。

　私を一階のソファーに座らせると、洋平は洗面所へ行った。

　私は心地良い疲労感に浸りながら、洋平の行動を耳で感じていた。洋平がパタパタと歩く音。引き出しを開ける音。水道の水でざぶざぶとタオルを浸している音。幸せな音だった。もう余計なことなど想像しない。そう心に誓った。

　きゅっと蛇口を閉める音がした。洋平が戻ってきて「ほら、これ目に当てて」と言った。クリームイエローのフェイスタオル。少し毛足の長い、ふわふわとした柔らかいタオルだ。

　私はソファーにもたれながら瞼を閉じて、フェイスタオルを目に当てた。熱く火照った瞼のせいで、ひんやりとした布地はすぐにじんわり温まる。私はタオルを折り返し、冷たいところを探した。

「水で絞ったくらいじゃダメか」

　私の様子を横で見ていた洋平が言った。

雨、降って……5

「ほら、貸してみ。氷水で絞ってきてやるよ」

　私からタオルを取り上げると、洋平は台所に行って冷凍庫から製氷皿ごと取り出した。シンクの中の洗面器に氷を入れ、水道の蛇口を勢い良くひねった。水とぶつかり合う氷がガラガラと鳴る。

「冷てー」

　洋平が甲高い声を上げた。

「これなら目の腫れなんて一発で治るぞ」

　洋平はこちらに戻ってくると、凍っているのではないかと思うほど冷たいタオルを私に手渡した。タオルを受け取り、冷たい！　と表情で応えると、「ほら、こっちも」と言い、悪戯好きの子どものような顔をして、冷えて赤くなっている両手で私の頬に触れた。

　やだ、こんなに冷えちゃってる。

　私はタオルを投げ出し、洋平の手に自分の手を重ねた。そのまま頬から手を外し、両手で彼の手を包んだ。温めなきゃと咄嗟に思った。自分の手も冷えきっていることは忘れていた。

「俺は大丈夫だよ。それよりタオル投げ捨てないで、目を冷やしな」

　洋平は私の手から右手だけするっと抜くと、テーブルに放り出されたタオルを拾った。

「いいや、膝にねてみ」

　私の手を離して、洋平は何かを思いついたように自分の膝を指した。

「ん？」

　私がわからずにきょとんとしていると、洋平は「ひざまくら」と付け足した。

　洋平に膝枕をすることはあっても、された事がない。思いもよらなかった事に一瞬戸惑い、動けなくなった。二人で暮らしていて風呂も一緒に入り、自分のすべてをさらけ出してセックスまで

するのに、ちょっと変わった事をしてもらうと照れてしまう。

「顔がにやけてるよ」

　自覚していた事を洋平に言われた。

「にやけてないもん」

　私は顔が熱くなるのを感じながら口を尖らせた。

「いいから、ここに寝てみ。冷やしてやるから」

　洋平は優しく笑っている。

「うん」

　本心は隠せない。自然と口角が上がる。私は言われた通り、洋平の膝に頭を載せた。幸せだなと思いながらふうっと息を抜くと、洋平が淡々と呟いた。

「あの、お嬢さん。その姿勢ではちょっと……」

「え？」

「横向いてたら冷やしづらいんですけど」

　私はテーブルの方に体ごと向けていた。洋平に腫れぼったい顔を直視されるのが恥ずかしくて、本来の目的を忘れていた。

「あ、そっか」

「そっか……って、今ずっと目を冷やす為にいろいろやってたんだけど」

「アハ……そうだよね」

　私は、狭いスペースで四十五度回転をしてから、ぺろっと舌を出した。

雨、降って……6

「耳掃除もしてもらいたいんだろ」

「ん？　そんなことないよ？」

「潜在意識にそういうのがあるんだよ。たまには私もしてもらいたいわぁって」

　そう言われてみれば、耳掃除をしてもらったことがない。

「そんなことないもん。私はしてあげるのが嬉しいんだもん」

　そう言いつつ、洋平の耳掃除も最近していなかった。

「あとでしてあげるね」

　洋平を見上げながら、耳掃除の予約。

「お、やった。頼むよ。まあその前に、はい、目を閉じてー」

　予約に気を良くした洋平は、私の両目にタオルをそっと置いた。

「なんか、氷水で冷やした意味がなくなってない？」

　温かい室温のせいで幾分温んでいた。

「そんなことないよ。気持ちいい」

　洋平の手を冷水に晒したくなかったのと、彼の膝の心地良さから離れたくなくて、私は首を横に振った。

　私はまどろみの中を漂っていた。目をふさがれているはずなのに、私を見て微笑む洋平の顔が見える。穏やかな時間だった。

「だいぶ治まったんじゃない？」

　うとうとしている私の目から、洋平はタオルを取った。

「ちょっと鏡見てくる」

　半分寝ぼけながら洗面所に向かい、鏡の前で何回か瞬きをしてみた。まだ瞼の重さを感じるものの、見た限りではわからない。目の充血も取れていた。

　私は綿棒とベビーオイルを洗面所の棚から出し、洋平のところへ戻った。

「洋平、もうちょっとそっちにいって。膝枕、交代ね」

　洋平は一人分の幅だけソファーの奥にずれた。私の膝を枕にしたはいいが、ただでさえ洋平が横になるには狭いソファーなので、彼は不自然に膝を折り曲げて窮屈そうにしていた。

「ここじゃ狭いよね」

　私は、我慢してね、の意味を込めて言った。

「もう少し、里奈がそっちに寄ってくれると嬉しいかも」

　洋平は遠慮がちに改善策を提案した。

「あ……」

　私は、洋平の反対側にかなりスペースをもって座っていた。慌ててソファーの端まで詰めると、洋平のきつそうな体勢は多少緩和された。

　準備が整った所で耳掃除を開始する。私は「どれどれ」と、久しぶりに洋平の耳の中を覗いた。穴の周辺をそっと指で押さえて広げると、風呂上りに必ず綿棒で拭く習慣のある洋平の耳は、ほとんど汚れていなかった。

雨、降って……7

「きれいだよー」

　私は、洋平の耳の中を綿棒で擦り始めた。

「そう？　……ああ、でもキモチイイ」

　洋平は至福の表情を浮かべている。普段はよく喋る洋平だが、耳掃除の時だけは少々寡黙になる。私も話しかけずに、ひたすら耳の内側の上下左右をまんべんなく擦った。

「今度、反対向いて」

　私がそう言うと洋平は「ん」と頷き、私のお腹の方に顔を向けた。この体の向きは、ソファーに完全に足を載せなくてはならない。更にきつくなったはずだが、洋平は文句一つ言わず、じっとしている。洋平にとって耳掃除ほど気持ちいいものはないらしい。「耳掃除ってホント、癒されるよな」というのが彼の口癖だった。

　洋平に癒しを与えられる耳掃除は、私にとっての癒しでもあった。彼の気持ちよさが伝染してきて幸せな気分になれる。

　私のお腹に洋平の額がぴたりとくっついた。眠ってしまったようだ。私は耳掃除をする手を休め、洋平の髪を撫でた。ウエーブしている彼の髪に指を軽く通す。しばらくすると彼は微かな寝息を立て始めた。

「徹夜で働いてたんだもんね。疲れるよね」

　私は洋平の寝顔に呟いた。その声が聞こえるはずもないのに、洋平はタイミング良く口角を軽く上げた。同時に、昨日から空っぽの私の胃が、唐突にきゅるきゅると鳴った。

「ああ、寝ちゃった……ねぇ今、携帯鳴った？　バイブがぶるぶるしたような気がしたんだけど」

　物音に敏感な洋平が目を覚ました。寝ながらやや上向きに姿勢を変えていた洋平の耳は、私のお腹に触れていた。

「ごめん、起こすつもりなかったんだけど……」

「え？　もしかして腹？」

　洋平は体を起こしながら、驚いたように目を丸くした。

「そう」

　私は、洋平の頭の重みで少々痛くなったお尻を浮かばせて座り直した。

「アハハハ、威勢のいい腹だな。っていうか、そんなに腹空かしてるんなら早く言えばいいのに」

　洋平は大声で笑う。

「だって、洋平、徹夜明けだし。少しでも寝てほしかったし」

　私はちょっと膨れながら、洋平の体を気に掛けていた事を主張した。

「今夜からちゃんと睡眠取れるから大丈夫だよ。ありがとな」

　とりあえず私の好意は伝わったようだ。が、なんとなくしっくりとこない。「うん」と頷きながらも私の尖った口は直らなかった。

「たまには外食するか。イタリアンでも食べにいく？」

　私の尖った口をちらりと見た後、洋平は突っ張っていた私の頬を人差し指できゅっと押さえた。

「ホント？　でも、あんまりたくさんは食べられないかもしれない」

　洋平の提案に、私の機嫌が瞬時に直る。外食は元より、洋平と外出できる事が何よりも嬉しかった。

雨、降って……8

「いいよ。残したら俺が食うから。ピザを窯で焼いてくれる店があるんだよ。そこに行ってみる？　渡りガニのスパゲティとか、サラダもうまいよ」

「うん。連れてって！」

「よし、じゃあ決まりな。今日は電車で行こう。俺、ビール飲みたいし」

「昼間から？」

「俺は仕事明けだからさぁ。昼でも夜みたいなもんだろ？　一杯飲んで一息つきたいんだよ。でも里奈が飲めないか……」

　洋平は私に申し訳なさそうにした。妊娠してから私はアルコールをいっさい口にしていない。

「いいよ、遠慮しないでいっぱい飲んで！　今、支度するから」

　私は声を弾ませる。

「じゃあ、俺もシャワー浴びてくる」

　二人で同時に立ち上がると、私は二階に、洋平は浴室にと分かれて出掛ける準備を始めた。

　私達は、最寄の駅から電車で二駅乗ったところで一度ホームに降りた。そのホームを挟んで反対側を走っている別の線に乗り換えると、洋平は「懐かしいなぁ」と言いながら、学生の頃に見ていた景色を私に一つ一つ説明した。

　私は洋平の思い出を、今の情景に塗り重ねながら窓の外を眺めていた。次々と流れていく風景も、洋平が強調した部分だけは四角く切り取った写真のように静止する。

　急行で三駅通過した後、次に停まった駅で下車した。自動改札を抜け、デパートや大型パチンコ店が立ち並ぶ街の中を、私は洋平と手を繋いで歩く。頬にあたる風は冷たかったが、洋平の手はほかほかと温かい。

「ここだよ」

一階がエレベーターホールになっている雑居ビルの前で洋平が言った。

「昔は平屋の店だったんだけど、今はこのビルの最上階にあるんだ」

そう言うと洋平は、私の手を引いてエレベーターホールの中に入っていった。

ホールの壁には、大きな魚のオブジェが飾られていた。片面だけ立体になっている横向きの魚だ。私の両腕を広げたくらいはあるだろうか。私はキラキラしたうろこに惹き付けられ、足を止めて魚に見入った。

「平屋だった頃は店内にあったんだよ」

洋平がオブジェの説明をする。

「そうなんだぁ」

私は、お洒落だなと思いながら魚に手を触れた。その途端、どこからか、ボボボボという奇妙な音が鳴り出した。

「なに？　私、何か押しちゃった？」

私は後ずさりしながら、洋平の腕にしがみついた。

「盗難防止用の非常ベルか？」

洋平は音に驚きながらも何か楽しげだ。

雨、降って……9

「私、何か悪いことした？」

　恐る恐る洋平に訊く。

「里奈、今素手で触ったろ」

　洋平が尋問を始める。

「これ、高価なものだから、触るだけでも罪なんだよ」

「そんなぁ」

「指紋ついちゃったよ。どうする？」

「またぁ、そういうこと言う！」

「捕まっちゃうよ」

「そんな大事なものなら、こんな触りやすい位置にむき出しにして掛けとく方が悪いじゃない」

　私は向きになった。嘘だと思いながら、もっともらしい言い方をする洋平を疑い切れない。

　必死な私を見て、洋平が吹き出した。一笑いすると、

「騙されなくなったな。昔はちょっとしたことでも信じてたのに」

　と、言った。私が信じかけたことには気付かなかったようだ。

　私は内心、本当に非常ベルだったらどうしようと思っていた。体温を感知して作動するシステムみたいなものがあるかもしれない。そんなことを考えていた。そして、

「そんなこと、小学生だってわかるよ」

　と、うそぶきながら、触っても支障のないことがわかった魚のうろこを撫でた。

「それにしても、何の音だろうな」

　洋平が言った。不穏な音は、洋平が私をからかっている間ずっと、ボボボボと鳴り続けていた。それは、頭の上の方から聞こえてくる。

　私はエレベーターホールの壁の上部を見渡した。

「もしかして……あれ？」

　ホールの入り口近く、吹きさらしになっている場所に、色の褪せた木製の柱時計があった。私が指差した方を洋平が見る。二人で注目すると同時に音はぴたりと止んだ。

「動いてるけど、年季が入ってるなぁ」

　洋平が時計を真下から覗いた。

　私もそばに寄って見上げると、実際は一時前なのに、時計は三時半になっていた。

「針の位置が変じゃない？」

　洋平の言う通り、長針が「３」を、短針が「６」をまっすぐに指している。時を告げる道具としては既に役目を終えていそうだ。だが、振り子は弱々しくも一秒ごとに正確に時を刻んでいる。まだ、この時計は生きている。

「人形も一つ取れちゃってる」

　生きてはいるが、かなりぼろぼろだった。人形が三体あったと思われる位置の一箇所には、軸しか残っていなかった。

「ちゃんと手入れすればいいのにね。さて、音の出所がわかったから、そろそろ行こうか」

　洋平はあっさりとそう言ってから、エレベーターの方へ体を向けた。

「うん」

　私も音の出所がわかってすっきりしたので、時計から視線を外した。

　ところが、私達が時計の下から離れようとした時、ボボボボ、ボボボボと再び時計が鳴り出した。何回かレコード盤の上で針が飛ぶように同じ音を繰り返した後、ボボと二度鳴らしてから、ドレミーレドーソとメロディが始まった。

雨、降って……10

「あ。これ、クラリネットを壊しちゃった、だよな」

　洋平が曲名を呟いた。ボボボボはこの曲の出だしだった。

「ほんとだぁ！」

　曲が始まり、思わず気分が高揚する。次に続いたミミミミ、ミミミファソーファミードに合わせ、私は首を振りながらリズムを取った。が、またぷつりと音が途切れた。

「あれ。また止まっちゃった」

「何か、引っかかってるんだな」

　私達は音の成り行きが気になって、しばらく時計を見上げていた。すると、それを察したかのように時計がまた鳴り出した。やはり出だしは、ボボボボの繰り返しだった。

「今度は続くかな？」

　私が訊く。

　洋平は私の顔を見て、「どうかな？」と答えた。やけに嬉しそうだ。

「洋平、楽しそうだね」

　私は洋平に茶々を入れた……つもりだった。

「うん。里奈の顔見てると楽しいよ。すっごくワクワクしてるだろ」

　また、子ども扱いされた。洋平からみると私の言動はどうしても子どもに見えるらしい。私は時計の事を忘れ、洋平に背を向けて小声でぶつぶつと文句を言った。

　ボボボボ　ボボ　ドレミーレドーソ

「おっ。始まった」

　洋平は後ろ向きの私の背中を叩き、「ほら、見ててみ。今度は続くかもよ」と囁いた。私はへそを曲げたまま振り向き、洋平を軽く睨んだ。

　ミミミミ　ミミミファソーファミード

「次だよ、次。がんばれー」

　通り掛かりの人の目も気にせず、洋平は時計に声援を送っている。

　ソーソソ　ラソファミ　ファーファーファファー

　彼の声に時計が反応したかのように、メロディが先へ進んだ。

「いったいった！」

「うわぁ、いったねー」

　洋平の少し大袈裟な歓声と、思いがけずメロディが続いた事で、曲がっていた私のへそは呆気なく元に戻った。

　ファーファーファ　ソファミレ　ミーミーミミー

「次もお願い！」

　私は両手を顔の前で組み、夢中になって時計に願掛けした。

　ソ……

　しかし、祈りもむなしくメロディはそこで止まった。

「あー」

「だめかぁ」

　再び振り子を揺らすだけになった時計を前にして、二人で深いため息をついた。

雨、降って……11

「もう一回始まったら、もっといきそうだよね」

「そうだよね。待つ？」

　徐々に長くなっていく演奏に、洋平の期待感も高まる。

「洋平、さっきの私と同じ目をしてるよ」

　私はすかさず、さっきの仕返しをした。

「里奈のが移っちゃったんだよ」

　洋平はこういう時、絶対に譲らない。

「また、私だけ子ども扱いするー」

　眉間に皺を寄せた私を見て、洋平は笑いながら、「どうする？　もうちょっとねばる？」と、もう一度訊いた。

「ねばりたい気もするけど、夜になっちゃいそうだよね」

　最後まで演奏されるのを見届けたい気持ちは山々だが、私はそれをあえて抑えた。

「気になるけど食べにいこうか」

「うん、行こう」

　再びレコード針を飛ばし始めた時計を背中で聞きながら、私達は降りてきたエレベーターに乗り込んだ。

　八階で停まったエレベーターを降りると、そこは店のエントランスになっていた。昼時ともあって、店はかなり混雑している。店員さんはオーダーに追われ、エントランスにいる私達に気付かない。

「座ってよっか」

　洋平が順番待ち用の椅子に腰掛けた。私も隣に座る。目に留まった店の壁は、無垢の木を張り合わせ、こげ茶色の塗装を施したものだ。以前、散歩中に見かけた家の壁と同じだった。

「この前ね、これと同じ壁をした家を見たんだ」

　私は壁を指して言った。

「落ち着いてて、いい色だよね」

　洋平は、私が抱いた印象と同じ事を言った。

「二階がこれで、一階は泥壁だったの」

「へぇ、洒落てるね」

「なんか別荘みたいでいいなぁって思っちゃった」

　私は羨ましさではなく、単に建造物として好みだという意味で言った。洋平が「ふーん」と相槌を打って沈黙したので、壁の話は終わったと思った。すると、

「うちも木造だけど白いもんな。塗り替えようか」

　と、洋平が唐突に提案した。

「うちを？」

　私は驚いて洋平の顔を見た。

「うん」

　洋平は平然と答えた。

「業者に頼むお金ないよ？」

　私は咄嗟に予算を心配する。

「ペンキ代だけあればいいんだよ」

　洋平はやはり簡単に言う。

「手間賃取らない業者なんてあるの？」

　私は疑問詞を次々とぶつける。洋平の提案には謎がいっぱいだ。

「俺が塗るんだよ。細かい補修とかは出来ないけど」

　洋平が謎を明かした。もちろん、最初から内緒にしていたわけではないだろうが。

「えー！　出来るの？」

　私はつい素っ頓狂な声を上げてしまった。洋平を器用な人だとは思っていたが、そこまでとは思いもよらなかった。

「出来るさ」

　洋平は自信満々に言った。私の願望が一気に膨れ上がる。

「じゃあ、こげ茶にしようよ！」

　私は喜び勇んで言った。思い立ったが吉日だ。「食事したら、貯金を下ろしてペンキを買いに行こうよ」と、具体的に話を前に進める。ところが、話に乗ってくると思っていた洋平が乗ってこなかった。

「簡単に言うけどさ、今の時期、すごく外が寒いと思わない？」

　洋平がぼそっと言った。

「え？」

　一瞬、空気が止まる。

「天気も不安定だし」

「ああ……そか」

　私は、出来るというのと、今すぐに実行するというのは違うのか、と頭の中で整理する。

「一日じゃ塗れないだろうし、まとまった休みは取れないし、仮に取れたとしたらペンキ塗りじゃなくて旅行とかに行きたいだろ？」

　洋平は別の件を持ち出す事で、浮き足立った私を落ち着かせようとしている。いつもの手だ。

「じゃあ、旅行に行って、それ以上に休みが取れたら塗ろう」

　落ち着くどころか、私は更に欲張りになった。旅行もペンキも捨てられない。

「休みが取れたらね」

　やれやれといった感じで、洋平は苦笑しながら曖昧に返事をした。

「お待ちのお客様、どうぞ」

　ようやく席に案内された。

　一番窓際の席に通された私達は、ウエイトレスから受け取ったメニューを広げて、何を食べようかそれぞれに思案した。

「ピザは外せないと思うんだよなぁ。あと、生ハムとサラミの盛り合わせ食べない？」

「洋平、サラダは必需品だもんね」

「そう、健康のために野菜を摂らなくちゃ。あと、海老とドライトマトのスパゲッティにしようかな。ガーリック風味だし」

「にんにくも好きだよねー」

「男はスタミナつけないとね。あと、生ビールだろ。里奈は何にする？」

　ピザにサラダにスパゲッティ……洋平はこれを全部食べる気なんだろうか。周りの人が頼んだ料理を見る限り、一品一品にボリュームがあるのに……と、私は思った。出された物を残さないというのが、洋平の主義だからだ。

「洋平が頼んだもの、ちょっとずつくれる？　そしたらお腹一杯になるような気がする」

　私は、三品を少しずつ皿に盛り付けたら、りっぱなランチになると思った。

「そうだな。じゃあ、とりあえずこれでいいか。あ、オーダーお願いします」

　洋平は誰かと目を合わせた。私が斜め後ろを振り返ると、今までいなかったはずのウエイトレスが、爽やかな営業スマイルで立っていた。

「マルゲリータピッツァと、海老とドライトマトスパゲッティと、生ハムのサラダと、生ビールひとつ。あ、里奈はウーロン茶でも飲むか？」

「うん」

「じゃあ、あとウーロン茶。以上で」

　洋平はメニューを見ながら、よく通る声でオーダーした。私は、注文を繰り返したウエイトレスに、笑顔を作ってこくりと頷いた。

　たかがオーダーといえど、私は何かを注文する時に緊張する癖があった。ざわざわした環境では通りづらい声をしているからだ。たいていの場合、聞き返されてしまう。それが嫌で意識しすぎてしまうのかもしれない。だから率先して注文してくれる人がいると、それだけで頼りがいを感じる。安心できる。

　五分と経たないうちに、注文したビールとウーロン茶が運ばれてきた。

「お、きたきた。よし、乾杯しよう」

「ん。お疲れさまぁ」

「お疲れー」

　私達はお互いのグラスをカチンと合わせた。洋平はビールに口を付けたかと思うと、ぐびぐびと一気に半分くらい飲んでしまった。

「おいしい？」

　私がそう訊くと洋平は、

「うん。仕事のあとのビールは最高だね」

　と、ビアグラスをテーブルに置きながら満足そうに笑った。私は洋平の手から離れたビアグラスの取っ手を見て、ふと違和感を覚えた。

「これ、穴が開いてないんだ？」

　丸く取っ手の形をしているものの、指を通す部分は氷の膜を張ったように塞がれていた。

「強度が落ちるから開けなかったんじゃないかな」

　洋平はあっさりと答えた。

「熱してフーってやって、ひゅっと伸ばしてクルッてつければ、穴開き取っ手が出来るんじゃないの？」

　私は、以前テレビで見たガラス工芸の様子を頭に思い浮かべながら言った。

「出来るだろうけど……それにこれ、工業製品だし」

「どうしてわかるの？」

「これ、継ぎ目がないじゃん。ガラスの厚さも均等過ぎるし」

「んー、どれどれ」

　私は取っ手を持って眺めた。気にしたわりに、そういうもんかと軽く流し、洋平に「はい」とグラスを返した。洋平はお預けになっていた残りのビールを、待ってましたとばかりに飲み干した。そこへ注文していた料理が運ばれてきたので、洋平はウエイトレスに「もう一杯、お願いします」と頼んだ。

「お料理、おいしそうだね」

「そうだろ？　うまいよ。里奈、いっぱい食べな。栄養摂るんだぞ」

　洋平は、私の取り皿にピザとサラダを山盛りに載せた。

「そーんなに食べられないよぉ」

　私が考えていた量とは雲泥の差だ。

「いいよ。残したら俺が食べるから」

　洋平は私にフォークを手渡したあと、自分でもフォークを手に取り「さぁ、食べるぞー」と、勢いをつけた。むしゃむしゃと料理を頬張る洋平を見ながら、私はしみじみと幸せを噛み締めた。

抵抗1

　暖かい風と日差しが窓から入ってくる季節となった。

　お腹の脹らみもだいぶ目立つようになり、私を悩ませていためまいや立ち眩みはすっかり消えていた。

　洋平は週に一度、必ず休みを取ってくれた。晴れた日は、家から少し足を伸ばした所にある自然公園に私を連れ出し、雨の日はレンタル屋に出向き、ＤＶＤを借りては二人で映画鑑賞をした。休日ごとに二人で楽しい時間を過ごすことが出来るので、私は日々、穏やかでいられた。洋平の子どもがお腹にいる、その存在を子宮で感じる度、幸福感は更に増す。

　普段、一人でいる日は陶芸に打ち込んだ。心配な事が一つもないと、それが作品に表れてくる。買いに来るお客さんに、「優しい雰囲気の作品が増えたわね」と言われる事が多くなった。

　私は、このまま心静かな日々が続くと思っていた。洋平と二人、たまに准一も加わって、面白おかしく笑いながら、新しい命が誕生する日を迎えるのだと思っていた。

　しかし、神様は私に再び試練を与えた。それは、私が気付いていない大切な何かに、正面から向き合えと言っているかのようだった。

　洋平の休日、私はいつもの公園デートを楽しみにしながら身支度をしていた。外は快晴、綿菓子のような白い雲が太陽の光に照らされて、くっきりと輪郭を現しながら空に浮かんでいる。

　洋平が顔を洗って洗面所から戻ってきた。その時、彼の携帯の着信音が鳴った。

「呼び出しじゃないだろうな」

　職場で誰かが急に休みを取った時など、その代わりに出勤を命じられる事がある。私はそうだったら嫌だなと思いつつ、仕事なら仕方がないと諦める準備をした。

「あ、あいつからだ。たまにメールよこしてくるんだよ。休みの日だっていうのに、朝から愚痴か？」

「誰？」

「今日子」

　私の体が瞬時に強張る。ここしばらく、私は今日子さんとプライベートでは顔を合わせていなかった。病院でも私がなんとなく避けてしまうせいで会話をしていない。だが、その間に今日子さんと洋平はアドレスを交換し、メールのやり取りをしていた。それを洋平の言葉から悟った。

「今日、二人でうちに遊びに来ませんか、だって。お昼をごちそうしたいって書いてあるけど……どうする？」

　私は神経を張り詰めたまま、何も答える事が出来なかった。嫌だというのが本心だ。今日子さんと洋平が息投合するのがわかっている。そんなところになど行きたくなかった。

「洋平はどうしたいの……？」

　私は意見を言わぬまま、彼の気持ちを聞いてみた。

「たまには人んちで飯をごちそうになるのもいいかなって思うよ」

　洋平はそう言うと、また、携帯に目を移した。

　今日子さんじゃなければね……。

　私は心の中で呟いた。それを声にしたら、彼女の家にいかなかったとしても、今日という一日が気まずいものになってしまう。

抵抗2

「どうしようか」

　洋平は私に決めさせるつもりだ。

　行きたくない。

　私は心の中で答えた。言葉にしなかった分の沈黙が出来る。窓を開けた。風が部屋の中の空気と溶け込み、時間を動かす。急かすように私の背中を押す。

「せっかくだから、お邪魔しようか」

　私は思い切り強がった。笑顔が引きつる。慌てて両手で口元を覆う。

「じゃあ、行くって返信するよ」

　洋平は、私の返事を聞いてすぐさま携帯に文字を打ち込み、送信した。

「よし。今日は思いっきり今日子をなじって苛めてやろう。あいつ、男に対してすごい生意気なんだよ」

　洋平は声を弾ませた。

　私には感じられない『今日子さんの生意気さ』が洋平にはわかるんだ……。

　私の心はゆがんだ状態でどんどん凍えていった。窓を閉める。微笑むための頬の力がすっと抜けた。

　約束の時間まであと一時間。身支度を終えた私は台所に立ち、食材を調理台に並べていた。

「何してるの？」

　新聞を読んでいた洋平が、野菜を切り始めた音に気付いてそばに来た。

「今日子さんに作ってもらってばかりじゃ悪いから、私も一品作っていこうと思って」

　私のささやかな抵抗だった。

「豚肉なんか出して、俺にも手伝えって？」

　火を通すものを出していた私に洋平が訊いた。洋平は腕まくりをして既に手伝う気でいる。いつもの私なら、「洋平の仕事、とっといたよ」と言って任せるからだ。

「ううん、手伝わなくていいよ。今日は一人でやるから」

　私はなるべく平静を装って言った。

「え？　里奈、火、使えないだろ？」

　洋平は驚いた顔をした。

「大丈夫だよ。もう平気だから」

　火傷して以来、一度もガスに火を点けたことはない。

「無理すんなよ。今日子がたくさん作ってくれてるだろうから」

　洋平に悪意はない。それはわかっている。でも、彼が今日子さんの名を口にする度、空白の六日間が蘇る。何があったか明らかにされない為に、燻り続けている不安。知る事への恐怖。それらが胸を締め付ける。

「残ったら、あとで食べてもらえばいいし。今まで作ってもらってばかりだったから、今日子さんに私の料理も食べてもらいたいの」

　私は心にもないことを言った。

「それなら、我が家から一品って感じで持っていけばいいじゃん。手伝うよ」

　そう言って洋平がキャベツを手に取った。

「ううん、一人で作りたいの」

私は小さく首を横に振った。

抵抗3

　本来、私は洋平と並んで台所に立つのが好きだった。私はサラダくらいしか作れないが、彼の隣りでお喋りしながら作業するのが好きだった。でも、今は一人で料理する事を主張した。今日子さんの料理ではなく、私の料理で彼を喜ばせる為には、一人で作らなければ意味がない。

「大丈夫ならいいけど……」

　洋平は声のトーンを下げて言い、リビングに戻って行った。

　一人になった台所で、私は材料の下ごしらえを済ませた。今度はこれらをフライパンで調理する。それを考えたからだろうか、火傷を負った腕が微かにうずいた。気のせいだと自分に言い聞かせ、フライパンに油を注ぐ。しかし、私の手は、脳で記憶を蘇らせるよりも早く、完全に当時のことを思い出していた。

　おかあさんをおどろかそう。

　やさいをきるのは、とくいちゅうのとくい。

　キャベツ、にんじん、たまねぎ……。

　あと、ポテトチップもつくろう。

　フライパンにあぶらをたっぷりといれてっと。

　てんか！　ちょうどいいおんどになったら、ぴーっておとがなるんだ。

　それまでテレビみてよう。

　…………。

　え？　フライパンからひがでてる！

　どうしよう！　けさなきゃ！

　でも、どうしたらいいの？

えっと、えっと、おかあさんはいつもモトセンひねってた！

おりょうりがすんだら、モトセンひねってたんだ。

モトセンはオクのほうだったはず。

もとせんはガスだいのオクのほう…………

ガスのスイッチに触れた途端に指先が震え出し、手から全身へと伝わっていく。

点火。すぐに火力調節のつまみを一番最小にする。

食材をフライパンに入れる。ガス台から体を離し、恐る恐る菜箸で混ぜる。

材料に油が馴染んだ程度で調味料を入れ、すぐに火を止めた。

私は静かにパニックを起こしていた。食材がどういう状態にあるのか、全く把握する事が出来ない。胸を押さえ、荒い呼吸を繰り返す。立っているのがやっとだった。

しばらくすると、徐々に息を吸う間隔が長くなり、震えが治まってきた。モノトーンだった周りの景色に色がつき始めた。

「出来たか？」

洋平が様子を見に来た。

抵抗4

「う、うん。大皿に盛ればいいよね」

　私はおぼつかない足どりで、食器棚に大皿を取りに行った。

「お！　豚肉と野菜の味噌炒めか。頑張ったな」

　フライパンを覗き込んだ洋平が料理を褒めてくれた。私は少し、笑うことが出来た。

「さて、そろそろ行こうか。里奈は支度出来てる？」

「公園に行くつもりだったから……あ、化粧少し直していい？　ちょっと汗掻いちゃった」

　私は味噌炒めを皿に盛りながら、全身に嫌な汗を掻いていた。

「いいよ。じゃあこの味噌炒め、ラップして袋に入れとくね。あれでいいか」

　洋平は以前、親戚の結婚式に出席した際にもらってきた引き出物の紙袋を出してきた。幅が広いので、大皿をまっすぐに入れても少し形が崩れただけですっぽりとはまった。

「お、ばっちり」

　洋平はいつもと変わらず優しかった。

　家を出て、診療所の前を通り過ぎ、五分分ほど歩いたところにあるはずの今日子さんのアパートを探していた。しかし、『パイン・ヒル』という建物が一向に見つからない。

「住所はこの辺であってるはずなんだけどな」

　洋平は、彼女の住所をメモした紙と、電柱に表示された番地を照らし合わせながら首を傾げた。

「今日子さんに電話して聞いてみる？」

　私は、携帯があるのだから聞いてしまった方が早いと思った。でも、今日子さんの家など見つ

からなくてもいいという気持ちとは裏腹の提案だった。

「いや、あとでバカにされるから自力で探す」

　洋平は、そんな私に意地を張ってみせた。

　同じ路地をぐるぐると三周した時だった。ふと見上げた古いアパートの二階へ上がる階段の鉄柵に、小さく『パイン・ヒル』と書かれた文字が見えた。

「あ……」

　私は反射的に声を出し、立ち止まった。

「どした？」

　洋平は、私がすぐに逸らしたはずの視線の先を目で追った。

「あれ、パイン・ヒルって書いてあるよな？」

　洋平の反応の速さに、どうして私が先に見つけちゃったんだろうと、ため息が出そうになった。
「うん、書いてある」

　嘘だけはつけない。

「今日子って、古風な家に住んでるのな」

　洋平が意外そうに言った。私達の前に建っている木造二階建てアパートは、外壁は薄い水色のペンキで綺麗に塗り直されているものの、ベランダの細い鉄柵が今にも朽ちて落ちそうだった。

「今日子さんのイメージとは、ちょっと違うね」

　私もなんとなく拍子抜けした。パイン・ヒルという洒落たネーミングから、鉄筋コンクリートの三階建てくらいのマンションを想像していたのだ。

抵抗5

「今日子に文句言ってやろ」

　洋平は悪戯な顔をしながら、今日子さんの部屋がある二階へ上っていった。

　私は洋平の後ろから、一段ずつゆっくりと階段を上った。歩く速さの違いから、私達の間に距離が出来た。

　洋平が、階段を上ってすぐ真正面にある部屋のインターフォンを押す。押している間だけジリジリジリジリと昔ながらのブザーの音がした。部屋の奥で鳴っているのに、扉から離れた私のところまで聞こえる。このブザーからして『パイン・ヒル』のイメージから程遠い。

　私もやっと玄関の前に辿り着いた。パタパタというスリッパの音がだんだんこちらに近づいてくる。そのスリッパの音が止まったと同時に扉が開いた。

「いらっしゃい」

　今日子さんは、にこやかに私達を出迎えた。

　洋平は今日子さんの顔を見た途端、アパートが見つからなかったことについて、ふざけた口調で責め始めた。今日子さんは、洋平の言葉を楽しそうに交わしている。

　私は洋平の後ろで一歩下がりながら息を潜めていた。久しぶりに間近に聞く二人の会話。断片的に蘇る嫌な記憶。出来る事なら、気付かれないままこの場を去ってしまいたかった。

「里奈ちゃんもうちに来たの、初めてよね？　狭いけど、ゆっくりしてって」

　今日子さんが俯いていた私に声を掛けた。私はよそ行きの笑顔を作ってから顔を上げた。

「あの……作ってもらってばかりで悪いと思って、私も一品作ってきたんです」

　私は味噌炒めの入った袋を差し出した。嘘をつけない手が小さく震える。

「あら、嬉しい。いただくわね」

　今日子さんは私から袋を受け取ると、片手で扉を押さえながら「ささ、入って」と私を招いた

。

「なに？　この部屋すげー」

　先に部屋に上がっていた洋平が大きな声で言った。その声につられて部屋の中を覗き込むと、アパートの外観からは想像もつかないお洒落な洋風の佇まいがそこにあった。

　琥珀色したフローリングのワンルームで、玄関から見て左手にシンクとコンロだけのシンプルなカウンターキッチンがある。

「高そうなテーブル使ってんな。一人暮らしなのに」

　洋平がダイニングテーブルを指して言った。

「節約するところは節約して、こだわりたいところにお金掛けてるだけよ」

　今日子さんがこだわったというテーブルは、天板の形が直線と緩やかなカーブの組み合わせで、それ自体が装飾品のようだった。

　洋平が部屋の奥へと視線を移す。

「あっち側は見ないでね。恥ずかしいから」

　今日子さんが洋平の前に廻り込んだ。ワンルームを二つに区切るように白いローボードが置かれているのだが、恥ずかしがっているあちら側はどうやら寝室らしかった。生成りのカバーが掛けられたベッドの端がちらりと覗いている。でも、ローボードの上のテレビと観葉植物が目隠しになっているので、それ以上はほどんど見えない。

抵抗6

「おまえのベッドルームなんか見たって興奮しないから心配するな」

　洋平はそう吐き捨てると、今度は壁に注目した。玄関から向かって右側の壁全体に収納らしき黒い扉が並んでいて、それ以外の壁と天井は真っ白だった。

「いきなりだけど、トイレ貸してもらっていい？」

　洋平に言われて今日子さんが開けた扉も白だ。私の立っている位置から中が見えたのだが、ユニットバスではなく純粋にトイレだけしかなかった。

「お風呂はないんですか？」

　部屋に圧倒され、マイナスな感情から離れていた私は、いつもの無遠慮な好奇心を表に出した。声に出してからハッとして、「あ、ごめんなさい。失礼な事聞いちゃいました」と恐縮すると、

「失礼じゃないよ。よく聞いてくれましたって感じ。お風呂というか、シャワールームがここにあるの」

　と言い、今日子さんは一番手前の黒い収納扉を開いた。

「大屋さんがここを改装する時に、中途半端にユニットバスでスペースとるより、思い切ってシャワーだけにして部屋を広くしたかったんですって」

　今日子さんはそう説明した。

「ユニットバスにお湯溜める事って少ないですもんね」

　友達のアパートに泊まりに行った時がそうだった。

「そうでしょ？　だから気に入ってここを借りたの」

　今日子さんが満足そうに言うと、いつの間にかトイレから出てきた洋平が、背後で「なるほどねー」と相槌を打った。

　一通り、部屋の見学会が終了した。

「飲み物、何がいい？　里奈ちゃんはお腹に赤ちゃんいるからコーヒーじゃない方がいいかな？」

　今日子さんが私に訊いた。

「えっと、何でも大丈夫です。あまり気にしてないんです」

　私は牛乳を多めに入れたコーヒーを一日に何杯も飲んでいた。本当はコーヒーがいいと答えたかったのだが、今日子さんの言葉で曖昧にしか言えなくなってしまった。

「そっか、じゃあ何にしようかな。とりあえず座ってね」

　今日子さんは飲み物で迷いながら、私にダイニングの椅子に腰掛けるよう促した。スチールパイプで作られたその椅子は足が長く、背の低い上に妊婦の私には座るのが難儀だった。今日子さんは、「俺には聞いてくれないの？」と茶々を入れた洋平を無視して、よたよたしている私の体に両手を添える。看護師とあって、その動作はとても自然だ。私が落ち着いたのを見計らって今日子さんは洋平の方を向き、

「はいはい、洋ちゃんは何がいいですか？　家でいつも何飲んでる？」

　と訊いた。

「困ったから俺に振っただろ。えっと、コーヒー」

　洋平はストレートに自分の好みを答えた。今日子さんは怒った口調で、「だから、コーヒーは体に良くないから他に何がいいか聞いたのに」と返した。

「コーヒーでも……」

　いいですよ。いつも飲んでますから。

　私は洋平を擁護するつもりでそう言い掛けた。が、お腹に力の入らない私の声は彼女の耳には届かない。

抵抗7

「わかった。とっておきの出すね」

　今日子さんはそう言って、食器棚の引き出しから紅茶のパックらしき物を出してきた。あらかじめセットしてあったカップにティーバッグを入れ、小さなポットのお湯を注ぐ。すると、甘いりんごのような香りが漂ってきた。

「カモミールティ……ですか？」

　私が訊くと、今日子さんは頷いた。

「里奈ちゃん、当たり。これに温めたミルクを入れて飲むと美味しいのよ。やったことある？」

「いえ。そのままでしか飲んだ事ないです」

「そう。試しにミルク入れて飲んでみて」

　今日子さんは別の容器に入れたミルクをレンジで温め、私のカップの横に置いた。

「甘くしたければ、ハチミツもあるからね」

　私は言われるままにミルクとハチミツを入れて一口飲んだ。程よい熱さの液体が体の芯を流れていく。

「ホントは夜、寝る前に飲むのがいいのよね、リラックス効果があるから」

　今日子さんは、仕事の前はほんわかしちゃってダメね、と付け足す。私はカップに口をつけたまま、上目遣いで今日子さんを見る。

「里奈は緊張しやすいから今飲んで正解かもな」

　洋平はミルクもハチミツも入れないカモミールティを飲んでいる。

「今日は休みの日だから気分を楽にするのに丁度いいでしょ。アルコール代わりよ。たくさんあるから一箱里奈ちゃんにあげるね」

今日子さんはそう言って、カモミールティの箱を私の前に置いた。

「いいんですか？」

とりあえず遠慮してみる。

「うん、持っていって」

「ありがとうございます」

私は、リラックスというより、ぼうっとなった頭でお礼を言った。

「さて、ご飯にしようか。作っておこうか迷ったんだけど、作りたての方がおいしいからね。すぐ出来るから待ってて」

カウンターキッチンの前に立つと、今日子さんはすぐに調理に取り掛かった。深い鍋に水を入れて火にかけ、なす、トマト、ピーマン、きゅうり、ウインナーを一センチ角に切り揃えた。

「何を作るの？　ポトフ？」

洋平が今日子さんの手元を覗いた。

「内緒」

今日子さんはお決まりのセリフを吐いた。それから、スライスしたにんにくを熱したフライパンに入れ、同時に沸騰した鍋のお湯の中に素麺をパラパラと入れる。その少しの時間で香りが出てきたフライパンにトマト以外の材料をすべて炒め、酒を振った。

抵抗8

「素麺？」

　洋平が再び尋ねた。

「へへぇ」

　今日子さんは再びとぼけた。

　会話を弾ませながら、彼が彼女の料理する姿を楽しそうに眺めている。私が理想とするキッチンでの光景だった。洋平が見つめている相手が、私ではなく今日子さんであったということを除いて。

　鍋のお湯がふきこぼれそうになる寸前で、今日子さんは火を止め、菜箸で素麺をゆらゆらとかきまぜた。

「余熱で十分、茹で上がるのよね」

「さすが、料理人」

　洋平と今日子さんの息はぴたりと合っている。私の入る隙はない。

　今日子さんは素麺をざるに空けた後、フライパンの中にカレー粉と塩、こしょう、しょうゆを入れた。それを混ぜ合わせてから火を止め、トマトを足す。

「素麺とカレー作ってんの？　両方とも主食じゃんか」

「まあ、見ててよ」

　意識的なのか無意識なのか、今日子さんは洋平の興味を逸らさない。彼の視線を独り占めしながら、今日子さんは別の鍋にバターを溶かして牛乳を混ぜた溶き卵を流し込み、半熟の炒り卵を作った。

「ほら出来たよ。早いでしょ？」

　そう言いながら、洗った素麺を三枚の皿に盛り、麺つゆをかけた後、炒めた野菜と炒り卵を載

せた。

「カレー素麺の出来上がりー」

　今日子さんはようやく料理名を明かし、ダイニングテーブルにそれを運んだ。

「これ、まかない料理みたいだな」

　洋平は目の前に置かれた料理をしみじみと眺めた。

「あ、よくわかったじゃない。無国籍料理の店のシェフに教わったんだ」

　今日子さんはパッと表情を明るくした。

　あっさりした素麺しか食べた事のない私は、正直、あまり食欲をそそられなかった。

「里奈ちゃんのお料理も温めた方がいいわよね」

　調理道具を料理終了と同時に片付けてしまった今日子さんは、私の味噌炒めをレンジに入れようとした。が、皿が大き過ぎて入らない。

「フライパンで温めようか」

　今日子さんは洗ったばかりのフライパンをガス台の上に置き、空焚きして水分を飛ばし始めた。今日子さんの口と手は、キッチンに立った時からずっと一緒に動いている。

「いえ、今作ってきたばかりですから」

　私は立ち上がって今日子さんの傍に駆け寄り、彼女の手を制して頑なに拒否した。温かい方が料理は美味しいに決まっている。でも、私の料理にだけは手をつけてほしくなかった。

抵抗9

「冷めても美味しいもんね」

　今日子さんは、過去に一度も食べたことのない私の料理を褒めた。

「早く食べようよ。匂い嗅いでたら急に腹減ってきた」

　洋平が、立っていた私達に言った。

「そうね。もう、お昼過ぎてるし。いただきましょう」

　今日子さんは私の目を見てニコリと笑った。私は気付かれない程度のため息と共に頷いた。
　私と今日子さんが座るのを見計らって、洋平が「いただきます！」と箸を手にした。

「うまいじゃん、これ」

　カレー素麺を一口食べた洋平が間髪入れずに言った。

「そう？　里奈ちゃんの口にも合うといいんだけど」

　まだ、箸も持たずにいた私に今日子さんは言った。

「いただきます」

　喉に姿のない大きな塊がつかえていた為、私はつるっと飲み込めそうな素麺だけを箸で摘まんで口に入れた。

「どう？」

　すかさず今日子さんが訊いた。

「おいしいです」

　見た目の濃さに比べると、味は意外とあっさりしていた。私は一口二口と食べ進めながら、過去に一度も作ったことのない味噌炒めを持ってきた事を後悔した。今日子さんの料理と一緒に並べたらどうなるか、冷静に考えればわかることだった。

「よかった。お腹の赤ちゃんにも栄養満点だから、たくさん食べてね」

　そう言った今日子さんの前で、洋平はもの凄い勢いでカレー素麺を頬張っている。今日子さんは「洋ちゃんに言ったんじゃないんだけど」と笑った。

「里奈ちゃんの味噌炒め、いただくね」

　私の方に向き直った今日子さんが言った。それから洋平に、里奈ちゃんの味噌炒めも食べようよと、暗にメッセージを送るように囁いた。気を遣っているのがよくわかった。

　今日子さんの言葉を耳にして、洋平もカレー素麺を食べる手を休めた。

　生きた心地がしなかった。火をほとんど通さず、味見さえしてこなかった味噌炒めが美味しいわけがない。二人が味噌炒めに箸をつけようとした瞬間、私は自分の箸を手放し、大皿を持って立ち上がった。

「ごめんなさい！　食べないで」

　私は肩で息をしながら衝動的に叫んでいた。

　洋平と今日子さんが困惑している。

　私は立ち竦んだまま、どうしたらいいかわからなくなった。二人から視線を逸らすと、キッチンの床に置かれていた袋が目に入った。大皿を入れてきた紙袋だ。私は床にしゃがみ込み、皿を隠すようにして仕舞いこんだ。

「里奈、どした？」

　洋平が唖然としながら私に訊いた。それに続いて今日子さんも、「やだ……里奈ちゃんの料理、すごく食べたかったのに」と眉をひそめた。本心でも嘘でも、今日子さんにそう言われれば言われるほど私は惨めな思いがした。

「用事を思い出したんで……また、来ます。カレー素麺、とっといてください。ごめんなさい！」

　私は皿を入れた袋を抱え、今日子さんの家を飛び出した。戻ってくる気など、微塵もなかった

◦

抵抗10

　私は路地に面したアパートのサッシを叩いた。反応がない。私は二度、三度、力を込めて叩く。いないはずがない。私が必要とする時、この人は必ずいてくれる。

「里奈ちゃん？　どうしたの？　珍しい」

　准也が眠そうな目を擦りながらサッシを開けた。

　私は准也の部屋に来ると、玄関のドアではなく反対側のサッシを叩く。塀も垣根もないアパートなので奥まった玄関に廻るより早い。逃げるようにあの部屋を出て、行き着いた場所は准也のところだった。

「やっぱりいた……」

　私は准也の顔を見た途端、堪えていたものを抑え切れなくなった。

「やっぱりって暇人みたいに言うなよ。とにかく上がりな」

　准也はカーテンを大きく開け、私を部屋へ招き入れた。そして、いち早く味噌の匂いを嗅ぎ付けた。

「何持ってるの？　ちょっと貸して」

　准也は泣いている理由は訊かず、片手を伸ばした。私が躊躇うと、准也は無理やり袋を取り上げた。

「これ、どうしたの？　ラップもしないで運んだらぐちゃぐちゃになっちゃうじゃん」

　准也は味噌炒めを盛った皿を袋からそっと出した。

「里奈ちゃんが作ったの？」

　私が頷くと、准也は豚肉を指で一摘みして口に運び、「ちょっと、生だね」とあっさり言った。

「生？」

　私も小さめの豚肉を選んで口に入れた。

「な？」

「……ほんとだ」

　私は半べそを掻いたまま、生の肉の味を噛み締めた。

「里奈ちゃん、無理したろ」

　准也は肉を飲み込んだ後、生のにんじんをパリパリいわせながら「火、使えないくせに」と言った。

「だって……」

　私は口篭る。

「だって、なんだよ」

　准也が優しく煽る。

「今日子さんに負けたくなかったんだもん」

　やっと本音が言えた。洋平には言えなかった本音だ。

抵抗11

「今日子さん？」

「私がいつも通っている病院の看護師さん。今日、お昼に呼ばれたの。ご飯、二人で食べに来てって」

「それでこれ、作ってってたんだ……って、それでどうしてこれがここにあって、里奈ちゃんがここにいるの？　今何時？　まだ一時前じゃん。昼に呼ばれた割に帰るのが早過ぎない？」

　生の玉ねぎに手をつけた准也は、「水にさらしてない生玉ねぎは喉にくるな」と言って、ペットボトルの緑茶をごくりと飲んだ。

「洋平、今日子さんの料理を食べた後に、これを食べようとしたんだよ。今日子さんと同時に。二人にまずそうな顔されたら立ち直れないと思って……」

　私は声を上ずらせながら准也に告げた。

「それで逃げてきたのか。子どもみたいだな、里奈ちゃん」

　准也は私の頬の涙を指で拭うと、「俺の食べた後の顔は見ても良かったの？」と訊いた。

「だって、食べると思わなかったんだもん」

　私は口を尖らせる。准也はキャベツをバリバリいわせている。

「アハハ、食うよ。腹減ってるところに食い物見せられたら」

　声を上げて笑った准也は、「これはどうかな？」と言ってピーマンを摘まんだ。

「生なのに、よく食べれるね」

　生ピーマンを口に運ぶ准也に、私は自分の事を棚に上げて呆れた。

「サラダだと思えば生でも食えるよ。豚肉だって、今は無菌豚がいるから多少火が通ってなくたって平気なんだよ」

　准也が再び肉を口にする。

「そうなの？　牛だけじゃないの？　生焼けでもいいのって」

　私は驚いて訊いた。

「まあ、Ｅ型肝炎になりたくなきゃ、ちゃんと火を通しておいた方がいいだろうけど」

　准也は更に生焼け肉を頬張る。

「やっぱ、ダメなんじゃない。それにサラダって何よ。人が一生懸命作った味噌炒めなのに」

　私は平静に戻る。

「うまいよ。味噌サラダ」

　准也は追い討ちをかける。

「もう！」

　准也は私の味噌炒めにケチをつけながら、あっという間に全部平らげてしまった。「一食分、浮いたー」と、仰け反って腹を擦っている。

「あーあ……お腹壊しても知らないからね」

　私は、今更言ってもあとの祭だけど、と付け足す。

「里奈ちゃんが看病してくれるだろ？」

　准也はにこやかに問う。

「嫌だよ。下痢してゲロゲロ吐いてる人の看病するのなんて」

　私は毒舌を振るう。

「げ、ひでーの」

准也はそう言って、「なんか、もう腹にきたかも」と痛がって見せた。

准也は私の心を解きほぐす魔法を持っている。准也と話しているうちに私の涙はいつの間にか止まっていた。

抵抗12

　准也は皿をシンクに運び、水道を勢い良くひねった。

「里奈ちゃんといると、俺、いっつも働いてない？」

　そう言いながら、准也は洗剤をつけたスポンジで皿をごしごし擦っている。

「働けなんて言ってないじゃん」

　私は准也の背中に向かって叫んだ。准也がアハハと笑う。私も笑った。准也には自然と甘えられる。

　准也は布巾で皿の水滴を拭うと、私が持って来た紙袋ではなくスーパーのレジ袋に入れた。そして、「油のついた袋はいらないよね？」と言い、紙袋を丸めてゴミ箱に捨てた。私の苦い思いの染み込んだ紙袋は、准也の家のゴミと一緒に明日、収集される。

　准也がマグカップを二つ持って戻ってきた。

「お子ちゃまにはミルクコーヒー。俺はブラック」

　そう言って、准也は牛乳たっぷりのコーヒーを私に差し出した。

「お子ちゃまじゃないし」

　私は反論しつつ、カモミールじゃなくてこれが飲みたかった、と嬉しくなった。

「里奈ちゃん」

　熱いコーヒーを一口啜った後、准也が改めて私の名を呼んだ。

　私が、ん？　と目線を送ると、

「どうして今日子さんにこだわるの？　彼女と兄貴に何かあったの？」

　と訊いた。せっかく晴れかけた心も、今日子さんの存在をちらつかされるだけで一瞬にして黒い雲に覆われる。

「何もないと……思う」

　そう呟いた後、私は洋平の朝帰りが続いた日々を思い出した。

「ホントに？　里奈ちゃん、ヤキモチ焼きだけど、よっぽどのことがなかったらこんな怖い思いをしてまで何かしようとは思わないだろ？」

　准也は私の性格をよく知っている。隠せないと思った。

「実はね……」

　私は、あの六日間のことを准也に話した。今はいつもの優しい洋平に戻ってはいるものの、あの日々に何があったのかはベールに包まれたまま、触れられずにいることも。

「そっか。でも兄貴のことだからホントに仕事だったんだと思うよ。集中すると周りの事が見えなくなるし。里奈ちゃんの事を考える余裕がなかったんだろうな」

　准也はそう言って、少し温んだコーヒーを一気に飲んだ。

「でも、今日子さんもその日からぱったり来なくなったんだよ。仕事も休んでた」

　心配の種の一つだ。

「うーん。たまたま重なっただけじゃない？　それに、朝帰りとはいえ毎日帰って来てたんだろ？　兄貴」

「そうなんだけどね」

　シャワーを浴びて着替えをするとすぐにまた出掛けてしまうことを、帰って来たと言えるのだろうか。私が腑に落ちないでいると、

「里奈ちゃんはもしかして、兄貴が今日子さんの家に通ってたと思ってるの？」

　と、准也が言った。私が洋平に問い詰めて、肯定も否定もされなかった話だ。

抵抗13

　今も真相は明らかにされていない。あの時以来その話題を出さないでいるのは、真実を確かめたところで肯定などされてしまったら、すっきりするどころか嫌な妄想が膨れ上がり、表面的には納得した顔をしながら心の中でずっと洋平を責め続けてしまう事がわかるからだ。

「今日子さん、洋平の中学の同級生なんだ。昔も仲が良かったみたいで、洋平、今まで私が聞いた事ないような乱暴な話し方してたの。心を開いた相手にしか見せない態度だった」

　洋平の彼女に対する言葉遣いは、これまでに私が見てきた他の女の人に対するそれと全く違っていた。

「兄貴が中学の時、友達は男も女も関係なく遊びに来てたからな。異性として見てなかったんじゃないの？」

　洋平も同じ事を言っていたことがある。

「今日子さん、すごく綺麗な人だよ」

　綺麗になった同級生を見ても、洋平は異性と見ないのだろうか。

「昔とは違う印象の相手に恋が芽生えちゃったとか？」

　意地悪く准也が言う。

「その可能性、やっぱりあるかな……」

　私は准也の言葉をまともに受け取る、すると、准也は語気を強くして「里奈ちゃんが疑っちゃダメじゃん」と否定した。私の気持ちを試すためにわざと恋などと言ったのだ。

「そうだけど……」

　私は弱気で言う。

「だけど、なんだよ」

　准也は口調を荒げたままだ。

「今日子さんといるときの洋平、すごく楽しそうなんだよ。そのままの自分を出してリラックスしてるの。私といる時は、いつも気を遣ってる感じがする」

「そうかぁ？」

　准也は思い切り否定する。

「今日子さんの方が断然大人だし、料理は上手だし、世話好きだし、昔からよくお互いにわかってるみたいだし」

　私は自分に欠けている部分を羅列した。

「年上だからそう思えるんじゃない？」

「でもね、洋平、今日子さんのことばかり褒めるんだよ。私、それ聞くたびに自己嫌悪に陥るんだ」

　私は准也に訴え続ける。

「褒めてるように聞こえるのは里奈ちゃんだけかもよ。自分の気の持ちようで、受け取る言葉の意味って変わるだろ？　兄貴は単に今日子さんの事を、こういう奴なんだよって説明してるだけかもしれないし」

　気の持ちよう……。それならあの事も私の気のせいなのだろうか……。

　私は心の中で自問自答し、静寂を作った。

抵抗14

　准也は、ふぅと一回ため息をついた。マグカップを持ち、腰を上げると、「里奈ちゃんのコーヒーも入れ直す？」と私に尋ねた。

　私が首を横に振ると准也は台所に行き、空になった自分のカップにコーヒーを入れ、再び私の前に座った。

　私は准也の目を見た。物事の真髄まで見通してしまいそうな瞳をしている。私のいいところも悪いところも、すべて受け止めてくれる准也。まだ家族になったわけでもないし、友達とは少し違い、まして彼氏でもないのに空気よりも自然に私の近くにいる存在。

「どした？」

　じっと准也の目に見入っていた私に彼が尋ねた。ＯＦＦになっていた私の意識がカチッと小さく切り替わる。すると准也は「俺がカッコ良過ぎるから見とれちゃった？」とふざけた。いつもなら「バカじゃないの？」と返すような言葉が心を緩ますカンフル剤となった。

「准ちゃん、あのね」

　私は勢いで口を開いた。

「ん？」

　准也は穏やかな表情で私の言葉を待っている。

「これも、私の気の持ちようなのかな」

　鼓動が激しく打ち始める。

「何が？」

「洋平がね、まだ籍を入れてくれないんだ」

　私はやっとのことで言葉を紡ぐ。

「え？　結婚式したのに籍はまだなの？」

　准也は驚いた顔をした。

「お母さんに挨拶してからだって言うの」

「ああ、兄貴としては順序を守りたいってわけね」

　准也は、それなら仕方ないでしょ？　と言いたげな表情をした。私は、そうじゃないの、と慌てた。

「朝帰りが続いた時、なんだか切羽詰ってきて、いつ籍を入れるの？　って聞いちゃったの。そしたらすごく機嫌悪くなっちゃって……。順序だけが理由じゃない気がするんだ」

　私は不安になった経緯を話した。

「どういうこと？」

　准也が眉をひそめた。

「わかんないけど……洋平、私の事なんてあまり大切じゃなくなってきちゃったんじゃないかな」

「兄貴の態度が変わったの？」

「ううん、優しいままだけど……私との結婚、迷ってるんじゃないかな」

「それはないと思うけど……素直に聞いてみたら？」

「聞けないよ、そんなこと」

「どうして？」

「嫌われる」

「嫌わないよ。自分の気持ちはちゃんと伝えないと兄貴だってわからないよ。自分に嘘ついてニコニコしてたって仕方ないだろ？」

「嘘……かもしれないけど、洋平との付き合いで不安を抱えてるなんて知ったら、俺はおまえを幸せに出来ないんだなって、彼、引き下がっちゃうよ」

「決め付けてどうするんだよ」

「自分だったらそう思うし」

「兄貴は里奈ちゃんじゃないんだよ？」

「でも、わかるんだもん。今までずっとそばにいたから」

　何を望んでいて何を拒否するのか、わかり過ぎて動けなくなる事もある。

抵抗15

「だからって、今の里奈ちゃん、しがみついてるだけじゃん。対等じゃなくていいの？」

「いやだ」

「俺にはこんなに反論してくるくせに」

「准ちゃんなら平気なんだもん」

「俺には嫌われてもいいの？」

「准ちゃんは嫌わないよ」

「俺って信用されてるんだ」

　パートナーとは建前で付き合い、その弟とは本音で付き合う。逆ではないか。私はそう思って苦笑した。

「でもさ、そんなに辛いなら我慢することないんじゃないの？　さっさと別れちまえよ。子どもなら俺が育ててやるよ」

　准也があまりにも簡単に、すぐにそうするとでもいうようにさらりと言った。

「……何、言ってんの？　変なこと言わないでよ」

　私は一瞬戸惑ったものの、冗談として受け流した。

「もし本当に裏切られたら、俺んとこ来な」

　准也は構わずに続ける。

「俺んとこって？」

「里奈ちゃんと子どもくらい養ってやるよ」

「学生がどうやって養うのよ」

「働く。学校なんか辞めたっていいよ」

「そういうの、慰めにならないんだけど」

　准也は時々真顔で私をからかう。私が真面目にうろたえると、してやったりといった顔をして大笑いする。今回もその口だろうと私は取り合わずにいた。

　ところが、准也は私の予想に反した行動に出た。長い腕をす一っと伸ばし、座ったまま私を自分の体に引き寄せたのだ。

「准ちゃん？」

　私は驚きながら名前を呼んだ。

「嘘ついてたの、俺の方かもしれない」

　准也が私の耳元で呟いた。切羽詰ったような准也らしくない声だった。

「ちょっと……准ちゃん？」

　私は体を離そうとしない准也に呼び掛ける。

「もう嘘つかなくてもいい？　里奈ちゃんの辛そうな顔は見たくない」

　准也の手に力がこもる。

「准ちゃん、痛い……」

　私が小声で抵抗しても、准也はその手を緩めない。

「俺なら里奈ちゃんを不安にさせないよ。淋しがりなことは俺の方がよく知ってる」

　准也が私の髪に指を埋める。

「困るよ……」

　私は抵抗する。

「里奈ちゃん、俺のそばにいてよ。兄貴のことなんか忘れて……」

　准也は私の首筋に唇を押し付ける。

「やめて……」

　いつもの准也じゃない。私は准也が少し怖くなり始めた。

「俺のものにしたい」

　准也は手の平を徐々に私の頬に移動させ、両手で包み込んだ。准也の顔が鼻が触れるほどに近づく。

「やめて！」

　私は反射的に准也を突き飛ばした。

「准ちゃんまで私を一人ぼっちにしないでよ……」

　私は孤独感に打ちひしがれた。

抵抗16

准也の部屋を出て、私は自分の家に戻ってきた。

玄関の前に立ち、小さく息を吐く。携帯の時計を見ると、今日子さんの家を出てきてから三時間が経っていた。

私は洋平に何を言われるのだろうと不安になりながら、力なく玄関の扉に手をかけた。カラカラと滑るように開くはずの玄関が私の手の動きを止める。普段、誰かが家にいる時には必ず鍵を開けている扉だった。

洋平は怒っているのだろうか……。

私は深くため息をつきながら、バッグから鍵を取り出した。あまり音を立てないように鍵穴に差し込む。カチャという小さな音とともに、普段は意識したことのない振動が手に伝わった。そっと玄関を開けると、部屋の中はしんと静まり返っていた。

私は恐る恐る玄関の中に入った。そこに洋平の靴はなかった。

いないのかな……。

そう思いながら靴を脱ぎ、重くなった足を引きずって部屋の奥までいった。テーブルの上には今朝洋平が見ていた新聞が、続きを読まれるのを待ち望んでいるかのように開かれたままになっていた。

私の足は無意識に工房に向いた。棚の前に立ち、一番手前にあった黒陶土を手に取って作業台の上に置いた。買ってはみたものの、黒い作品を作るためのインスピレーションがわかず、ずっと放置していた粘土だった。

ぼんやりと空中を見つめながら、その粘土をこねた。そして、あまりこね切らないうちにろくろの上に載せた。スイッチを入れてろくろを回転させてから、窯の横にある水道で手を濡らした。ぽたぽたと床に雫を垂らしながら、ろくろの前に腰を下ろした。回転する粘土にも水を垂らし、軽く触れた。

何も作る気のない私の手の中で、無防備な粘土はただ、円錐状に姿を変えていく。徐々に乾いていく私の手の中で、意思を持たない粘土は、ぽろぽろとひび割れていく。

洋平はまだ今日子さんの家にいるのかな……。

そう思うと同時に、私はこれまでのことを後悔した。

妊娠とわかった時、あの診療所にさえ通わなければ今日子さんと洋平が再会することもなかったんだ。私が具合悪くても、この家に今日子さんを上げなければ、プライベートを邪魔されずに済んだんだ。洋平が今日子さんと打ち解けているところを見なくて済んだんだ……。

私は悔しさで胸が張り裂けそうになった。

私は立ち上がり、フラフラと棚の前に歩いていった。以前、洋平が「渋くていい感じ」と褒めてくれた小皿が目に留まった。しかし、それは同時に、今日子さんが買い物に来た時に「風情があるね」と言った作品でもあった。

私は何かにとり憑かれたように、その小皿に手を伸ばした。触れた途端、陶器の冷たさが私の心を刺し、私は衝動的に小皿を床に投げつけた。いくつかの破片になった小皿は鋭利な凶器となり、跳ね返って私の頬を一かすりした。赤い滴が、点々と床に染みを作っていく。私は正気を失い、二十近くあった棚の作品を手当たり次第壊していった。

抵抗17

　床は、バラバラに砕け散った陶器で埋め尽くされた。棚には半磁器土で作った湯飲みがぽつんと残った。つわりの始まった日、道の駅に行く直前に二人で作った湯飲みだ。

　私は最後に残ったその作品を震える手で掴んだ。両手でも余る太さと安定感を持つ湯飲み……それは洋平の両手で包み込むのにちょうどいい大きさだった。

　もういい。何もかも私の前から消えてしまえばいい。

　私は指先に力を込め、湯飲みを握り締めた。頭上高く持ち上げ、目をきつく閉じた。

　ところが。

　振り下ろそうとしたその時、湯飲みを掴む私の手の甲を温かくて柔らかなものが包み込んだ。ろくろの前に二人で座り、映画の真似事をしたあの時の洋平の手の感触だ。

　私はハッとして湯飲みを見上げた。手の感触は錯覚だった。でも、見えない力が私の最後の行動を制している、そう思えてならなかった。

　私はそっと手を下ろすと、湯飲みを胸に抱いた。

「洋平……」

　ゆっくりとその場にしゃがみ込み、私は声を上げて泣いた。洋平にそばにいてほしくてたまらなかった。

　窓から西日が差し込んでいる。床一面に広がった破片が、陽の光に照らされてキラキラと輝いている。

　ぼやけた視線の先でそれらを見た時、私はふと、『ふるさとの森』に行こうと思った。いつも洋平と一緒に出掛ける自然公園だ。かつて二人で見た、夕陽に照らされて赤い光を放つ山を眺めたくなった。

ふるさとの森1

　街の片隅に、そこだけ数十年前にタイムスリップしたような場所がある。

　公道から一歩足を踏み入れると、暖かい季節の訪れをじっと待っている田んぼが視界に広がる。その両脇には平坦な田舎道が遠くまで続き、その道に沿って小さな山が幾つも重なり、奥へ行くに従い、緩くカーブしながら向かい側の山と重なっている。

　『ふるさとの森』の入り口に立つと、子ども達に帰宅を促す夕刻の鐘がなった。その鐘に共鳴するかのように、花壇に植えられたコスモスが揺れている。

　その花壇の横で、折り畳み式の小さな椅子に座って、スケッチブックに写生している男性がいた。琥珀のサファリハットを被っている。私の父親世代だろうか。母と離婚後の父にほとんど会うことがなかった私は、その男性の背中に父親の姿を見た気がした。

　引き寄せられるようにして、私は男性の斜め横からスケッチブックを覗いた。そこには、連なる山を背にした農村風景と、散策している人々が小さく描かれていた。

　気配を察した男性が、ほんの少しだけ顔を私の方に向けた。

「こんにちは。お散歩ですか？」

　再びスケッチブックに視線を戻した後、男性が小声で呟いた。私は、男性が誰に話し掛けているのかわからなかった。周りを見渡すと、そこには男性と私しかいない。

「ここの風景、のどかでいいでしょ？　好きなんですよね、ここが。休みっていうとすぐ来てしまいます。ぼんやり見てるだけでも心休まるんですけど、絵を描いていると無心になれるんですよ。カメラ持ってきて写真を撮る時もあります」

　私が何も訊かないのに、男性は一人で話している。外見の寡黙な印象とは反対に、明るく軽い語り口調だった。

「僕の今日の絵、よく描けてると思いません？　山の蒼々とした葉の一枚一枚がうまく表現できたと思っているんです。いつもここに座って少しずつ角度を変えて描いてるんですけど、山って毎回表情が違うんですよ。今日は怒ってる？　とか、今日は機嫌が良さそうとか、面白いですよ」

　私も洋平と来るたびに同じ事を考えていた。私は、同感、の意味で少し笑った。

　男性は続ける。

「人も同じですよね。その日の体調、その日の出来事によって、表情がいろいろに変化する。一般的に男は女性に比べると表情が乏しいみたいだけど、僕は喜怒哀楽で顔が全然違うって言われます。今日は気分がいいからかなりいい顔してませんか？」

　自分を指差す男性に、私はさっきよりももう少し笑って頷いた。

「お嬢さん、笑った方が可愛いですよ。笑わなくても美人さんだけど、笑った方がもっと素敵。輝いてみえる」

　大袈裟なくらいに抑揚をつけ、私の事を褒める男性の言葉に、私は思わず「アハハ」と笑ってしまった。

「ほら、口角を上げるとますますいい笑顔になる。人生、どうせ生きるんなら笑って過ごしましょうよ。いろいろな悩みとか苦しいこととかありますけどね。それに振り回されちゃいかんのです。疲れたら、疲れたなぁって感じるだけ。辛かったら、辛いなぁって感じるだけ。どうして疲れてるんだろうとか、どうして辛いんだろうって深追いしちゃいけません」

　さらりとした語り口の中にとても深いものを感じさせる。私はこの男性の話を聞きながら、なぜか、自分の事をわかってくれそうな気がした。

「あの……」

　私は緊張しながら声を出した。

「はい」

　男性は返事をして優しく微笑んだ。私は小さく深呼吸をしてから問い掛けた。

「私、今、とても淋しい気持ちなんです。それも、ただ感じていればいいんですか？」

　私がそう言うと、男性は体ごとこちらに向けた。

「そう、ただ感じていればいい。淋しいと思ったらそれじゃダメだとか否定せず、淋しいねって感じてあげればいい。十分に感じてあげられれば、感情を解放できて楽になりますから」

　男性はゆっくりと語る。

「楽になる？」

　私は不思議に思って訊いた。

「うん。なりますよ。今、お嬢さんは自分が淋しいっていう感情を抱く事が悪い事だって思ってないですか？」

「思って……ます」

「そうでしょ。淋しいなら淋しいって思っていいんですよ。自分の感情だもん。自分が認めてあげましょうよ」

　男性は、語尾を上げて言った。

「自分で認める……ですか」

　私は男性の言葉を咀嚼し切れなかった。泣き過ぎたせいで、頭の中にぐっしょり濡れた綿が詰まっている。

男性が、座りませんか？　と言って、もう一台の折り畳んであった椅子を私に差し出した。

私は、ありがとうございます、と言ってから、男性の隣に腰掛けた。

「淋しさを誰かになんとかしてもらおうとすると辛くなるから気をつけてくださいね。もし何かするんだったら、その時間を使って自分磨きをするんです。オシャレでも勉強でもいい。時間を忘れるくらい何かに没頭するんです。時間を忘れられた時に悩みは消えて、自分を磨いた事で今よりも一層魅力的になります。そして、そんなあなたを御主人はほっとけなくなる……あ、彼に対して淋しさを感じているとは言ってないですよね。失礼しました」

私の膨らんだお腹に目を遣りながら男性が言った。洋平のことを御主人と呼んだのはこの男性が初めてだった。私は複雑な思いでその言葉を噛み締めた。

「気を悪くしたらごめんなさいね。お節介はここまでにしましょうか」

私が黙った事で、男性は勘違いした。

「いえ、気を悪くなんてしてません。今少し疲れちゃってて、頭が廻らなくて、ぐちゃぐちゃで、訳わかんなくて……」

御主人という言葉に拘っていただけの私は懸命に言い訳した。

ふるさとの森3

「そうでしたか。じゃあね、とっておきの呪文を一つ、教えてあげます」

　そう言いながら、男性は人差し指を立てた。

「呪文……？」

　私が訊くと、

「疲れた時の呪文です」

　と言って、男性は何かのおまじないでもするかのように声の抑揚をつけずに唱えた。

「許そう。許そう。自分のこと、周りのこと、すべてを許そう」

　言い終えると口調を元に戻し、「何も考えずに、ただ許そうって心で念じてください。何にも考えなくていいから。簡単でしょ？」と、付け加えた。

「はあ……」

　私は曖昧に答えた。非現実的な呪文などと言われて、正直戸惑ってしまった。でも、一度聞いただけで頭の中に残る言葉だった。

　許そう、許そう、すべてを許そう。

　疲れた自分を許そう。どうにでもなれと思った自分を許そう。

　洋平の朝帰りを許そう。女の子みんなに優しい洋平を許そう。

　いろいろと自分に当てはめていくうちに、なんだか言葉遊びみたいだなと、私は可笑しくなった。

　男性は水筒に入った飲み物を蓋に注いだ。飲みますか？　と勧め、私が遠慮するとそれをごくごくと飲み干した。

「何かに対してお嬢さんが腹を立てているとするでしょ。その怒りのエネルギーって物凄いもの

なんです。マイナスのね」

　男性は水筒の蓋を閉めながら言った。

「マイナス？」

「怒ってる時って精神的にとても疲れませんか？」

「あ……疲れます」

「それって、何かに怒りを向けているのと同時に、マイナスエネルギーで自分を攻撃しているのと同じなんです」

　私は自分に起きたことを思い返していた。怒りというと語弊があるが、洋平や今日子さんに対してそれに近い感情を持ち、自分も苦しんでいる。

「逆説的に言うと、何かに対しての怒りがなくなれば、自分を苦しめるマイナスエネルギーもなくなる。すなわち、人を許すことって結局は自分のためなんです。そう思って、すべてのことをただ許そうとしてみてください」

　男性は胸に手を当てて、「許そう、許そうってね」とやってみせた。

「いろんなことが許せると、物事にこだわらなくなってきて、自然と身の周りのことを受け入れられるようになりますよ」

「どうしても受け入れられないことがあるときは？……」

　今の私の状態だ。

「受け入れられない時は心が傷を負っているんです。見聞きするだけで胸が痛む時は、そのことによって傷ついている時なんです。だから、まずはその傷を癒しましょう」

「どうやって？」

「もう、自分のことだけを考えてあげてください。誰のことも考えなくていいんです。大好きな彼の事もね」

「それじゃ、自己中になりそう……」

「我が侭を言いなさいって言ってるんじゃないんです。自分に優しくしてあげるんです」

「え？……」

「気持ちに余裕がないのに人のために何かしようとすると疲れちゃいますから。頑張らなくていいんだよって、自分に言ってあげてください。たぶん、頑張った結果、思わしくない結果になって傷ついたんでしょうからね」

　洋平に気にしてもらいたくて私は背伸びをしていた。でも、嫌々ではない。自らの意志で頑張ったのだ。それがいけなかったというのか。周りの状況ではなく、自分で自分を傷つけていたのか。

「ニコニコしている人のそばにはいたいなぁと思うけど、仏頂面している人のそばにはいたいとは思わないでしょ？」

「ええ」

　私は二回軽く頷いた。

「幸せって奴も同じで、笑っている人の方がいいって思うらしいんです。逆に暗い顔をしている人のところに不幸ってやってくるらしいです。それ、覚えておいてください」

「はい」

　今度は深く一回頷く。

「今日の僕の幸せは、お嬢さんだから」

「そんな……」

　私は気恥ずかしくなった。

「今度会った時はお嬢さんの方から、おじさん元気？　って声掛けてくださいよ。楽しみにしてますから」

　男性の真心がしみじみ伝わってきて、私の頬は自然と緩んだ。

「お嬢さん、いい顔になってきたからもう一つだけ……僕の経験談を聞いてもらえますか？」

　男性はそう言うと、心なしか顔を赤くした。私は、どうしたんだろう、と思いながら耳を傾けた。

「僕ね、昔とても好きな女性がいたんですよ。その子のことを四六時中考えてたんです。彼女が今何をしているのか気になって仕方がなかった」

　男性は控えめな声で語り始め、遠い昔を懐かしむかのような表情をした。

「それでね、彼女が僕以外のことで楽しそうにしているのが正直すごく嫌だったんです。僕だけを見ていて欲しい、いつも一緒にいてほしいって思ってた」

　そう言って照れたように笑いながら、女の子みたいでしょ、と付け足した。

「それで、彼女と会うたびに、会えた嬉しさよりも不安をぶつける事の方が多くなってしまって、ついには彼女を怒らせてしまったんです。僕は君が抱いている夢の中に存在してるの？　って聞いてしまった。彼女は、夢は誰かが一緒じゃないと叶わないとは思いたくないって悲しそうな顔をしてました。彼女を僕の力で喜ばせてあげたい、彼女を幸せにするのは僕なんだって思い上がっていたんですよね」

「え……彼氏に、おまえを幸せにしてあげるって言われたら、普通、嬉しいと思いますけど……」

「いやぁ、実際僕がしていたのは独占したいが為の行動で、彼女の幸せを考えたものではなかったんです。自分の幸せしか考えていなかったんですよ。彼女は自分を取り巻くものすべてを大事にしていたいのに、僕は嫉妬するあまり、それを奪おうとしてたんですから」

　男性は今でも後悔しているのか、一度深くため息を吐いた。

「それでどうなったんですか？」

　私は、自分が洋平に対してしたことと重ね、男性のその後が気になった。

「彼女と連絡が取れなくなくなりました。それで何度も諦めようと思いました。自由奔放な彼女の考えを理解できなくて苦しかったのだから、もう忘れた方がいいって思ったんです」

「そうだったんですか……」

　陶器を割った時の私の心境と一緒だ、と思った。

ふるさとの森5

「でも、諦め切れなかった。彼女は友達と同様に、僕にもいろんなことをしてくれてたことを思い出したんです。それに感謝することなく、忘れようとしている自分が情けなくなりました。彼女に振られるのなら仕方ないけど、自分から諦めることないじゃないかって思いました。だから、彼女の選択肢の中に僕がいることを願いながら待つことにしたんです。それでね、彼女は僕の所有物じゃないんだからって考えるようにしたんですよ」

「所有物？」

「彼女は彼女の人生を生きているのであって、僕を裏切っていたわけじゃない。僕の物じゃないんだから、思い通りにしようとする方が間違ってたんです。仮に、彼女が僕から遠く離れていっても、それが彼女が望むことであるのなら遠くから彼女の幸せを祈ろう、僕は僕の人生をちゃんと生きようって思ったんです」

　男性は、今、決意したかのように力強く言った。

「でね、彼女がこう思ってくれたらいいのにっていう不安定な期待を持つ必要がなくなったから、すごく気が楽になったんですよ。これまで苛まれてきた不安って、彼女の本心がわからないが故の不安だったんですね。というか、感づいてはいたけど認めたくなくて、ずっと避けてきたことだったんです。でも、いざ確かめたら割り切って考えてる自分がいて、彼女の事を考える時間の他に、一人の時間も大切に出来るようになったんです。そうやって前向きに毎日を過ごすようになると、いい風が吹いてくるんですよね」

「いい風って？」

「彼女とまた会えるようになったんです」

　男性は嬉しそうに笑った。

「ホントですか！」

　私は思わず興奮した声を上げた。

「うん。彼女の方から誘ってくれて、久しぶりに話をする事が出来たんです」

「どうしてそういう展開になったんですか？」

「僕、ブログを書いていて、そこにポジティブなことだけを載せるようにしてたんですよ」

　ブログと聞いて、そんなに昔の事ではないなと思った。

「それを彼女が見ていてくれたらしくて……。会った時はそのことが話題になって、新鮮な気持ちで盛り上がりました」

「うわぁ、ドラマみたい」

　私はついはしゃいでしまい、慌てて口を押さえながら目を細めて笑った。

「少し距離を置いて冷静になれたのもあったんですけど、彼女は僕の所有物じゃないって思えるようになっていたことで、ヤキモキするような事でもすんなり受け止められたんです。自分、成長したなって思った瞬間でしたね」

　男性はそう言って、誇らしげな顔をした。

「ね、だから、疲れている今は何も考えないで自分を大切にしてあげてください。元気が出てきて前向きになれた時、自然に笑顔になれる日が必ず来ますから」

　男性は最初の話に戻した。

「はい。自分の時間、有意義に過ごせるように意識してみます」

　私はここに来た時には全く見えなかった一筋の光が見えた気がした。

「無理はしないでね。些細な事でいいんです。小さな幸せを感じていると、積み重なって物事を穏やかに見られるようになりますから。例えば、僕と話が出来て幸せ、とか」

　男性はまた、冗談交じりに自分のことを喜びの対象にしてにっこり笑った。

　私はこの男性の事を、このタイミングで出逢うべくして出逢った人だったのだなと思った。

　私が微笑むと、男性はきりっとした口調で言った。

「信じる事を諦めないで。不安な事があってもそれに負けないで。自分は今、どうありたいのか

を考えて毎日を過ごしてくださいね。私はこの辺にいつもいますから、またお話しましょう。あれ？……お嬢さん！　大丈夫？　お嬢さん！」

　男性の優しい心遣いで気持ちが軽くなると同時に、私はその場で気を失った。

文字の滲む紙1

「気が付いた？」

　意識が戻った時、私は病院のベッドの上にいた。病室ではなく、処置室のような狭い場所だった。腕には点滴の針が刺さっている。

「あ……」

　私はベッドの脇に座っていた洋平を見つけ、「私……どうしちゃったの？」と訊いた。まだ、頭がぼんやりしている。

「親切な人が救急車呼んで病院まで付き添ってくれたんだよ。それで電話をくれたんだ」

　洋平が静かな声で説明した。

「親切な人？」

「うん。ふるさとの森で里奈が急に目の前で倒れて、妊婦さんだから大事をとった方がいいだろうって救急車呼んだんだって。連絡先がわからなくて、失礼かとは思ったけど持っていた携帯電話を見せてもらったって言ってた」

　私は記憶の糸を辿り、絵描きの男性と話していた事を思い出した。

「着信とリダイヤル履歴が一番多いのが御主人だろうって掛けてきてくれたんだよ。その人がいてくれて良かったよ。ここの先生に、奥さん、過労に貧血気味ですよって言われちゃうし……。探してたんだぞ。急に今日子んちから飛び出していくから、そのあとからずっと」

　洋平は表情を強張らせながら言った。怒っているようだった。

「ごめんなさい……」

　私はようやく今日一日の出来事を思い出した。

「家に戻ってるかと思ったらいないし、准也に聞いたら少しいたけどすぐに出て行ったっていうし、仕方がないからもう一回家に戻ったら、陶器がすごいことになってるし」

私と洋平は、ことごとくすれ違っていた。准也は洋平に、私とのことを話してはいないようだ。

「電話くれたおじさんが、奥さん、悩みがあるみたいだから聞いてやってねって言ってたよ。気を失ってる間、ずっと俺の名前、うわ言で呼んでたって。どうした？　里奈、なんか変だぞ」

私は口を閉ざしたまま、洋平の目をじっと見つめていた。

「奥さんはあなたのことを信じているよって。本音で話し合うことが大切だよって言ってた。俺、里奈に何か悲しい思いさせてるのかな。教えてほしいんだけど……自分では悪いことした覚えがないから、聞かせてもらわないとわからないんだ」

洋平は神妙な顔で言う。

私は、こうして聞かれなければ、しばらくの間は静かに有りのままの状況を受け入れようと思っていた。あの男性の言う通り、一人でも生きられるくらいの強さを持ち、心穏やかになる日を待とうと思っていた。でも、洋平は私の気持ちを理解しようとしている。今、正直になる必要があるのかもしれない。

私は少しの間考えて、どうしても心に引っかかっていることだけを伝えることにした。

「あのね、私、洋平と今日子さんがいるところを見ていると、すごく淋しい気持ちになっちゃうんだ」

そう言って、恐々洋平を見た。

「え？……」

　洋平は戸惑いの声を上げ、それきり黙ってしまった。私はちゃんと話さなければ、と思った。

「今日子さんが中学の同級生っていうのがわかってから、私の知らない洋平がたくさん見えてきて、悲しい気持ちになる事が多かったの。洋平が今日子さんの料理を美味しそうに食べるのを見るのが辛かった。私が作った料理で美味しそうな顔させたかった。今日子さんと買い物に行って帰ってきた夜から何日か、あまり話をしてくれなくなった時、今日子さんのことで何かあったのかと思って不安だった」

　私がそこまで言うと、洋平が眉をひそめた。

「俺は今日子のことなんて何とも思ってないよ。だから、今日子と会うときは里奈も一緒に連れてったんだし」

　洋平は悲しげな目をした。小さくため息さえも吐いている。

「うん……ごめん。そうだよね。ただの嫉妬だよね」

　私の言葉は、明らかに洋平を責めている。疑っている。信じていないと公言しているようなものではないか。本音と疑いを掛けることとは違う。もっと慎重に言葉を選べばよかった。そう後悔した。

　重い空気に包まれた。洋平は何も言葉を発しない。私は泣きたいのを必死で堪えていた。

「でも朝帰りが続いてた時のことは話しておいた方がいいよな。心配掛けたんだもんな」

　洋平が何かを思い直したように言葉を繋いだ。そして、ふっと表情を柔らげた。

　私は少し身構えた。洋平が話そうとする内容によっては、いくら洋平に悪気がなくてもまた心が痛むかもしれない。でも勝手な思い込みでいじけているよりは、はっきりさせた方がいい。私はそう思って覚悟を決めた。

「今日子と買い物に行った日、俺、今日子の相談を受けたんだよ。今日子には中学三年生の弟がいるんだけど、最近引きこもりしてるから、どう接したらいいか教えてほしいって。それで、職

場でのカウンセリングが終ったあと、弟に会いに今日子の実家に通ってたんだ。彼、夜型の生活してるから夜しか話が出来なくて」

　今日子さんには年の離れた弟がいた。初耳だった。

「彼さ、小学校の頃から友達には恵まれてて、ひょうきんだから目立つ存在だったんだよ。でも、勉強はあんまり好きじゃなかったんだな。親もその辺のところは本人次第っていう考えがあって、無理強いしなかったんだって。でもさ、今の小中学生って塾に行くのが当たり前みたいになってるだろ？　小学校の時はまだクラスに緩さがあったけど、中学行って定期テストが始まってから、一緒に適当やってた友達がみんな必死に勉強するようになったんだって。先生も授業は出来る子にペースを合わせるし、進むスピードも小学校の比じゃないから、彼はあっという間に置いてかれちゃったんだよな。たわいもない話は友達同士で出来るけど、勉強に関しては『そんなのもわからないの？』って言われそうで聞けなくて、だんだんと疎外感を抱くようになったみたい。そうなったら六時間ずっと席についてるのって苦痛でしかないよな。それで朝になるとお腹が痛くてトイレから出られなくなって不登校になったってわけ」

　想像もしていなかった内容だった。体の力が抜けると同時に、今日子さんの弟のことが気になった。

「弟さん、家にいて何してるの？」

「親に反抗してるわけじゃないから、家の手伝いしてるみたいだよ。料理とか、皿洗いとか、掃除とか」

「男の子なのに偉いね」

「親が、働かざるもの食うべからずって言って、小遣いは手伝い一回に付きいくらってあげてたみたい」

「なるほど」

「まあ、生きていく上で必要な事を身に付けさせたいっていう考えがあってやってることなんだけどね。だから、家事は一通りできるみたいだよ」

「一人暮らしできるね」

「出来ないよ」

「どうして？」

「引きこもってるんだから。外で働いて、食べていく為の金稼がなきゃ自立できないじゃん」

「そっか……」

「で、このままじゃまずいっていうんで俺が呼ばれたんだ」

　今日子さんの弟は、中学生という大人になる一歩手前で、どうしたらいいかわからないストレスと闘っていた。元々心身共に健康で人として何も問題な子が、学校という猛スピードで流れるベルトコンベアーに乗り、その速さに合わせる事をしなくなった時から孤立し、自ら道を切り拓く余裕をなくしていく。個を大切にすることが出来ない環境。何かが間違っている。

「なんだか、切ないね」

　私はしっくりくる言葉が見つからないまま呟いた。

「男同士だから、腹割っていろんなこと話したよ。でさ、彼、ボクシングが好きだって言うから、今度観に行かないかって誘ったんだ。俺もジム通ってた事あったから意気投合してさ。それで心を開き始めてくれたんだ。そこに辿り着くまで一週間掛かっちゃったんだよ」

「学校にボクシング部......なんてないか」

「ないみたいだね」

「近くにジムないの？」

「ある。だから行きたいみたいよ。親も通わせてもいいって思ってるみたい」

「そうなんだ。ボクシングがきっかけで学校にも行けるようになるといいね」

「まあな。でも、焦りは禁物だから、まずは彼自身の自信を取り戻すことが先決かな。一歩前に踏み出せれば状況が変わってくるからね」

「洋平がついてれば大丈夫だよ」

　私の曇っていた心が半分晴れた。でも、今日子さんに対する洋平の気持ちはわからないままだ。彼がどう思っていようとすべて受け入れるつもりなのに、感情は私の表情を勝手に操作する。洋平はそれをすぐに読み取った。

「今日子はいい奴だよ。さばさばしてて自立心旺盛で、人の力がなくてもどんどん前に突き進んじゃう。俺からすると女っていうより同性って感じなんだよな。見た目はずいぶん女っぽくなったけどね」

　洋平は今日子さんの弟の話を挟みながら、その前に私が話したことを覚えていた。

　私は心がちくちく痛むのを感じながら、今度こそ洋平を責めるのはやめようと、自分の嫉妬心を必死に抑えた。

　その気持ちが流れを変える力となったのか、洋平が意外な事を言った。

「でもあいつ、彼にぞっこんなんだよな。ついこの間、プロポーズされたんだって大喜びしてた」

「え？　今日子さん、彼氏いるの？」

　私はまた、洋平に驚かされた。

「そうだよ。今日子、そういう話はしてなかった？」

「全然」

　私は首を横に振った。

「そういう奴だよなー。自分の恋愛話、ホントにしないんだよ。少しくらい話せば可愛げがあるってのにな」

　度が過ぎるのはどうかと思うが、今日子さんに彼がいることを聞いていたら私の不安は軽減されていたかもしれない。私の体から、弟の話の時とは比べ物にならないくらいの力がごっそり抜けていく。私はほとんど聞き取れないような声で「彼がいたんだ……」と呟いた。

「だから、心配するなって。大丈夫だから、な？」

　洋平は私の頭を軽くポンポンと叩いた。

「うん……」

　大丈夫だから……。洋平が私を安心させる時のセリフだ。

「今日子とはただの中学の時の同級生。それ以外の何ものでもないんだから」

「うん……」

　信じるよ……。

　そう言いたかったが声にならなかった。心配がなくなっても、心が解け切れていない。

「里奈のお腹には俺の子がいるんだぞ。俺、生まれてくるのをすっごく楽しみにしてるんだから」

「うん」

　子どもの話になって、私はようやく笑うことが出来た。

「だから、体を大事にしてくれよな」

「うん」

　洋平が愛しげな顔をしながら私のお腹を触った。私は洋平の大きな手と、お腹を蹴って自己の存在をアピールする命を同時に感じた。私の愛する者が内側と外側で接点を持っている。不思議な感触だった。

　点滴が終わり、帰宅許可が出たので、私達はキューブに乗り込んで自宅へと向かった。

　フロントガラスの向こうに三日月が見える。私達を導くかのように、真正面で綺麗な金色に輝いている。

「洋平」

　自宅の玄関前に着いた時、私はエンジンを切った洋平に話し掛けた。

「んー？」

　洋平は、キーを抜きながら間延びした返事をした。

「あのね、聞きたい事があるんだ」

　私は、速く打ち始めた鼓動を気にしながら言った。

「なに？」

　洋平は静かになった車内で、体を私に向けた。

「洋平は、私のこと好き？」

　私はじっと洋平の目を見つめた。洋平は一瞬、不意をくらったような顔をした。でも、私の切羽詰った顔を見たせいか、すぐに「うん」と頷いた。そして、

「好きだよ。俺の奥さんだもん」

と、付け加えた。

「私のこと、大事？」

　私はこの際、聞きたかった事をすべて聞こうと思った。

「大事だよ。当たり前だろ」

「私といて楽しい？」

「楽しいよ。里奈は面白いし、やることお茶目だし、おっちょこちょいだし」

「愛してる？」

　私がそう訊くと、洋平は「ここで言わせるのか？」とぶつぶつ言いながら、私を抱きすくめて「愛してるよ」と囁いた。

　私はホッとしたのと、少しでも彼を疑った気持ちに苛まれて、私の視界はあっという間にゆがんで見えなくなった。洋平は、体を離すとすぐに私の泣き顔に気が付いた。

「ほら、また泣くー。泣かないの、いい子だから」

　洋平は私の背中を擦る。

「うん……」

　私は濡れた頬を何度も手で拭った。

「里奈さ、陶器全部壊したくせに、俺と作った湯飲みだけは壊さなかったのな。どうして？」

　洋平が優しい声で訊いた。

「あれも壊そうと思って上に振り上げたの。でも、その瞬間に洋平の手を思い出したの。私の手の上から重ねた時の……。洋平の手が私を止めたの」

　あの時、確かに洋平の手の温もりを感じていた。

「そうか。俺の魂が抜け出てって、里奈を止めたのかもしれないな」

　洋平は現実的ではない私の話を否定しなかった。

「どういうこと？」

　逆に私が訊いた。

「だって、もしその湯飲みも壊されてたのを見たら、俺、里奈のこと諦めてたかもしれないよ」

「そんなの……いやだ」

　私は眉間に皺を寄せる。

「だろ？　だから、里奈も俺の事を諦めないでくれーって魂がおまえに伝えにいったんだよ」

　洋平はにこりと笑う。

「壊さなくてよかった……。私、洋平と離れたくないもん……」

　私はまた泣きそうになった。

「あ、そうだ」

洋平が何かを思いついたように言った。

「入籍、しような。なかなか九州のお母さんのところに行けないから、事後報告でもいいよな」

一度、私か持ち持ちかけて拒絶された話だった。

文字の滲む紙6

「え……いいの？」

「うん。決めた」

　私の弱々しい問いに洋平は力強く答えた。嬉しかった。さっき堪えた涙が溢れてきた。

「近いうちに用紙を取りに行かなきゃね」

　私の涙を洋平は両手の親指で拭うと、「家に入ろう」と言って車を降りようとした。私はあることを思い出し、慌てて洋平の腕を掴んだ。

「どした？」

　洋平は浮かしかけた腰を再びシートに下ろした。私は洋平の腕を離して、ダッシュボードを開けた。洋平はじっと私の様子を見ている。私は乱暴に突っ込んであった一枚の紙を取り出し、洋平に差し出した。

「なにこれ、くちゃくちゃじゃないか……あ」

　くちゃくちゃであってもそれが何であるか、洋平はすぐにわかった。

「もう、私の名前と印鑑は押してある……」

　私は、婚姻届のしわを丁寧に伸ばしている洋平に言った。

「でも、文字がにじんでるぞ」

「だって、洋平が入籍なんか考えられないっていうから……」

「これ握り締めて泣いてたの？」

「そだよ」

　私はポロポロと零れる涙を止められないまま、洋平を思いっきり睨んだ。洋平はそんな私を見てにっこりと笑い、私の髪を撫でた。

「ごめんごめん、淋しい想いさせちゃったな」

「不安だった。お腹の子のこと、どうでもいいのかと思ってた」

「そんなことあるわけないだろ。よし、今から出しに行こう！」

「なにを？」

「婚姻届だよ。時間外受付っていう便利なものがあるんだから利用しない手はないだろ？」

　洋平はダッシュボードの中をごそごそと探り始めた。

「何、探してるの？」

　洋平は私の質問には答えず、「あった、あった」とボールペンを手に取った。

「なんか台になるもの……地図でいいや。ここに俺の名前を書くんだよな。坂本洋平っと。なんかいろいろ書くことあるな。よし、走りながら書こう」

　洋平は膝に地図と婚姻届を置いて、キーを差し込んだ。

　短い間隔で設置されている信号で止まるたびに、「住所は……親の名前は……」と空欄を埋めていく。

　役所の駐車場に着いた時、洋平は用紙のすべての欄に記入が終っていた。洋平は「書きそびれたところはないよな」と、私に用紙を見せた。

「洋平……」

　私は一ヶ所、不備を見つけた。

「印鑑……押さなきゃ……」

　私がその部分を指差すと、「あ、そっか……」と洋平は呆然とした。

「印鑑忘れてた。家に取りに帰るの、面倒だなぁ。朱肉なら受付あるだろうから拇印でもいいか聞いてみるか」

　洋平は、大丈夫だよな、と一人でさっさと事を進めている。車から降りると「行ってみよ」と私に声を掛けた。

　私は車に乗っている間、彼の忙しない動きを眺めながら嬉しさで満たされていた。洋平の誠実さがひしひしと伝わってくる。私はこの人と出会えて本当に良かったと思った。

　私はようやく彼を引き止める心の余裕ができた。助手席から降りて、洋平のところまで小走りした。洋平の前に立ち、彼の胸の前で両手をかざして引き止めた。

「洋平、ありがと。いいよ、明日にしよ」

　私は笑ってそう言った。

「いいよ、せっかく書いたんだし」

「ううん、拇印で平気だったとしても、今日はこれだけじゃダメなの」

「どして？」

「戸籍謄本がないんだもん。家にあるけど」

「あ、そっかぁ……じゃあ、印鑑と一緒に取りに帰るか」

「いいって……貸して」

　私は婚姻届を洋平から受け取ると、小さく折りたたんでスカートのポケットにしまい込んだ。

「明日、新しいのもらいに行こう。こんな涙でぐしゃぐしゃの用紙で婚姻届出したら、なんだか前途多難な気がする」

「アハハ、それもそっか」

　洋平は笑いながら納得した。

「洋平……」

　私は洋平の首に腕を回した。抱きついた私の背中に洋平も腕を回した。私は安心感に浸りながら、洋平の頬に自分の頬をぴたりとつけた。洋平は私のお腹を圧迫させないように、軽く背中に手を添えた。

　頬から幸せがじんわりと全身に広がっていく。

　私は洋平に回した手を離し、彼と目を合わせた。洋平は、「ん」と言って唇を寄せる。

　短くてもほんわかと優しいキスだった。

エピローグ

　十年後、私達はまだ陶芸の出来る家に住んでいた。私は相変わらずの料理下手で、洋平の得意な豚の角煮作りを隣で眺めてはニヤニヤしていた。私は三十四歳、洋平は四十歳になっていた。

　蝉の鳴き声がじりじりと響き渡る中、家の前の道路から、向かいに住んでいる雄太君の太く低くなった声が聞こえてくる。キャッチボールをしているようだ。相手は雄太君よりも六歳年下の我が息子、今年、小学校に上がったばかりの翔平だ。

「翔平、お昼だよー。帰ってきなさーい」

　私は玄関から顔を出して、翔平に向かって叫んだ。

「ええー、もうお昼？　つまんないよぉ」

　翔平は遊び足りなかったらしく、不満そうな声を出した。その反対側にいた雄太君を見ると、額から噴き出す汗を拭っている。私と目が合うと、にっこりと笑った。

「雄太君も一緒に食べない？　家に誰もいないんでしょ？」

　共働きの親を持つ雄太君を昼食に誘った。

「今日のお昼は何？」

　私のところに駆け寄ってきた翔平が聞いた。「冷やし中華よ」と私がさりげなく答えると、翔平は、

「お父さんの手作りでしょ？　やったぁ！　雄太君、お父さんの冷やし中華おいしいんだよ。お母さんのよりずーっとおいしいんだ。一緒に食べようよ」

　と言いながら、再び雄太君のところに走っていった。

「アハハ。翔平もうまいこと言うな」

　台所から出てきた洋平が、翔平の言葉を聞きつけて笑った。

「最近、すごく生意気になってきたのよね。口が達者っていうか。あなたそっくりよ」

　私は洋平に負けじと対抗した。すると洋平が、何かを小声で呟いた。聞き取れずにいた私は、「ん？」と訊いた。

「いや、おまえも変わったなと思ってさ。あ、いい意味でだよ。結婚前は何かあるとすぐいじけてたから」

「なにそれ。いじけてなんていないよ」

　私は怒りながら言う。

「言いたい事も言えずに、うじうじしてただろ。すぐ泣くし」

　洋平は面白がっている。私は当時の事を思い出して顔が熱くなった。

「最近は泣いてないもん」

「そういや、おまえのへの字眉、最近見てないな」

「子育てと陶芸やってると、ぼーっとしてる暇がないのよね。考え事しなくなったからかな」

「昔はしてたの？　考え事」

「してたよー。しょっちゅう、悩んでた」

「何を？」

「ん、……っと、言わない」

　子どもが出来る前。洋平の事でいじけたり、ヤキモキしたり、悩んだり、泣いたり。何かあると、自分の気持ちを立て直すのが大変だった。洋平を中心に考える私だった。

　でも、そんなことを今更口が裂けても言えない。言う必要もないと思った。私は今、誰かではなく、自分がどうありたいかを考えながら生きている。

「なんだよ、それ」

「繊細だったってことよ」

　私は誤魔化す。

「ハハ、過去形だ」

「い、今だって繊細だよ。男の子の母親やってるから、ちょこっと強くなっただけよ」

「そっか。まあその方が頼もしくていいけどな」

　洋平はそう言うと、台所へ戻っていった。

　私と洋平が話している隙に雄太君を引っ張ってきた翔平が、「腹減ったよー」と勢い良く玄関を開けた。

「はいはい、どうぞ上がってー」

　私は雄太君を招き入れ、奥のテーブルに座るように促した。

「受験勉強しなくちゃいけないのに、子どもの相手させてごめんね」

　私が翔平と雄太君に氷を入れた麦茶を出しながら謝ると、彼はこんなことを言った。

「野球は生き甲斐だから、僕も翔平くんとキャッチボールが出来て楽しいんです。ちょっと前に気持ち的に参ってた時があって、家から出られなくなったんだけど、野球と出逢って、僕、立ち直れたんです。こんなに楽しいこと、今までどうして知らなかったんだろうって思いました。なんかいろいろ、諦めなくて良かったなって……。こっちこそ、いつも翔平くんに感謝してます」

　途中、曖昧な表現で言葉に濁しながら雄太君が言った。

　私は照れながら微笑む雄太君を見ながら、以前どこかで聞いた事のある話だなと思った。野球ではなかった気がするが……。

　同時に、小さな棘を抜いた後のように、何も形跡のないところに微かな痛みを覚えた。何の事だったのかは思い出せなかった。

　忘れちゃうくらいの話だったんだな……。

　私は無理に記憶を辿らない方がいいかもしれないと思った。ただ、何かを諦めなかったから今があるんだという想いが、透明のシャボン玉のようにふいに心に浮かんで、ふわふわと揺れていた。

「おかーさーん、お腹すいたよ。はやくー」

　雄太君と隣り合わせに座った翔平が私を急かした。

「ごめんごめん、今、持ってくる」

　私は我に返りながら、台所に冷やし中華を取りに行った。

完